

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第196集

野地久保畠遺跡 森ノ上遺跡

Nojikubobata/Morinoue Site

東九州自動車道（県境～北川間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2

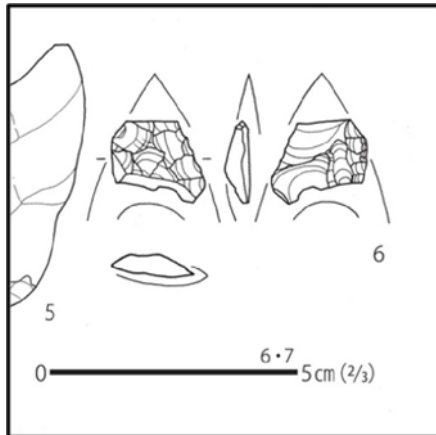
2011

宮崎県埋蔵文化財センター

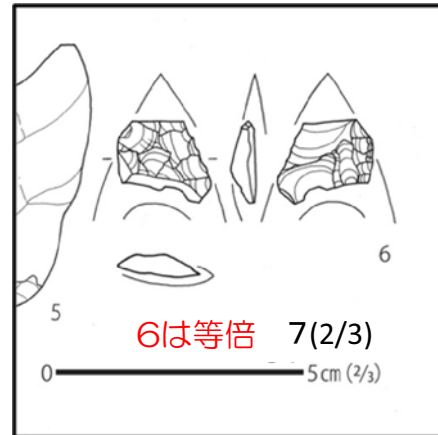
正誤表

・野地久保畠遺跡…21ページ 右上

<誤>



<正>



・森ノ上遺跡…173ページ 右下段

<誤>



SI110

<正>



SI111

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道（県境～北川間）建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成19年度から実施して参りました。本書には、平成20・21年度に実施した延岡市北浦町古江地区の遺跡発掘調査の成果を記載しております。

主な内容としては、縄文時代早期を中心とした多数の遺物が出土し、また168基もの集石遺構を検出した北浦町域最古遺跡である森ノ上遺跡、縄文時代晩期から近世後半までの小さな谷の歴史を物語る野地久保島遺跡が挙げられます。

延岡市北浦町古江地区・延岡市熊野江地区では発掘調査例がほとんどなく、これまでに知られていた当地域の歴史像を大きく塗り替えるような発見が相次ぎました。今回の調査で得られた多くの成果が、今後、当地域の歴史を解明する上で非常に貴重な資料になるものと考えられます。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成23年2月

宮崎県埋蔵文化財センター
所 長 森 隆 茂

例 言

- 1 本書は、東九州自動車道（県境～北川間）建設に伴い、平成20～21年度に宮崎県埋蔵文化財センターが実施した延岡市野地久保島（のじくほばた）遺跡・森ノ上（もりのうえ）遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。なお、森ノ上遺跡は、前回、弥生～古墳時代に関する調査分のみを報告し、今回はそれ以外の報告である。
- 2 発掘調査は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所の委託により、宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地調査のうち、以下のものについては業務委託した。
 - 基準点・グリッド杭等の設置
 - 野地久保島遺跡 …………… 株式会社東九州コンサルタント
 - 森ノ上遺跡 …………… 株式会社エースコンサルタント
 - 空中写真撮影
 - 野地久保島遺跡・森ノ上遺跡…………… 九州航空株式会社
- 4 現地での遺構図作成・写真撮影については、各遺跡の調査担当者が行った。
- 5 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで行った。
- 6 実測・製図・遺物写真撮影については職員間で分担して進めた。
 - 遺構製図 …………… 野地久保島：黒木誠／森ノ上：山田
 - 遺物実測・製図 …… (土器) 野地久保島：古田／森ノ上：山田
(石器) 野地久保島：藤木／森ノ上：山田
(錢貨) 野地久保島：古田
(陶磁器) 野地久保島・森ノ上：黒木誠
 - 遺物写真撮影 …………… 野地久保島：黒木誠／森ノ上：山田なお、石器製図は株式会社九州文化財研究所に、陶磁器製図は大成エンジニアリング株式会社に業務委託した。
- 7 自然科学分析として、フローテーション作業ならびに種子等の選別作業は黒木秀が行った。放射性炭素年代測定・種実同定は株式会社古環境研究所に委託し、その成果報告については、黒木誠が同社と協議・編集して掲載した。胎土分析は鹿児島国際大学に依頼した。
- 8 本文の執筆は分担して行い、文責は各文末に示した。
- 9 本書の作成は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、本書全体は黒木誠・山田が編集した。
- 10 出土遺物および記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 遺構種別は以下のように略称を用いた。
SA=竪穴建物跡 SB=掘立柱建物跡 SC=土坑 SE=溝状遺構 SI=集石遺構 S=遺構全般
- 2 遺物への注記には以下のような略号とした。
 - ・森ノ上遺跡 ……：モリA1234（森ノ上遺跡調査区内・1mグリッド）、モリA・モリ（表採）、マ（Ⅲ層・Ⅳ層混在地点）、リユーロ（土石流跡）、ハイセキ（配石）、内レキ（内部礫）、シクツ（試掘）
 - ・野地久保島遺跡：ノジクボ…S1～（現地記録時点の遺構No）・A1I～（グリッド層位）・C3b等（C3グリッド内のabcdの相当範囲）
- 3 本書で使用する土層および土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ならびに財団法人日本色彩研究所監修の『新版標準土色帖』に拠り記述した。
- 4 石器実測図への使用痕の表現として以下のようにした。
敲打痕＝コ 磨痕＝ス 摩滅痕＝マ 砥痕＝ト 潰れ＝ツブレ ※実測図中の網掛けは磨面・砥面を表す。

本文目次

第I章	はじめに	
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 調査の組織	1
第II章	地理的・歴史的環境	
	第1節 北浦町古江の地形環境	2
	第2節 北浦町古江の歴史環境	2
	第3節 中野内遺跡出土資料の補遺	4
第III章	確認調査と整理作業の概要及び経過	
	第1節 確認調査の方法・概要と経過	5
	第2節 整理作業の方法と経過	6
	第3節 県境～北川間における教育普及活動について	7
第IV章	野地久保畠遺跡	
	第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過	9
	第2節 基本層序と土層堆積	14
	第3節 遺構	14
	第4節 遺物	16
	第5節 小結	29
第V章	森ノ上遺跡	
	第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過	38
	第2節 基本層序と土層堆積	39
	第3節 旧石器時代の遺物	42
	第4節 縄文時代早期の遺構と遺物	44
	第5節 その他の遺構と遺物	115
	第6節 小結	117
第VI章	自然科学分析	
	第1節 野地久保畠遺跡の放射性炭素年代測定・種実同定	118
	第2節 宮崎県延岡市北部地域出土土器及び関連資料の考古科学的分析	125
第VII章	総括	
	第1節 出土遺物から見た北浦町の旧石器時代～縄文時代早期	135
	第2節 森ノ上遺跡における集石遺構の考察	137
	第3節 中世末～近世の野地	139
	第4節 胎土分析	141

挿図目次

第1図	報告する遺跡分布図	3
第2図	野地久保畠遺跡周辺地形・グリッド配置図	11
第3図	野地久保畠遺跡土層断面図(1)	12
第4図	野地久保畠遺跡土層断面図(2)	13
第5図	野地久保畠遺跡遺構分布図	15
第6図	野地久保畠遺跡遺構実測図(1) 掘立柱建物	17
第7図	野地久保畠遺跡遺構実測図(2) 土坑・横穴	19
第8図	野地久保畠遺跡遺物実測図(1) 土器・石器・陶磁器	21
第9図	野地久保畠遺跡遺物実測図(2) 陶磁器	22
第10図	野地久保畠遺跡遺物実測図(3) 陶磁器	23
第11図	野地久保畠遺跡遺物実測図(4) 陶磁器	24
第12図	野地久保畠遺跡遺物実測図(5) 陶磁器	25
第13図	野地久保畠遺跡遺物実測図(6) 陶磁器	26
第14図	野地久保畠遺跡遺物実測図(7) 陶磁器	27
第15図	野地久保畠遺跡遺物実測図(8) 土師質土器・石製品・金属器・銭貨・その他	28
第16図	野地久保畠遺跡地籍図 1887年頃	30
第17図	森ノ上遺跡周辺地形・調査区位置図	40
第18図	森ノ上遺跡土層断面図	41
第19図	森ノ上遺跡旧石器時代遺物分布図	42
第20図	森ノ上遺跡旧石器時代石器実測図	43
第21図	森ノ上遺跡散礫分布図	44
第22図	森ノ上遺跡グリッド配置図	46
第23図	森ノ上遺跡集石遺構分布図	47
第24図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(1)	55
第25図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(2)	56
第26図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(3)	57
第27図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(4)	58
第28図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(5)	59
第29図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(6)	60
第30図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(7)	61
第31図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(8)	62
第32図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(9)	63
第33図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(10)	64
第34図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(11)	65
第35図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(12)	66
第36図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(13)	67
第37図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(14)	68
第38図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(15)	69
第39図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(16)	70
第40図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(17)	71
第41図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(18)	72
第42図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(19)	73
第43図	森ノ上遺跡集石遺構実測図(20)	74
第44図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(1)	75
第45図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(2)	76
第46図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(3)	77
第47図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(4)	78
第48図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(5)	79
第49図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(6)	80
第50図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(7)	81
第51図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(8)	82
第52図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(9)	83
第53図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(10)	84
第54図	森ノ上遺跡縄文時代早期土器実測図(11)	85
第55図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(1)	86
第56図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(2)	87

第57図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(3)	88
第58図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(4)	89
第59図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(5)	90
第60図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(6)	91
第61図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(7)	92
第62図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(8)	93
第63図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(9)	94
第64図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(10)	95
第65図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(11)	96
第66図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(12)	97
第67図	森ノ上遺跡縄文時代早期石器実測図(13)	98
第68図	森ノ上遺跡縄文時代早期遺物分布図(1)	112
第69図	森ノ上遺跡縄文時代早期遺物分布図(2)	113
第70図	森ノ上遺跡集石遺構の掘り込み深さと遺構直径	114
第71図	森ノ上遺跡集石遺構における内部礫石材重量割合	114
第72図	森ノ上遺跡縄文早期土器分類重量割合	114
第73図	森ノ上遺跡B区遺構分布図	116
第74図	森ノ上遺跡B区縄文時代遺構実測図(SA12)	116
第75図	森ノ上遺跡A・B区その他の遺物実測図	116
第76図	K—Ca、Rb—Sr分布図	128
第77図	その他の分布図	129
第78図	クラスター分析結果	132
第79図	1887年頃と1995年の古江地区の比較	140

表目次

第1表	調査遺跡一覧表	6
第2表	野地久保畠遺跡遺物観察表(1) 土器	31
第3表	野地久保畠遺跡遺物観察表(2) 石器	31
第4表	野地久保畠遺跡遺物観察表(3) 中世陶磁器	31
第5表	野地久保畠遺跡遺物観察表(4) 陶磁器	31
第6表	野地久保畠遺跡遺物観察表(5) 瓦	34
第7表	野地久保畠遺跡遺物観察表(6) 石製品	34
第8表	野地久保畠遺跡遺物観察表(7) 土人形・金属器・銭貨	34
第9表	野地久保畠遺跡遺構詳細一覧表 横穴	34
第10表	野地久保畠遺跡ピット計測表	35
第11表	森ノ上遺跡旧石器時代石器観察表	42
第12表	森ノ上遺跡集石遺構一覧表	99
第13表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器観察表(1)	100
第14表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器観察表(2)	101
第15表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器観察表(3)	102
第16表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器観察表(4)	103
第17表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器観察表(5)	104
第18表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器観察表(6)	105
第19表	森ノ上遺跡縄文時代早期石器観察表(1)	106
第20表	森ノ上遺跡縄文時代早期石器観察表(2)	107
第21表	森ノ上遺跡縄文時代早期石器観察表(3)	108
第22表	森ノ上遺跡縄文時代早期土器分布表(点数・重量)	109
第23表	森ノ上遺跡縄文時代早期石器分布表(点数・重量)(1)	110
第24表	森ノ上遺跡縄文時代早期石器分布表(点数・重量)(2)	111
第25表	森ノ上遺跡A・B区その他の遺物観察表(1)	115
第26表	森ノ上遺跡A・B区その他の遺物観察表(2)	115
第27表	放射性炭素年代測定 試料と方法	119
第28表	放射性炭素年代測定 暦年代	119
第29表	暦年較正結果(1)・(2)	120
第30表	野地久保畠遺跡における種実同定結果	123
第31表	分析データ一覧	126

写真図版

図版 1	野地久保畠遺跡遺構 (1)	144
図版 2	野地久保畠遺跡遺構 (2)	145
図版 3	野地久保畠遺跡遺構 (3)	146
図版 4	野地久保畠遺跡遺構 (4)	147
図版 5	野地久保畠遺跡遺構 (5)	148
図版 6	野地久保畠遺跡遺物 (1) 土器・石器・陶磁器	149
図版 7	野地久保畠遺跡遺物 (2) 陶磁器	150
図版 8	野地久保畠遺跡遺物 (3) 陶磁器	151
図版 9	野地久保畠遺跡遺物 (4) 陶磁器	152
図版 10	野地久保畠遺跡遺物 (5) 陶磁器	153
図版 11	野地久保畠遺跡遺物 (6) 陶磁器・石製品	154
図版 12	野地久保畠遺跡遺物 (7) 播鉢・焙烙等	155
図版 13	野地久保畠遺跡遺物 (8) 瓦・金属品・銭貨・その他・近代陶磁器・参考資料	156
図版 14	森ノ上遺跡 調査区遠景	157
図版 15	森ノ上遺跡 掘削等の様子	158
図版 16	森ノ上遺跡 土層堆積と散礫・集石遺構	159
図版 17	森ノ上遺跡 調査風景	160
図版 18	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (1)	161
図版 19	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (2)	162
図版 20	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (3)	163
図版 21	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (4)	164
図版 22	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (5)	165
図版 23	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (6)	166
図版 24	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (7)	167
図版 25	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (8)	168
図版 26	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (9)	169
図版 27	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (10)	170
図版 28	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (11)	171
図版 29	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (12)	172
図版 30	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (13)	173
図版 31	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (14)	174
図版 32	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (15)	175
図版 33	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (16)	176
図版 34	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (17)	177
図版 35	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (18)	178
図版 36	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (19)	179
図版 37	森ノ上遺跡 縄文時代早期 集石遺構 (20)	180
図版 38	森ノ上遺跡 縄文時代早期 炉穴・その他遺構 (B区SA12 縄文時代後期～弥生時代中期)	181
図版 39	森ノ上遺跡 旧石器時代石器	182
図版 40	森ノ上遺跡 縄文時代早期土器 (1)	183
図版 41	森ノ上遺跡 縄文時代早期土器 (2)	184
図版 42	森ノ上遺跡 縄文時代早期土器 (3)	185
図版 43	森ノ上遺跡 縄文時代早期土器 (4)	186
図版 44	森ノ上遺跡 縄文時代早期土器 (5)	187
図版 45	森ノ上遺跡 縄文時代早期土器 (6)・石器 (1)	188
図版 46	森ノ上遺跡 縄文時代早期石器 (2)	189
図版 47	森ノ上遺跡 縄文時代早期石器 (3)	190
図版 48	森ノ上遺跡 縄文時代早期石器 (4)	191
図版 49	森ノ上遺跡 縄文時代早期石器 (5)	192
図版 50	森ノ上遺跡 縄文時代早期石器 (6)・その他遺物	193
図版 51	野地久保畠遺跡の種実	194

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道県境～北川間は、延岡市北川町長井の北川I.Cから大分との県境に至る延長16.5kmに及ぶ高規格幹線道路で、平成11年12月に整備計画が決定し、平成15年12月の国土開発幹線自動車会議において有料道路方式から新直轄方式に替わる整備区間に選定された。

本区間の埋蔵文化財取扱い協議は、事業の進展に伴い実施され、平成13年度に日本道路公団（現西日本高速道路株式会社）九州支社長から宮崎県教育長あてに、予定路線内の埋蔵文化財分布調査の依頼があり、同年度に宮崎県埋蔵文化財センターが同調査を実施した。

分布調査の結果、予定路線内に周知の埋蔵文化財包蔵地1箇所、協議が必要な箇所14箇所の計15箇所約73,000㎡を把握し、その旨日本道路公団九州支社長あてに回答を行った。

新直轄区間への選定後、埋蔵文化財の協議は、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所と県教育委員会文化財課の間で行われた。この間、路線計画の変更があった北川I.C部分の再分布調査の実施、路線全体のより詳細な現地踏査を実施した結果、14箇所約65,000㎡の調査対象地に絞り込み、発掘調査の措置を講じるようになった。

確認調査は最初に北浦I.C予定地の中野内遺跡から着手し、遺構や遺物を確認した。この結果を受け、平成19年12月に、国土交通省九州地方整備局延岡河川国道事務所長から県教育長あてに埋蔵文化財発掘通知が提出され、県教育長名で発掘調査の指示を回答し、本発掘調査に着手したのを皮切りに、他の遺跡も同様の措置を講じていった。（飯田）

第2節 調査の組織

本書掲載の遺跡調査・整理報告にあたって以下の組織が準備された（平成19～22年度）。（飯田）

（調査主体）宮崎県教育委員会
宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	清野 勉（平成19年度） 福永 展幸（平成20・21年度） 森 隆茂（平成22年度）
副所長	加藤 悟郎（平成19・20年度） 北郷 泰道（平成22年度）
副所長兼総務課長 総務課長	長友 英詞（平成20・21年度） 宮越 尊（平成19年度） 長友 英詞（平成19・20年度） 矢野 雅紀（平成22年度）
主幹兼 総務担当リーダー 総務副主幹 調査第一課長 副主幹兼 調査第一担当リーダー	高山 正信（平成19～21年度） 長友由美子（平成22年度） 長津 宗重（平成19～22年度） 南中道 隆（平成19・20年度） 飯田 博之（平成21・22年度）
確認調査担当	主 査 田村 浩司（平成19年度） 主 査 崎田 一郎（平成19年度） 主 査 竹田 享志（平成20年度） 主任主事 堀田 孝博（平成19年度） 主任主事 松本 茂（平成20年度） 主 事 松元 一浩（平成20年度） 主 事 岡田 諭（平成19年度） 主 事 岸田 裕一（平成19年度）
本調査担当	
森ノ上遺跡	主 査 山田 高大（平成20年度） 主任主事 藤木 聡（平成20年度） 主 事 岡田 諭（平成20年度） 主 事 早瀬 航（平成20年度）
野地久保島遺跡	主 査 黒木 誠司（平成20・21年度） 主任主事 重留 康宏（平成20年度） 主 事 岸田 裕一（平成21年度）
整理・報告担当	主 査 崎田 一郎（平成21年度） 主 査 黒木 秀一（平成21年度） 主 査 山田 高大（平成20～22年度） 主 査 黒木 誠司（平成21～22年度） 主任主事 藤木 聡（平成21年度） 主任主事 柳田 晴子（平成22年度） 主 事 古田 陽（平成21年度）

調査指導・協力等（五十音順）

（宮崎県文化財保護指導委員） 兒嶋宗次
（延岡市教育委員会） 太田尾峰子・尾方農一・小野信彦・
高浦 哲・山田 聡
（宮崎考古学会） 岩永哲夫

第II章 地理的・歴史的環境

本書で報告する遺跡は、宮崎県の最東北端部に位置する延岡市北浦町古江に所在する。

北浦町古江を含む日豊海岸国定公園（総延長85km・1974（昭和49）年2月指定）は「日向松島」とも呼ばれる美しいリアス式海岸である。また、天然記念物の高島のビロウ林など亜熱帯性植物の北限域でもある。

気候は、年間平均気温17℃前後でほとんど降雪もなく、日照時間も2,000時間を越えるように、総じて温暖な気候である。年間降水量は2,800mmに達する多雨地域であり、特に6～9月の梅雨・台風の時期の総降雨量は年間降雨量の6割に相当し、しばしば土砂災害や水害に見舞われている。沿岸の水温は、黒潮の影響を受けて概ね17～30℃と高く、岩磯域には珊瑚礁が発達している。

北浦町一帯は、海に面するという海上交通に恵まれた地理的条件を利用して、古くから大分や瀬戸内地域・大阪地域との交流があった。一方で、自動車主体の陸上交通にあっては“陸の孤島”と呼ばれたが、1974（昭和49）年の国道388号線整備、その後のトンネル開通によって徐々に利便性を増してきている。

第1節 北浦町古江の地形環境

すでに報告書第189集の第II章に北浦町の表層地質図・地形図を示しているので参照されたい。

陣ヶ峰（430.5m）をはじめ、飯塚山（571.4m）、岳山（613.8m）、黒岩峠を挟んで鏡山（645.4m）への連続が分水界となり、山腹斜面は開析が進んでおり、多くは急傾斜となって複数の崩壊地形も見られる。

古江は分水界よりも海岸地域に位置し、小河川とその河口部に形成された扇状地性の小規模な沖積平野が見られる。大規模な平野は存在しない。古江川は全長約4kmと分水界からの距離が短く、長雨の時は勢いよく流れる一方で、雨が止めば水が涸れてしまう。中港川は蟬谷の中腹に発し、全長約2.2kmの急流河川であり、水涸れの様子等は古江川に同じである。

森ノ上遺跡は中港川に開析された下上位岩石台地とその間を埋める扇状地にあたり、前回報告した古墳時

代等の集落は扇状地部分に、今回報告する縄文時代早期の集石遺構は下上位岩石台地部分に相当する。

第2節 北浦町古江の歴史環境

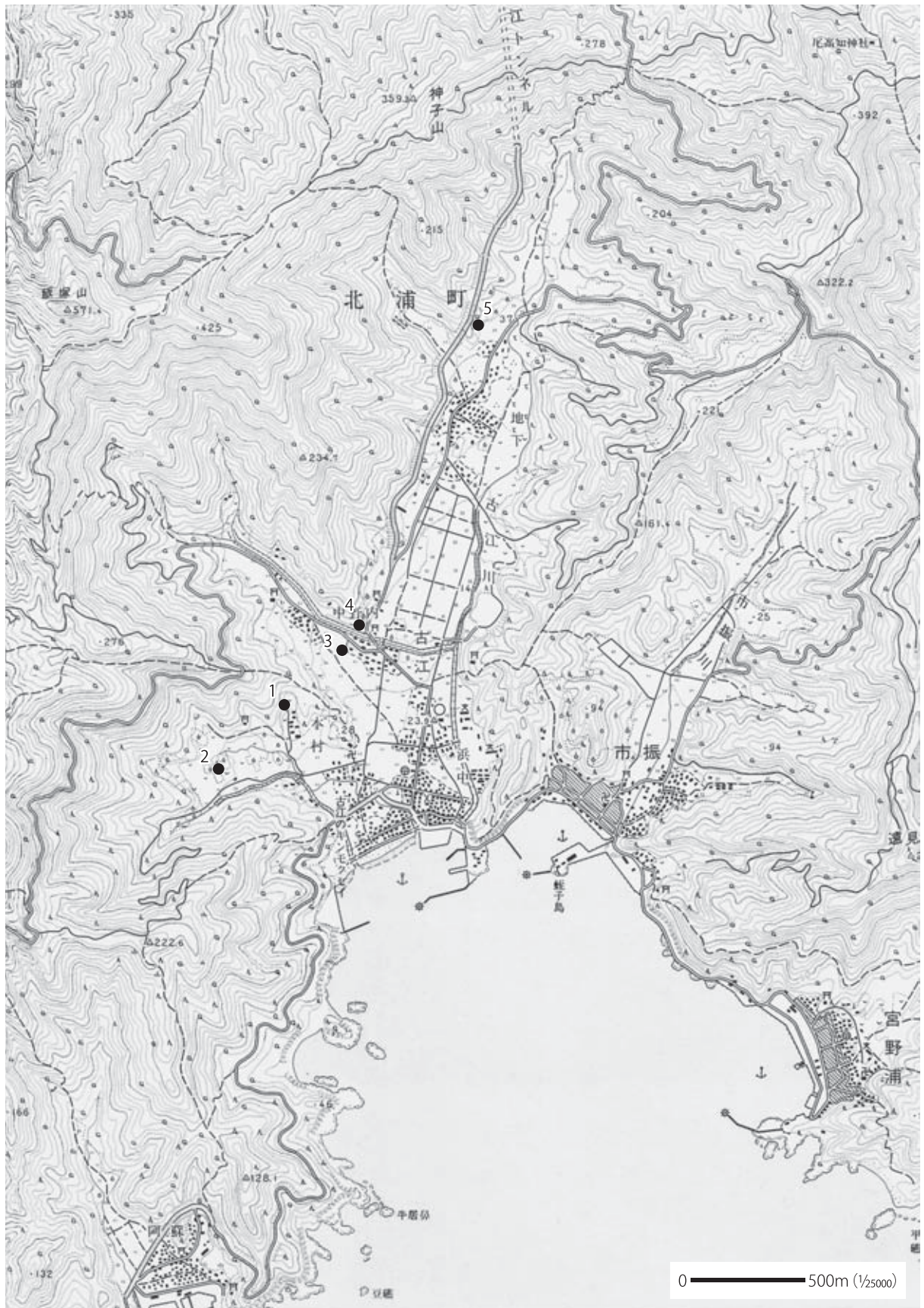
第189集で報告した発掘調査内容も加味しつつ、北浦町古江の歴史環境を概観する。

旧石器時代の資料は古江の北に位置する大分県佐伯市域でも少ない。海舞寺遺跡・中野内遺跡で旧石器が少量ながら出土したことは意義深い。

縄文時代も旧石器時代に続いて断片的ながらも遺構が残されている。縄文時代早期前葉の集石遺構1基が中野内遺跡で確認され、海舞寺遺跡でも赤化礫が散在し集石遺構の存在した可能性はある。縄文時代前期～晩期までは、遺構の発見例はないが、海舞寺遺跡の後期土器、鳴川引地の腰岳産黒曜石ならびにチャート製打製石鏃がある。周辺地では市振の後期の台付皿形土器・蛇紋岩製磨製石斧、熊野江のカラ石の元遺跡で前期曾畑式土器等がある。いずれの資料も山間部ならびに西北九州域と関係し、北浦町古江の縄文時代が閉鎖的でなく各地と交流のあったことがわかる。

弥生時代については、1992年の中野内遺跡の発掘調査で花卉状間仕切り住居等、中期後半～後期初頭の竪穴建物跡がすでに知られている。2007年以降の調査では、中野内遺跡に弥生時代前期末～中期前半の集落跡、後期例も含めて中野内・森ノ上遺跡で遺物が出土している。前期～中期の甕は下城式土器が出土した。前期～中期の壺は大分や北部九州で見られる頸部に削り出し突帯を持つなど外来的な要素の特徴を示すものがある。後期～終末期には中野内遺跡で安国寺式の複合口縁壺が少量出土し、森ノ上遺跡では口縁部長の長い後期後葉のものが数点見られた。その他、類品が西部瀬戸地域に分布する波状口縁を持つ土器が中野内遺跡で出土した。

石器について、中野内遺跡の弥生時代前期後葉～中期前葉・中期末～後期初頭は磨製石鏃・砂岩製礫器・青砂岩製敲石類・軽石製研磨具等が特徴的である。砥石や鉄器には、明確なものは見られない。



1 野地久保島遺跡 2 森ノ上遺跡 3 中野内遺跡 4 市之串遺跡 5 海舞寺遺跡

第1図 報告する遺跡分布図

古墳時代は、森ノ上遺跡で前期、中野内遺跡で中期～後期の集落跡が発見されている。出土した古墳時代前～中期土師器については第189集報告書第XI章第2節に編年図と詳述があるので参照されたい。

石器について、古墳時代前期は青砂岩製敲石類・砂岩あるいは粘板岩製砥石・軽石製研磨具が特徴的である他、中野内・森ノ上遺跡の各竪穴建物跡に台石が備えられていた。磨製石鏃は見られなくなり、断面が多角形となるまでよく研ぎ込まれた砂岩製粗砥や目の細かい粘板岩製仕上げ砥石は、鉄器普及との関連が想定される。中期も前期の様相と似ている。

町内で弥生時代後期以降の石庖丁が採集されているが、その時期の水田の存在は確認されていない。中野内遺跡出土の錘具は、大型のカゴ類やコモ、簾の類の製作に用いられた可能性がある。鉄器・鉄器生産関係では、中野内遺跡の中期と見られる高坏脚部転用のフイゴ羽口から小鍛冶のあったことがわかる。森ノ上遺跡からは前期の鉄鏃・刀子が出土している。

この他、中野内遺跡から大量のスガイ・ケガイ・ムラサキインコガイ・チョウセンハマグリ等の、潮干帯の岩礁ならびに砂地に棲息する採取容易な貝が出土した。森ノ上遺跡出土のイネ・コナラ属子葉・ブナ科果実・モモ核等とともに、古墳時代の食糧事情の一端を物語っている。

古代の様相は再び断片的となり、中野内遺跡で少量の遺物が出土している。

中世には、海舞寺遺跡で集落跡が確認された他、中野内遺跡で少量の遺物が出土した。海舞寺遺跡は地形・遺構分布より集落の端を調査しており、掘立柱建物跡群とともに11C後半より13C代の比較的古手の一群である玉縁口縁の白磁碗・龍泉窯青磁碗や石鍋・東播系須恵器片口鉢・北宋銭に加え、宮崎県ではほとんど知られていない「周防型羽釜」あるいは「周防型足釜」に相当する瓦質の羽釜が出土した。14C以降についても青磁碗・白磁皿や青花、備前焼四耳壺・播鉢・大甕等や土師質の鍋・釜、須恵質の甕・片口鉢、瓦質の壺・甕等の他、ヒメクボガイ・レイシガイ・ウズイチモンジ・ハマグリといった近隣の岩礁地や干潟等採取の海産貝や、イネ・オオムギ等も出土している。この他、16C初頭～後半にかけて北浦・熊

野江地区で多くの石塔が造立されていたことも明らかになった。

中世末～近世については遺物が海舞寺遺跡で備前焼播鉢や肥前系陶磁器、中野内遺跡で天目碗がわずかに出土し、明治時代以降の遺物も散見される。中世以降については『内藤家文書』等の文献史学の成果が数多く知られている。(黒木誠)

第3節. 中野内遺跡出土資料の補遺

第V章第5節の第75図Nは、延岡市北浦町中野内遺跡の東九州自動車道(県境～北川間)建設に伴う発掘調査によって出土した扁平片刃石斧である。中野内遺跡の報告書より遺漏したため、ここで報告する(写真は図版50、193ページ)。

扁平片刃石斧は、平成20年度に調査されたH区攪乱土中より出土した。法量は最大長7.2cm・最大幅3.2cm・刃部幅2.8cm・最大厚1.1cm・重量52.2gである。断面長方形で稜ははっきりしている一方で、全面ともやや膨らみを持っている。基部側には剥離整形に伴う凹部の研ぎ残しがある。刃部側は丁寧に研磨される。刃部側には使用によって生じた剥離がある。層灰岩とも呼ばれるような白色で節理の縞が見えるように風化する石材製で、石の目を刃に直交させる石斧製作手法が採用されている。この特徴は、北部九州の弥生時代前期以降に盛行する扁平片刃石斧そのものであり、Nは北部九州より何らかの契機によって中野内遺跡に搬入されたものと見てよからう。

宮崎県内で発見されている扁平片刃石斧は、本例を合わせても16点と少なく、その多くは宮崎平野部に偏在する(藤木2010)。中野内遺跡では、圃場整備に伴う発掘調査でも蛇紋岩製扁平片刃石斧が出土している。一方で、一般的に扁平片刃石斧とセットになる太形蛤刃石斧・柱状片刃石斧・石庖丁等は未確認であり、扁平片刃石斧のみが採用されたようである。これの意味するところはさらなる検討が必要であるが、北浦地域における弥生時代前期末から中期初頭の生業の特質・他地域との交流を物語るのであろう。(藤木)

第三章 確認調査と整理作業の概要及び経過

第1節 確認調査の方法・概要と経過

本書所収遺跡について、平成19年度は森ノ上遺跡、平成20年度は野地久保畠遺跡について確認調査が実施された。調査は、全地点で重機によるトレンチ掘削とし、アカホヤ火山灰層（以下、K-Ah）を目安に土層や遺構・遺物の確認、写真撮影、平板測量等を行った。

なお、平成20年度には、北浦町古江の平迫出口地点、北川町家田の飛石地点については、確認調査の結果、本調査対象から除外となった。各遺跡・地点の調査概要は以下の通りである。

※遺跡名（対象面積・確認調査日・調査担当）

森ノ上遺跡（5,700m²・2008年2月20日・崎田／堀田／岸田）の現況は宅地ならびに段々になる果樹畑地である。トレンチ1～13はK-Ahが部分的に残存したが、K-Ah上での遺構・遺物はない。K-Ah下は、トレンチ6・7・9・13で縄文時代早期土器・石器等が出土した。その他、近世磁器等が表採された。本調査必要。

また、森ノ上遺跡発掘調査に伴う排土置き場予定地（**森ノ上遺跡隣接地**）において、樹木伐採後に土器の散布が確認されたため、協議の上、緊急に確認調査を実施した（3,400m²・2008年8月27日～9月2日・山田／松本／岸田）。確認調査の結果、竪穴建物跡が10軒以上確認され、包含層中からは弥生時代遺物が出土したことから、弥生時代ならびに古墳時代前期を中心とする集落跡の存在が判明した。なお、より斜面下方の畑地については表土直下でK-Ah・礫層が露出し、近代遺物が散見されるばかりで遺構は確認されなかった。この結果を受けて再度協議した結果、工事期間等との関係より2,400m²について緊急に本調査を実施することとなった。

野地久保畠遺跡（2,585m²・2008年7月22日～24日・竹田／松本）の現況は畑地並びに山林。現在の土地利用状況より、谷奥側の高所にあるクヌギ林をA区・A区下の低地平場をB区・谷手前側の畑地をC区・B区奥の山林斜面をD区と便宜的に呼び分けた。トレンチ1～12のうち、B区トレンチ1・2でピット7基を検出。

ピット中並びに包含層中からの遺物出土は僅少で、弥生土器？ほか、近世陶磁器がごく少量出土した。D区ならびにB・D区境界には横穴が開く。A区は植栽のため試掘叶わなかった。C区は本調査の必要なし。B・D区は本調査必要。A区は次回以降とした。

（2,515m²・2009年1月13日～22日・黒木／崎田／松元）の現況は宅地ならびに畑地。一次確認調査でのA区とC区の間で、北側の畑地と南側の宅地に分かれる。南側にトレンチ1・2・5、北側にトレンチ3・4・6・7を設定した。トレンチ1～3・5ではピットを多数検出、近世陶磁器片・土器片がわずかに出土した。北側の畑地と南側の宅地とも本調査必要。

平迫出口（5,100m²・2009年5月25日～26日・藤木／石津／早瀬）調査地は、扇状地（2,400m²）ならびに浅い谷地（2,700m²）であり、扇状地を中心に縄文時代以降の集落遺跡等の存在が予想された。現況は宅地ならびに畑地等であり、移転等が終了した扇状地2,400m²の範囲について、トレンチを設定した。

土層堆積は、国道沿いの平地のみ岩盤近くまで削平されていた他は、表土直下にK-Ahの堆積が残存していた。しかし、土層堆積が良好であったにもかかわらず、K-Ah面に遺構はなく、表土中等にも遺物は確認されなかった。また、扇状地の頂部付近を中心に、縄文時代早期等の包含層の有無も探った。しかし、K-Ah直下より扇状地性の小砂利混じりの土層堆積（暗褐色混礫土層）であり、精査を進めたものの遺構・遺物ともに皆無であった。

調査の結果、扇状地部分について土層堆積は良好ながらも本調査の必要はないと判断された。また、残る宅地移転未了範囲についても、国道沿いの平坦地は岩盤まで削平されていた。また、扇状地上に遺構・遺物が存在しないことから谷地にもないと考え、本調査の必要はないと判断された。

飛石（3,700m²・2009年12月14日～16日・黒木秀／崎田／藤木）調査地は北川の西側に位置し、北川と台地間の平地である。古代以降の集落ならびに官道を含む道路跡の存在が想定されていた。調査地の現況

は宅地及び畑地等である。対象地のうち、最も高所にあたる北西部分では表土下30～40cmで岩盤となった。最も北川に近い北東部分は、削り出された岩盤の上に1.2mの客土が載っていた。浅い谷地形となる南西部分では直径10～20cmの礫を含む客土下に近世以降と見られる畑耕作土があり、その直下からK-Ah・褐色粘質土・岩盤の順で堆積が見られた。谷地形に伴う急傾斜地を埋めるように畑地が造成されたようであり、耕作土中より18C後半以降の陶磁器・貝類等約40点が出土したほか、耕作土に掘り込まれた近代遺物を含む直径約1mの土坑が確認された。

調査の結果、谷地形部分以外は岩盤まで削平されていることが判明し、遺物は近世末以降のものに限定された。残る宅地移転未了範囲についても同様の状況と判断されたため、本調査の必要はないと判断された。

(黒木誠)

第2節. 整理作業の方法と経過

整理作業は、平成21年2月2日以降、現地調査終了から順次進めていった。報告書は、野地久保畠遺跡・森ノ上遺跡の報告を一書にまとめることとした。

2-1. 遺構の整理

遺構の整理は一覧表の作成より着手し、全遺構を対象に位置・種別・時期・規模等を整理した。**掘立柱建物跡**は現地復元を基本とし、一部、1/20の遺構分布図を用いて図上復元し、その一覧表を作成した。図中に示す北は基本的に磁北である。地図の一部については国土交通省より原図の提供を受けた。

2-2. 遺物の整理

水洗は調査区ごとに順次進め、取り上げ遺物全てを

対象とした。**注記**は「遺跡名略号/遺構・グリッド名/層位/床直上出土ならびに埋土中で重要なものについて遺構内での通しNo(いわゆるNo付遺物)」を基本とした。各遺跡の注記ルールは巻頭の凡例のとおり。

土器の**接合**は遺構内出土遺物を中心に、必要に応じて遺構間・グリッド間等でも進めた。陶磁器類・石器については図化対象を中心に接合した。土師器については、胎土の粗さや明瞭な接合痕に起因するひずみが著しく、特に完形品に近い接合復元にあって困難を極めた。なお、強度を確保した上でバイサム充填範囲に小窓を設けることで、展示の機会等に内面の調整痕等が容易に観察できるよう工夫した。金属器の**保存処理**は、まず、分館のサンドブラスターを用いたクリーニングを基本とし、脱塩はセスキカーボナイト法にて行った。脱アルカリは温かい純水に浸し、乾燥を経てソルベントナフサ・NAD-10Vで含浸させた。含浸作業は3回繰り返し、乾燥の後、接合・補修した。最終的に、シリカゲルあるいは調湿剤(湿度を50%に保持)とともに調湿機能のあるプラスチック容器内で保管している。なお、図版用の写真撮影は脱塩前に実施した。**実測**は作業員の協力の下に職員による手実測を基本とした。実測対象は、遺構の時期や性格を示す遺物や、遺構には伴わなくとも遺跡の変遷や時期的な性格を考える上で必要な遺物とした。**製図**は、石器類・一部の金属器について外部委託した他は、職員で手トレースした。**写真撮影**は大判カメラ・デジタルカメラを併用し進めた。

(藤木)

遺跡番号	遺跡・地点名	所在地	当初面積	確認調査期間	調査面積	本調査期間	本調査面積	措置
1	海舞寺第1	北浦町古江	2,500㎡	20080219	72㎡			本発掘調査不要の判断
2	海舞寺第2	北浦町古江	4,400㎡	20080220-20080221	188㎡	20080616-20081020	1,800㎡	海舞寺遺跡として本発掘調査実施
3	海舞寺第3	北浦町古江	2,200㎡	200802				現地踏査により本発掘調査不要の判断
4		北浦町古江	130㎡	200609				現地踏査により本発掘調査不要の判断
	小路石塔群	北浦町古江						実測等で終了
5	平迫出口	北浦町古江	5,100㎡	20090525-20090526	250㎡			本発掘調査不要の判断
6	市之串第1	北浦町古江	1,200㎡	20080218	62㎡			本発掘調査不要の判断
7	市之串第2	北浦町古江	2,300㎡			20081014-20081226	4,400㎡	市之串遺跡として本発掘調査実施
8	中野内	北浦町古江	30,600㎡	20070927-20071004	204㎡	20071205-20080317 20080609-20080924	2,200㎡ 2,400㎡	中野内遺跡として本発掘調査実施
9	野地久保畠	北浦町古江	5,100㎡	20080722-20080728 20090113-20090122	215㎡ 191㎡	20081014-20081225 20090406-20090619	2,000㎡ 1,600㎡	野地久保畠遺跡として本発掘調査実施
10	鳴川引地	北浦町古江	950㎡	20080220	20㎡			本発掘調査不要の判断
11	森ノ上	北浦町古江	5,700㎡	20080218-20080219	216㎡	20080825-20090202	5,450㎡	森ノ上遺跡として本発掘調査実施
	森ノ上隣接地	北浦町古江	3,400㎡	20080827-20080902	2,610㎡			
12	カラ石の元	熊野江町	1,200㎡	20080221	48㎡	20080602-20080916	1,600㎡	カラ石の元遺跡として本発掘調査実施
13	協議地	熊野江町	3,000㎡	200806-200809				現地踏査により本発掘調査不要の判断
14	家田古墳群・家田城跡	北川町長井	4,100㎡			20090701-20091127	4,100㎡	西の城跡として本発掘調査実施
15	飛石	北川町長井	3,700㎡	20091214-20091216	150㎡			本発掘調査不要の判断

第1表 調査遺跡一覧表

第3節 県境～北川間における教育普及活動について

宮崎県教育委員会では、教育基本方針として「たくましいからだ 豊かな心 すぐれた知性」を掲げ各種の教育施策に取り組んできている。

平成15年度から～宮崎ならではの教育～「宮崎の教育創造プラン」が策定され、ふるさとを愛し、自分に自信と誇りをもてる子ども像を具現化するために「ふるさと宮崎を大切にす教育の充実」があげられている。

また、平成19年3月に『文化遺産の保護と活用に関する基本構想』が県教育委員会から出され、子どもの文化財保護意識の醸成を図るため、学校と地域が連携したふるさと教育の推進を行うことが提起されている。

このような教育理念や構想に基づき、埋蔵文化財センターでは、埋蔵文化財保護思想の普及及び啓発を推進業務の一つとし、実施しているところである。

具体的には、発掘調査中における発掘作業員への説明会、地域の方への現地説明会、遺跡報告会の開催等である。また、学校教育や社会教育への支援として、出前講座や出前展示、教育研修センターと連携した教員研修、発掘体験等も実施している。

県境～北川間における発掘調査では、上記の教育普及活動を平成20年度から実施している。以下、年度ごとの活動を紹介する。

平成20年度

平成20年度は、現地説明会1遺跡、発掘体験2遺跡の普及活動を実施した。

1 現地説明会

・森ノ上遺跡【平成20年12月18日】

A区では縄文時代早期の集石遺構や出土遺物、B区では弥生～古墳時代の集落跡や出土遺物を中心に説明を行った。また、発掘作業員も通常勤務しており、業務紹介等も一緒に行った。

参加者は地元の北浦町内から児童・生徒を中心に122名が参加した。



現地説明会（森ノ上遺跡）

2 発掘体験

・中野内遺跡【平成20年7月14日～15日】

年に2回開催する埋蔵文化財センターの普及活動で、平成19年度から調査を継続している当該遺跡で実施した。参加人数は44名であった。

(内容)

- ・発掘現場と埋蔵文化財センターの仕事の説明
- ・発掘体験（水洗作業・包含層掘削）
- ・体験活動まとめ

平成21年度

平成21年度は、毎年実施している遺跡発掘速報会『ひむかの歴史2009』をはじめ、出前講座1校、現地説明会1遺跡、発掘調査報告会を開催している。

1 遺跡発掘速報会

(1)『ひむかの歴史2009』【平成21年8月23日】

県立図書館の視聴覚教室で開催し、県内外から85名の参加者があった。

この速報会は、前年度に発掘調査を実施した遺跡について、概要を説明するもので、県境～北川間では、カラ石の元・海舞寺・中野内・森ノ上遺跡の報告をした。

(2)『東九州自動車道遺跡発掘調査報告会「知られざる北浦の歴史」』【平成22年2月13日】

平成20年度に調査を終了した県境～北川間の遺跡について、現地での調査説明会等を開催できていなかったため、改めて調査の成果を地域の方に還元する目的

で開催した。参加者は72名。

報告会の開催にあたっては、延岡市北浦社会教育課の協力を得た。



発掘調査報告会（知られざる北浦の歴史）

2 出前講座【平成22年2月19日】

・延岡市立北浦小学校

6年生52名、教諭2名の計54名を対象に講座を実施する。

講座内容は、県境～北川間で平成20年度から調査を実施した遺跡の紹介を行い、森ノ上遺跡から出土した集石遺構を現場に再現しての説明、海舞寺遺跡などから出土した炭化種子等の解説を行った。



出前講座（延岡市立北浦小学校）

3 現地説明会【平成21年10月10日】

・家田古墳群・家田城跡

延岡市北川町内では初めてとなる発掘調査であったためか地域住民の関心が高く、午前と午後の部合わせて141名の参加者を数える。

急峻な尾根の調査であったため、現地に向かう道程も険しいものであったが、地元で発見された文化財を間近に見た満足感を汲み取れる意義のある会であったと考えている。

平成22年度

22年度は、遺跡速報会『ひむかの歴史2010』と、講演会と遺物公開を実施した。

1 遺跡発掘速報会

『ひむかの歴史2010』【平成22年8月21日】

本年度も県立図書館視聴覚室で開催され、昨年とほぼ同じ85名の参加者であった。県境～北川間の遺跡では、家田古墳群・家田城跡の報告を行った。

2 講演会と遺物公開

『ここまでわかったひむかの歴史』【平成22年9月4日】

年間に6回開催する講座で、分館研修室で実施している。

今回の講座では、森ノ上遺跡と野地久保畠遺跡を中心に、県境～北川間の遺跡を解説した。また、同遺跡から出土した遺物の展示も行っており、参加者の熱心な質問が飛び出し盛況であった。参加者26名。

（飯田）



現地説明会（家田古墳群・家田城跡）

第IV章 野地久保島遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置

国道388号線の延岡市古江交差点を北へ進むと西側に禅宗延岡台雲寺の末派となる昌雄寺がある。この昌雄寺よりも西で中港川と引地山より東が野地久保島である(第1図)。北は中野内、東と南は本村、西は鳴川引地と松之木に接し、北側の山を背にして南側に平野が広がる地形である。調査区は、野地久保島地区でも最北で北・東・西を囲む山に接し、南向きに開いた小さな扇状地性の緩斜面からなる(第2図)。

『北浦村史』(1968年)に記載された中世末～近世の史料では「野地(路)」と表記されることがほとんどである。しかしこれは野地久保島の略称ではないようで、明らかに野地とは区別して「久保島(畑)」だけの表記もある。但し、久保島は近世前半の新開墾地として以外はほとんど記載がなく、地元住民でも久保島だけをさす地域は曖昧である。おそらく久保島は昌雄寺西隣の稲荷山にあった段々畑付近と思われるが、現在は町営団地とデイサービスセンターが建てられている。

史料では近世前半には、野地に建物があったことがわかる。また、「野地」とは現在よりも広い地域を指す。例えば野地久保島西隣の鳴川引地に建つ元宮神社は明治初めの史料でも小字が野地となっている。他にも、昌雄寺の中興開基に関わったとされる伊予国主の河野阿波守の墓碑銘に「(河野阿波守の)墓ハ本村小字野地ニ在リ…」とある。墓碑が建つ場所の小字は車地だが地元ではそこも野地という。野地久保島を「上野地」、車地付近を「中野地」、萩原付近を「下野地」と今でも呼ぶ。従って鳴川引地から中港川沿いの集落は海岸付近まで野地ということになる。

よって『宮崎県の考古学』に「北浦村古江字野地」として推定後期の半磨製石斧・石錘・石匙が採集されたというが、これだけでは野地のどの場所なのかかわからない。そして実資料も未確認である。

県文化財課が昭和38年に本村の寺ノ下(昌雄寺の南)を調査し弥生時代の土器(底部)を、同じく昭和52年に鳴川引地(ただし地図上では森ノ上付近を指してい

る)を調査し古墳～飛鳥時代の土器片を検出しているがいずれも詳細は不明である。

鳴川引地に関して平成19年度の当センターの分布調査では現位置を遊離した石塔部材が散見され、縄文時代の打製石鏃・古代以降の火打石の他、弥生土器あるいは土師器・中近世陶磁器・青花碗・中世土師器・青砂岩製磨石・凝灰岩製挽臼が採集された。これに基づいて元宮神社鳥居の東側を確認調査したが遺構・遺物は確認されなかった。

調査区西側の引地山を地元では「金山(かなやま)」とも呼ぶ。言い伝えによれば、木原朝日之進重信がこの山に金壺を埋め、さらに後日譚としてこの伝説を信じた者が実際に採掘したという(『北浦村史』(1968年))。鴟野尾大権現(現在の元宮神社)は1563(永禄6)年に木原朝日之進によって造営され、この時、朝日之進は市振から野地に引っ越している。その居住地が野地久保島遺跡付近だという伝承がある。

木原氏は代々神主で、地下・市振・野地と移動しながら神社を造営してきた。朝日之進の子孫の市之進は1655(明暦元)年に野地から今村地区へ引っ越している。木原朝日之進の墓より出土した錫杖以外に木原氏に関する遺構や遺物の報告されたことはないが、金壺を求めて掘ったとされる穴は引地山に、木原朝日之進の家臣が掘った手水場といわれる井戸は調査区の北西に隣接し枯れることなく現存している。

1802(享和2)年の木原氏の子孫の文書に「引地山鴟野尾大権現の麓野地と申す処家数十軒程氏子に相成御座候処…」ともある(『北浦村史』(1968年))。また、調査区よりやや南で「正徳辰年(1712年)」・「元文6年(1741年)2月27日」と刻まれた墓石が出土し、遅くとも18Cには民家が複数存在していたことがわかる。

平成20年度に当センターは野地久保島遺跡の確認調査を実施した。ピット7基を確認、弥生土器片・中世～近世の陶磁器片が出土した。同じく北の中野内遺跡で弥生時代を中心とする遺構や遺物を、西の森ノ上遺跡でも旧石器・弥生・古墳時代の遺構や遺物が多数確認されている。(黒木誠)

1-2. 調査方法と経過

本調査では畑地である東側（2,000m²）と宅地の西側（1,600m²）に分け実施した。東側を平成20年10月14日から平成20年12月25日、西側を平成21年4月6日から平成21年6月19日まで実施した。

平成20年度は畑地と横穴の存在する山の斜面部分を調査した。杉や樹木を重機で移動させた後、表土剥ぎを行った。平成21年度は宅地の基礎部分（コンクリート等）を重機で剥ぎ移動させ、表土剥ぎを行った。

国土座標に準じた10m×10mグリッドを西から東にA～F、北から南に1～8と設定した。アカホヤ上面まで重機で除去後、人力で遺構検出を行った。遺構掘り下げは半截を基本とし、必要に応じて土層断面図を作成した。遺物取り上げはグリッド・遺構別とした。なお、平成21年度の調査では全てのピット等で土壌を採取し、フローテーション作業を実施した。

横穴は2基確認された（第2図）。いずれも調査区東側の山の斜面で、中腹部の1号と畑地と同じ高さの2号である。2号は重機での表土剥ぎの途中、偶然に見つかったため、未開口であった。横穴内部については土層断面図等を作成しつつ、人力で床面等を検出した。横穴は古墳時代の横穴墓の可能性があったため、床面上の土については微小遺物の回収に努めた。

遺構実測図は1/20を基本とした。写真記録は、中判カメラ（6×7）、35mmカメラでモノクロ・リバーサルフィルムによる記録を中心に行い、随時デジタルカメラを併用した。遺跡の立地状況や周辺の地形等を記録するため、空中写真撮影も実施した。

現場事務所から調査区を囲む山を毎日越えなければならなかった。道具や器材もその度毎に分担して運んだ。それでも作業員諸氏の連携と奮闘によって調査を無事終了することができた。（黒木誠）

調査日誌抄

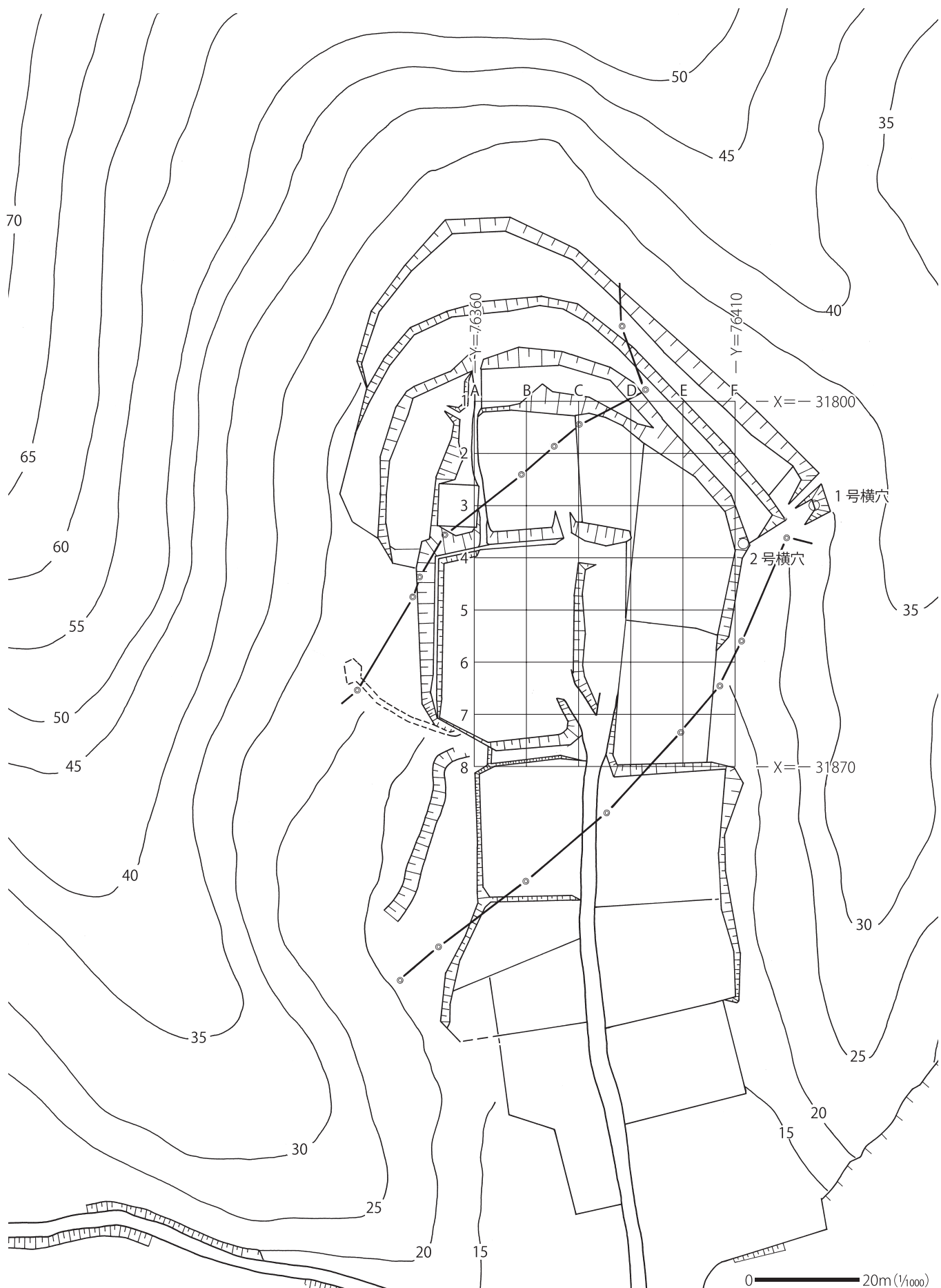
平成20（2008）年

- 1014 現場事務所設置。
- 1015 重機による表土剥ぎ。
- 1021 重機による横穴の埋土除去。
- 1028 作業員雇用開始。
- 1031 グリッド杭設置。
- 1104 2号横穴調査開始。
- 1105 空中写真撮影。

- 1106 IV層（黒色土）遺構検出。
- 1110 1号横穴調査開始。
- 1111 遺構写真撮影。
- 1120 調査区中央土層断面図作成。
- 1125 V層（アカホヤ）遺構検出。
- 1126 遺構写真撮影。
- 1127 1号横穴実測。
- 1128 重機による排土移動。
- 1201 崩落防止のため2号横穴の天井部を除去。
- 1203 2号横穴実測。
- 1210 土層断面写真撮影。掘立柱建物跡実測。横穴埋土のサンプリング。
- 1215 V層上面での地形測量。
- 1216 完掘状況写真撮影。器材搬出。作業員雇用終了。
- 1217 埋戻し開始。横穴写真撮影。
- 1219 埋戻し終了。発掘調査終了。
- 1225 事務所等撤去。

平成21（2009）年

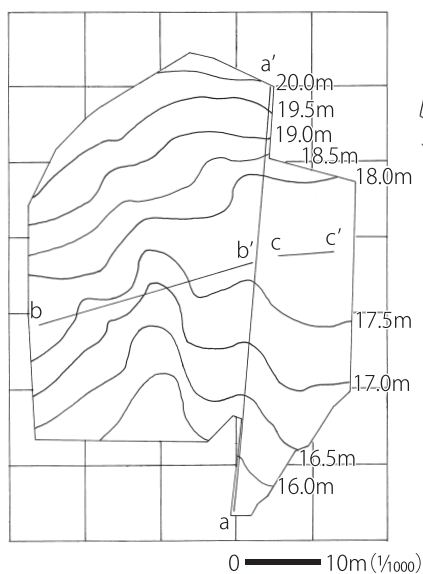
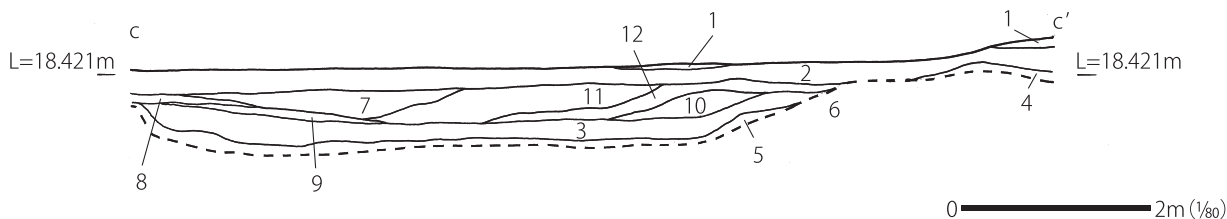
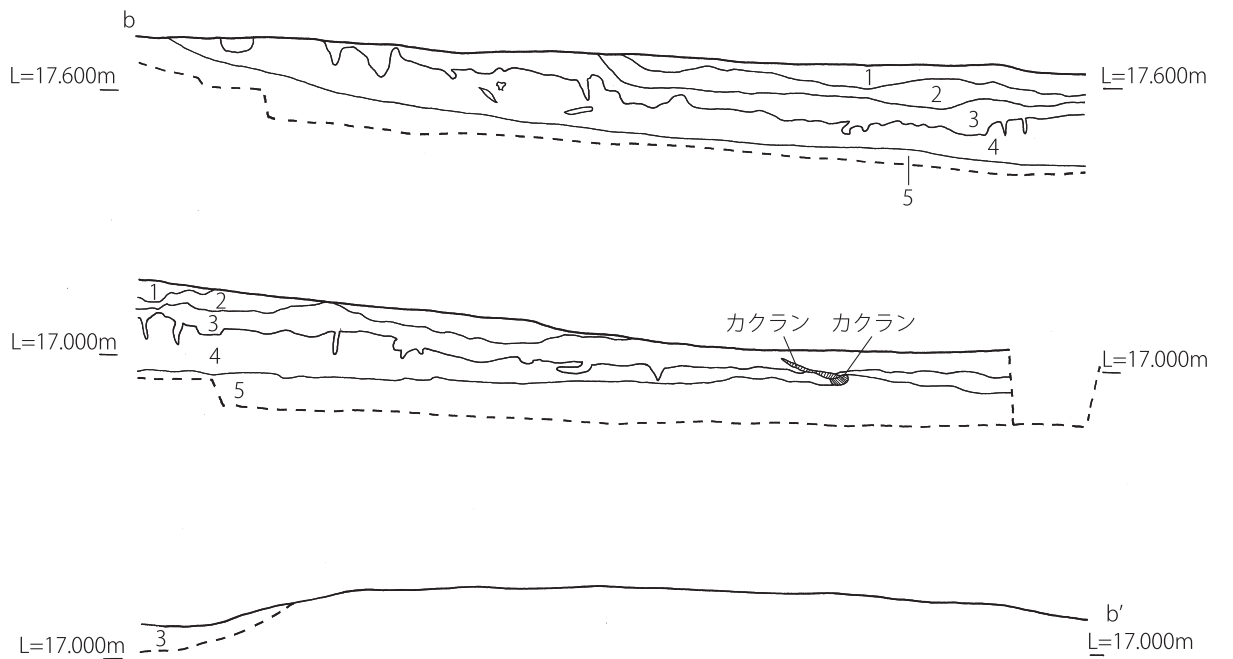
- 0113 調査区現況確認。トレンチ予定位置確認。
- 0114 重機によるトレンチ掘削。
- 0115 重機による旧宅地の基礎部分撤去。
- 0119 トレンチ精査。
- 0120 平板実測。
- 0122 重機による埋戻し。確認調査終了。
- 0406 現場事務所設置、駐車場整地。重機による表土剥ぎ。
- 0413 作業員雇用開始。
- 0415 遺構検出作業。
- 0422 土坑検出、写真撮影。
- 0427 重機による排土移動。
- 0430 土坑完掘、写真撮影。
- 0507 V層（アカホヤ）上面まで掘削開始。
- 0508 調査区南側谷部の精査。
- 0512 調査区中央の土層断面実測。
- 0515 ピットの半截。
- 0519 遺構実測。
- 0526 ピット埋土のフローテーション開始。
- 0602 遺構掘削。
- 0603 遺構実測。
- 0615 遺構写真撮影。
- 0617 器材搬出。作業員雇用終了。
- 0618 遺構実測。
- 0619 発掘調査終了。事務所等撤去。



第2図 野地久保島遺跡周辺地形・グリッド配置図



第3図 野地久保畠遺跡土層断面図(1)



- a~a'
- 1 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強く、粘性強い。
 - 2 暗褐色土 (10YR3/4) 砂質。礫 (~3 cm) を多く含む。しまりやや強く、粘性弱い。
 - 3 黒褐色土 (10YR2/3) 礫 (~3 cm) を多く含む。しまり強く、粘性弱い。
 - 4 黒褐色土 (10YR2/3) 礫 (~1 cm) を少し含む。しまり強く、粘性強い。
 - 5 橙色土 (7.5YR6/6) K-Ah 漸移層。6 が暗く濁る。
 - 6 橙色土 (7.5YR6/6) K-Ah。
 - 7 暗褐色土 (10YR3/3) 粘土質。礫 (~10 cm) を少し含む。しまり強い。8 より暗い色調。
 - 8 暗褐色土 (10YR3/4) 粘土質。礫 (~10 cm) を少し含む。しまり強い。
- b~b'
- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 礫 (~3 cm) を多く含む。しまり強く、粘性弱い。
 - 2 暗褐色土 (10YR3/3) 粘質。礫 (5 mm~1 cm) を多く含む。しまり強い。
 - 3 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質。クロボク相当層。
 - 4 橙色土 (7.5YR6/6) K-Ah。
 - 5 暗褐色土 (10YR3/4) 粘土質。礫 (~10 cm) を多く含む。しまり強い。
- c~c'
- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) きめが細かい粘質土。やや砂礫が混る。
 - 2 黒褐色土 (7.5YR3/1) 1 より砂礫が多く混じる。
 - 3 浅黄褐色土 (7.5YR8/6) 地山の土砂。土砂崩れ由来。
 - 4 暗褐色土 (7.5YR3/3) 砂礫が多く混じる。粘性なし。
 - 5 橙色土 (7.5YR6/6) K-Ah 漸移層。
 - 6 橙色土 (7.5YR7/6) K-Ah。
 - 7 褐色土 (7.5YR4/3) 砂礫が多く混る。非常に硬質で粘性なし。
 - 8 褐色土 (7.5YR4/3) 7 + 9。
 - 9 浅黄褐色土 (7.5YR8/6) 地山の土砂。土砂崩れ由来。3 より軟質。
 - 10 浅黄褐色土 (7.5YR8/6) 地山の土砂。土砂崩れ由来。9 より明るい色調。
 - 11 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 土砂多く混じる。非常に硬質で粘性なし。
 - 12 にぶい褐色土 (7.5YR5/3) 11 より軟質

第4図 野地久保島遺跡土層断面図(2)

第2節. 基本層序と土層堆積

本遺跡は、北から南に向かって緩やかに傾斜している。東西の尾根方向からの傾斜もあり、調査区南部の中央付近が最深部となる。そこで、土層堆積は等高線に直交するものと等高線に並行するものとして記録し(第3図 a~a'、第4図 b~b' c~c')、それらより基本層序を作成した。

- I層…表土
- II層…黒褐色土
- III層…褐色土
- IV層…谷に起因すると考えられる黒褐色土
- V層…アカホヤ層
- VI層…暗褐色土
- VII層…岩盤層

調査区は北・東・西が山に囲まれ、調査区も平地ではなく北が高く南へ傾斜している。このため北・東・西の三方向からそれぞれ水や土砂が絶えず流れ込み堆積、そしてさらに南へ流されていくことを繰り返してきたようである。このような地形であるため、降灰後に周辺に堆積したK-Ahが高位から低位への流入も見られ、K-Ahの堆積が地点によっては1mを超える厚みを持っている。V層の堆積は谷の中央付近では少ない。前述のごとく、降雨による流水等が何度も繰り返されIV層が形成された。IV層は礫の流入により微細土壌が混入し濁るように変色した二次K-Ahである。その後、火山灰が土壌化していく過程で、おそらくは降雨等に伴って小型角礫の流入(土砂崩れ)があった。これがIII層である。II層はIII層の土壌化によるものであり、このような地形環境の中で中世以降の生活が営まれたようである。(黒木誠)

第3節. 遺構

(1) 掘立柱建物跡(SB) (第5、6図・第10表)

発掘調査段階で確認した掘立柱建物跡はSB1・2の2棟であり、他は整理作業時における図上復元である。SB1~5は同じII層上面で検出、分布はSB1・3・4がD4~E4、SB2・5がD6~E6グリッドですべて調査区の東側の元は畑地である。

SB1 桁行3間(5.8m)×梁行2間(4.6m)の長方形。身舎柱は相対するが、妻柱は相対していない。東

側に攪乱がありそこに妻柱がもう一つあったことも想定される。柱穴の径は0.35~0.4m、深さ0.15~0.5m。埋土が黄色砂礫混じりと灰褐色土。主軸方位はほぼ真北を指す。柱穴や周辺から遺物は確認されなかった。

SB2 桁行2間(4m)×梁行1間(1.8m)の長方形。柱穴の径は0.28~0.35m、深さ0.10~0.30m。埋土は黒色土。主軸方位はほぼ真北を指す。柱穴や周辺から遺物は確認されなかった。

SB3 1間(1m)×1間(1.5m)の長方形。柱穴の径は0.28~0.30m、深さ0.15~0.22m。埋土は黒色土。主軸方位はN-24°-W。柱穴や周辺から遺物は確認されなかった。

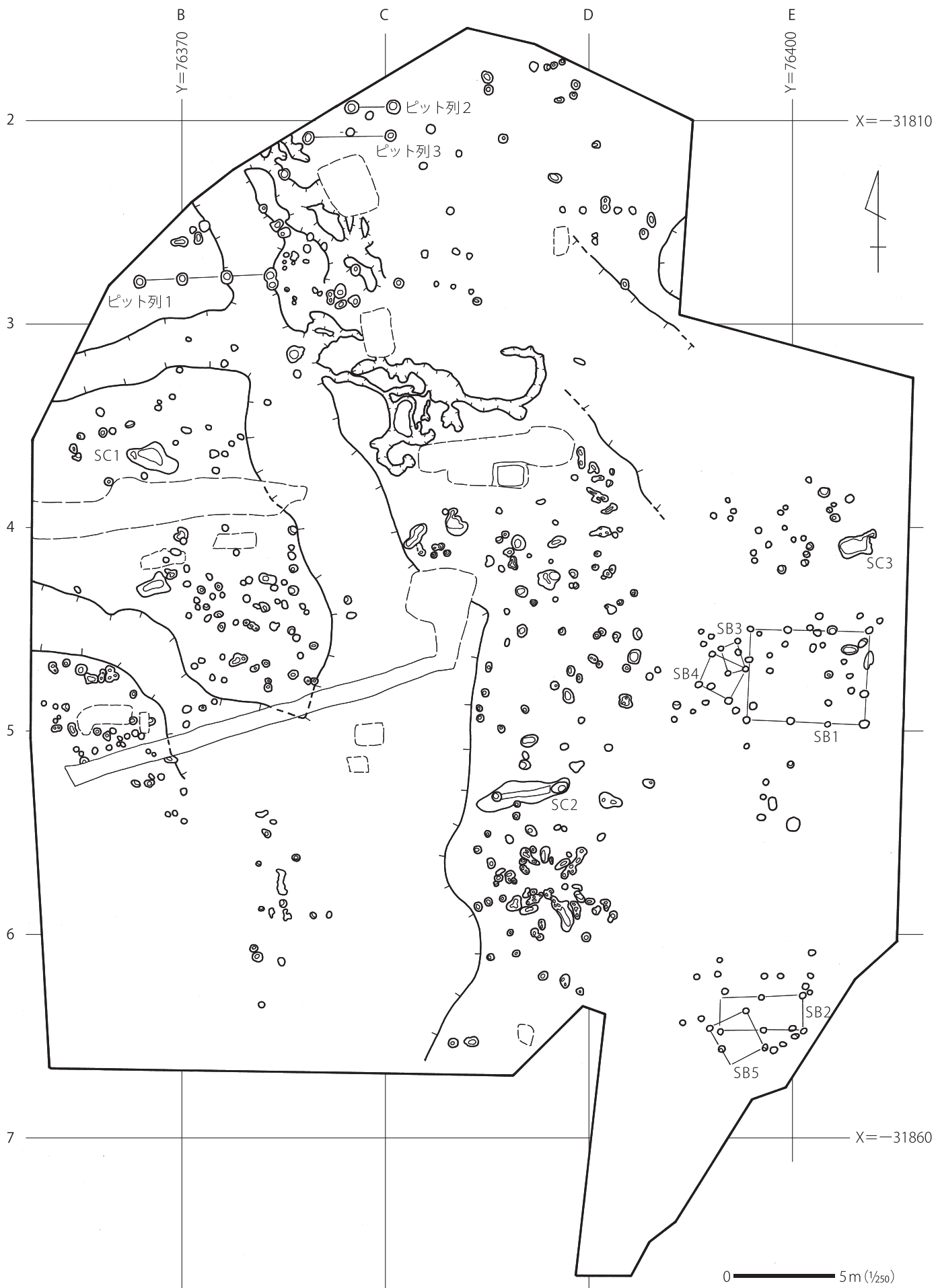
SB4 1間(1.7m)×1間(1.7m)の方形。柱穴の径は0.28~0.34m、深さ0.15~0.40m。埋土は黒色土。主軸方位はN-9°-E。柱穴や周辺から遺物は確認されなかった。

SB5 桁行1間(2m)×梁行1間(2m)の方形。1辺のみ1.15mの間隔で柱穴がある。柱穴の径は0.28~0.32m、深さ0.10~0.26m。埋土は黒色土。主軸方位はN-60°-E。柱穴や周辺から遺物は確認されなかった。

(2) ピット列 (第5、6図・第10表)

ピット列1 東西方向に柱穴が4基、柱間が2mで直線状に並んでいる。掘り方は円形で径0.5~0.7m、深さ0.3~0.5m、下部には灰白色系の粘質土が認められる。南方向に対応する柱穴は確認できなかったが、西と北側は調査区際で柱穴の存在は予想される。これらの柱穴が掘立柱建物の柱穴か、或いは柵列等の一部かは不明である。また、S103からは備前焼の陶器片が出土した。

ピット列2・3 ピット列1の北東、調査区の北端に位置し柱穴が5基ある。2m間隔で東西に並ぶ2基の柱穴(ピット列2)、その南側に同じく2m間隔で東西に並ぶ3基の柱穴(ピット列3)があり、2列の間隔が約1.2mである。柱掘り方は円形で径0.5~0.7m、深さ0.3~0.7mである。ピット列1同様、調査区際であるため北側あるいは西側に別の柱穴が存在することは考えられる。また、南北の間隔が東西に比べてやや狭いことから、ピット列2・3が主軸方位が北を指す同一の掘立柱建物の柱穴、或いは別個の建物の柱穴を想定することもできる。なお、S119からは陶器蓋が出土した。



第5図 野地久保畠遺跡遺構分布図

薩摩焼の苗代川系のものである。灰緑色の釉薬はやや焼成不良（十分に焼成されていれば透明感のある暗緑色）だが、口唇部の貝目痕も苗代川産の特徴を示すものである。比較的焼しまっており17Cに操業していた堂平窯のものと推定される。ヘラ状工具による横方向の筋状の調整痕はないため、形状的には17C前半の特徴を持つが、器壁の厚さも含めて17C後半以降と考えるとよいだろう。

(3) 土坑(SC) (第5、7図・第10表)

土坑は3基検出された。いずれの土坑も遺物は出土せず、それぞれの性格や用途は不明である。

SC1 A3グリッドの南東部に位置する。長径2.54m・短径1.4mと不定形をなす。底部は三角形に近い形状で最深部は1.04m。A3グリッドからC3グリッドにかけ南側に段差が生じており、SC1はその斜面部にある。周辺には流水により削られ窪んだ地形もみられるため、自然現象によるものとも考えられる。

SC2 C5グリッドの北東部に位置する。長径4.6m・短径1.06mと東西に細長い平面方形である。断面にはそれぞれ両端に落ち込み（東側深さ0.6m・西側深さ0.52m）がみられる。穴が元々2つあり、間の部分が削られて1つとなったのではないか。

SC3 E4グリッド北西部に位置する。長径1.58m・短径0.58mで平面方形、深さ0.26mで底面は箱型の断面をもつ。遺物は出土していない。5m程南にSB1があるが、それぞれ埋土も異なり関連があるかは不明である。

(4) 横穴 (第2、7図・第9表)

調査区内に2基の横穴が確認された。1号横穴は東側の斜面、2号横穴は東側斜面下部で検出された。

調査前、1号横穴の天井は崩落し基盤となる岩体で埋没していた。壁面の工具痕は新しい印象であり、防空壕として利用された可能性が高い。構造は左右対称(T字型)で丁寧な作りである。通路の両脇には丸太を設置した柱穴が約1m間隔で掘られている。室内の土砂を除去したが遺物はなかった。

2号横穴は表土除去中に検出された。非左右対称(逆L字型)で1号横穴と同じ等間隔の柱穴を持ち、内部をさらに2つに隔てる柱穴がある。室内の土砂を取り除いたがやはり遺物はなかった。これは後日の聞き取り調査で昭和19年に防空壕として構築されたものだと

判明した。その話によると通路脇には柱を立て、天井部分には板材をはめ込むという土留工を行っている。室内は板張りである。また、この場所に防空壕を構築したものの、上部の1号横穴の存在は知られていなかった。いずれも埋土を採集し乾燥させた後、フローテーション作業を行い遺物の回収に努めた。その結果、古墳時代の横穴墓あるいは中近世等に利用されたことを直接に示す遺物は確認されなかった。(黒木誠)

第4節. 遺物

4-1. 縄文～古墳時代

(1) 土器 (第8図・第2表)

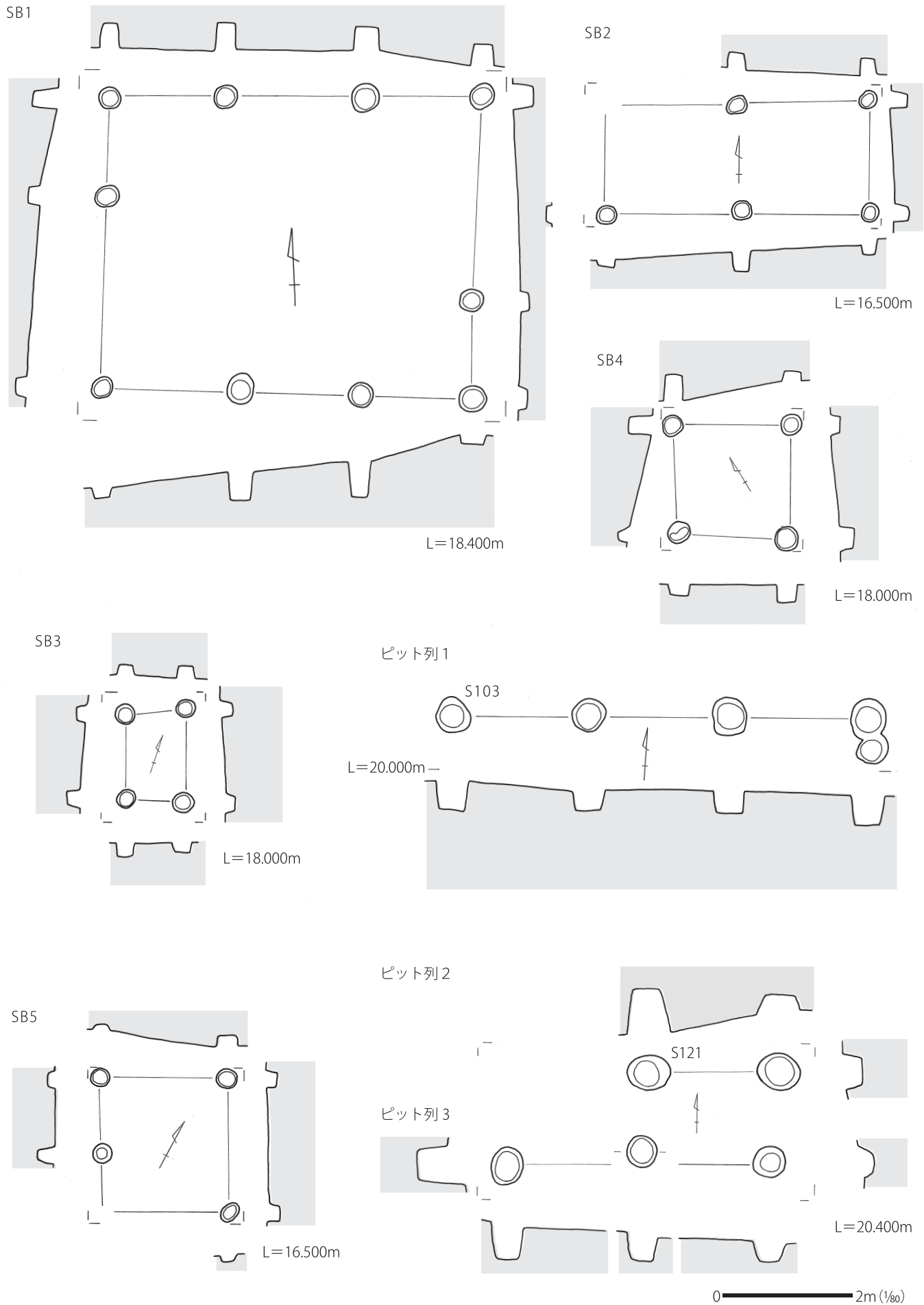
2のみD5グリッドのS79から、1・3は遺構外から出土した。

1・2は、縄文時代晩期の深鉢である。1は胴部屈曲部分に突帯を1条廻らし、口縁部が大きく立ち上がる。内面には、貝殻条痕の調整を施す。2は口縁部に突帯を廻らし、内外面ともに貝殻条痕の後ナデ調整を施す。他は、小片で未掲載だが、下城式の甕の底部片が見つかっている。古墳時代は、前期・中期の土器片が出土している。3は、口縁部ではあるが、外面に横方向のミガキを丁寧に入れており、中野内遺跡の中期の土器・胎土ともに酷似している。同様の中期の甕の胴部小片が数点出土している。他には、小片で未掲載だが、外面にやや幅の広いタタキのある甕の小片が見つかっている。(古田)

(2) 石器 (第8図・第3表)

石器はすべて遺構外からの出土である。

石器は打製石鏃・二次加工ある剥片・剥片がある。打製石鏃は2点(6・7)あり、いずれも姫島産黒曜石製で欠損が著しい。二次加工ある剥片(5)・剥片(4)は粗い石質の砂岩製で、類品が北浦町海舞寺遺跡にある。砂岩は風化面がうすい緑～青みあるもので、磨石等に用いられる青砂岩と比べ軟らかい。この他、敲石(8・9)・磨石(10)・凹石(11)も縄文時代の可能性があり、千枚岩や北浦地域のブランド石材である青砂岩が用いられる。敲石・凹石には、中央部に入る敲打痕が共通して見られる。未図化には、よく転磨された砂岩礫3点がある。(藤木)



第6図 野地久保島遺跡遺構実測図(1) 掘立柱建物

4-2. 中世から近世の遺物

中世以降の遺物の大半は調査区南端のI層(表土)中のA6とB6グリッドにかけて出土したが、その中から陶磁器97点、土師質土器10点、土人形1点、金属器3点も含めて図化・掲載した。

(1) 中世(第8図・第4表)

青磁

13は、鎬連弁文の輸入青磁碗で、13C後半～14C代のものである。

その他

14は無釉で甕?の一部と推定、内面に同心円・平行タタキがみられる。年代は不明であるが古代にさかのぼる可能性もある。(古田)

(2) 近世

遺構内出土の陶器は2つある(第8図・第5表)。15はA2グリッドのS103から出土した。備前焼の甕?の一部である。内面に横方向、外面に縦方向に工具による調整痕がみられる。16はC1グリッドのS121から出土した薩摩焼堂平窯の蓋の一部である。口唇部に重ね焼きの貝殻痕がある。形状から17C第2四半期～後半の製作といえる(関2009)。15の年代については、①他の遺物の年代、②出土地点が16と近い、③遺構検出状況が16と似ていることを考慮して17C代と考えてよいだろう。

遺構外出土の陶磁器については陶器と磁器に分け、さらに器種によって分類して記述する。

陶器(第9、10図・第5表)

磁器よりも数量は少ない。器種の特徴などから磁器よりも年代が若干古いものがある。また、地方窯の特徴がみられるものも数点ある。ここでは、器種別を中分類の基礎とした上で記述を行う。

碗 17・21・22は器表面に貫入で唐津系、18は小杉文・高台無釉で関西系、19・24は瀬戸・美濃系で19は腰鎗碗、20は高台無釉で唐津系、23は腰下と内面が無釉で火入の可能性もある。25・26は産地不明、27・28は端反碗で貫入あり。27は関西系か、28は唐津系。

皿 唐津系である。29は内面に青磁釉、見込に砂目の跡がみられる。17C前半頃。30は内面に銅緑釉を施し見込を蛇の目釉剥ぎとした量産型の皿である。17C後半から18C前半頃。

鉢 31は唐津系で内面の白土の上に褐釉を施す。砂目跡も2つある。33は田圃土を使用した延岡丸山焼。内外面で施釉が異なる。見込にハマの溶着痕が残る。36は産地不明で内面に無数のひっかき傷が残り、見込にハマの溶着痕がある。

瓶 32は関西系、35は瀬戸・美濃系で外面に灰釉流し。

土瓶(34) 丸型で把手がある。内面は口縁部下幅15mm程のみ施釉。19C頃であろうが産地は不明。

蓋 37・39は関西系。37はとびカンナ、釉切れの箇所がある。38は鉄釉を施し口唇部に重ね焼き?の跡がみられる。39は円盤形つまみでイチチン描(半菊花)がある。

香炉?(40) 底部のみで詳細は不明。唐津系で18C後半頃。

乗燭(41・42) 年代は不明だが他の陶器と同時に使用されていた可能性が高い。

片口 どちらもハマの溶着痕が残る。43は関西系?中国地方?か。注口は残っていないので鉢であるかもしれない。44は飴釉、ウノフ釉流しがみられる。

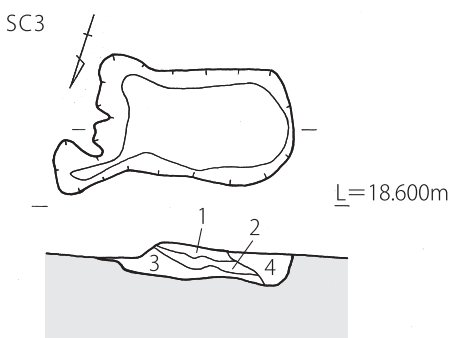
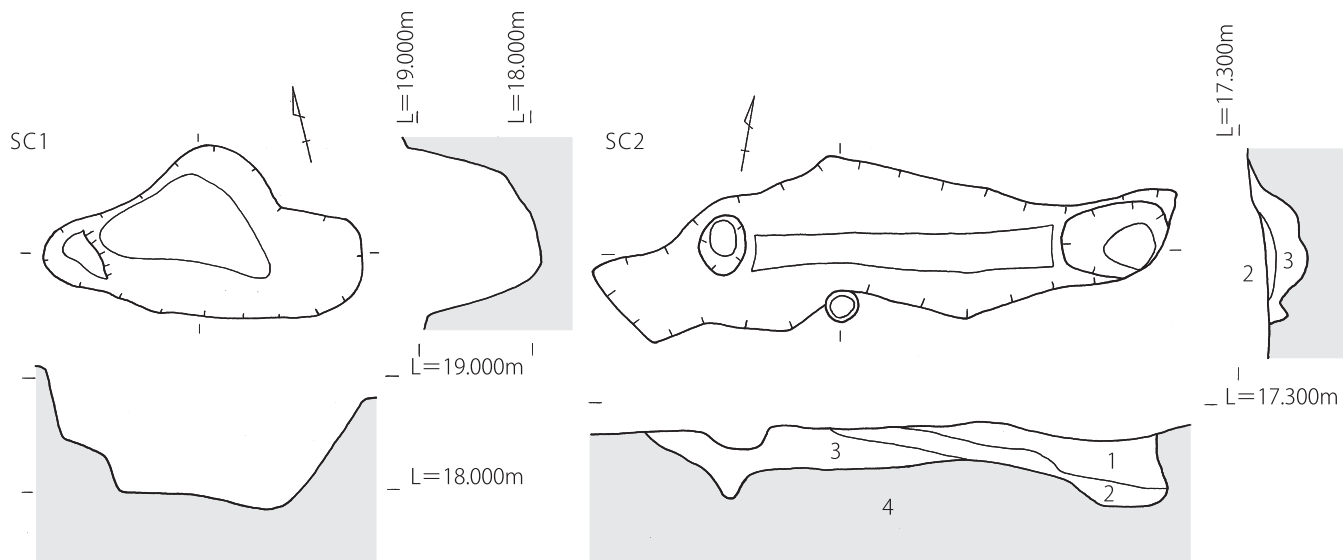
磁器(第10～14図・第5表)

磁器は18C後半から19C前半の肥前系と考えられるものがほとんどである。

丸碗・筒型碗・湯呑碗・小碗 出土遺物の中でも、18C代を中心とする粗製のいわゆる「くらわんか手」が最も多い。45～49は外面に雪輪草花文、高台内に変形文字。50・51はコンニャク印判による菊文、52は二重網目文、53は半地菊花文、60は海浜風景文で高台に砂が付着、61は見込にコンニャク印判の五弁花文で蛇ノ目釉剥ぎを施す。

湯呑碗は筒型(54)と丸型(55・58)がある。この2種は18C後半から19C初めの製品が多い。54は筒型の湯呑碗で外側のみ青磁釉、口縁部に四方襷文。55・58は丸型の湯呑碗、前者が虫籠文で後者が竹文を描く。56は小碗で笹文で18C後半。57は雨降文、18C前半か。59は見込に若草文と外面に五葉若草重ね文、17C末～18C初頃。

広東碗 清朝磁器の影響を受けた飯用碗で18C後半から19C前半に作られたものである。63・66は草花文、62は半菊花文、65は海浜風景文。それぞれ見込には



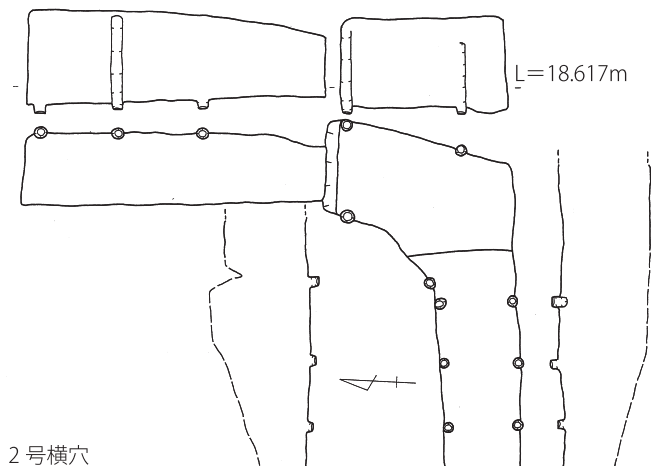
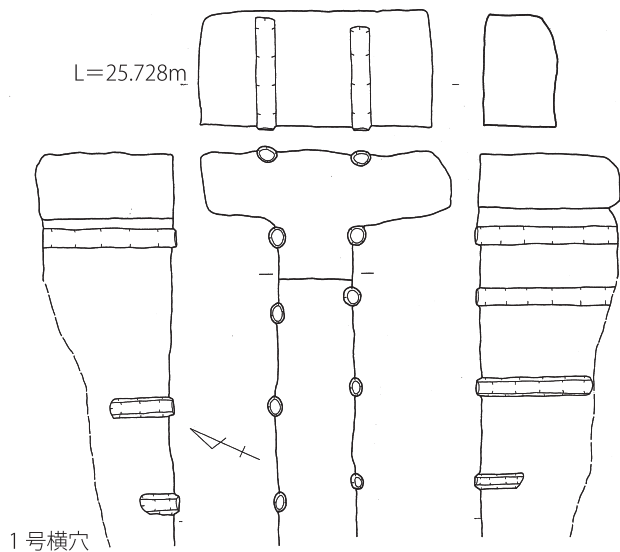
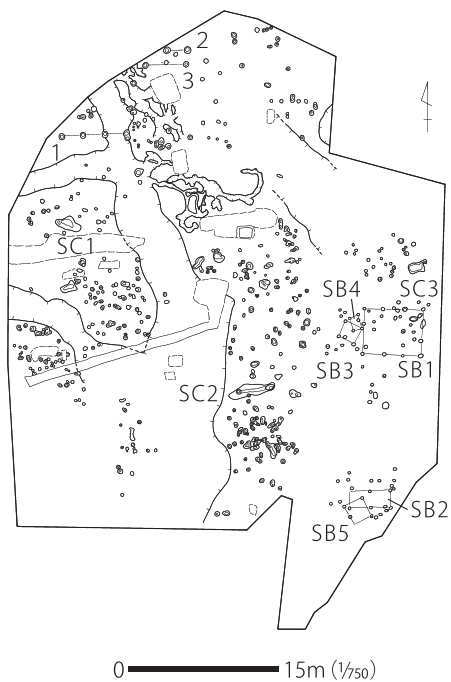
SC2

- 1 黒褐色土 (10YR2/3) 小礫 (1~2mm) を多く含む。硬くしまり強い。
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) 小礫 (1mm) をアカホヤブロックを多く含む。しまり弱い。
- 3 黒褐色土 (10YR2/3) 小礫 (1~2mm) を多く含む。硬くしまり強い。
- 4 橙色土 (7.5YR6/6) K-Ah。

SC3

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/1) 小礫 (~3mm) を少し含む。しまり弱い。
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/1) 小礫 (~3mm) を1より含む。しまり強い。
- 3 黒褐色土 (10YR2/2) 粘土質。しまりやや弱い。
- 4 木根による攪乱。

0 2m (1/60)



0 2m (1/60)

第7図 野地久保島遺跡遺構実測図(2) 土坑・横穴

岩波や変形文字を描いている。

端反碗 19C前半から広東碗に代わって普及した碗。67は格子文、68は見込岩波と牡丹唐草文、69は雲か波か、70は見込草文と松風・帆船文、71は見込鳥に鳥と松、72は見込斜格子とよろけ縞文、73は見込岩波と多重圏線、74は見込波文と草花文等、75は見込斜格子と草花文等、79は見込岩波に松?か。76は瀬戸・美濃産。

色絵 77・78は坏で文字銘を朱書き、鯛を薄紫色で描く。

皿・小鉢 内面見込に蛇ノ目釉剥ぎを施すもの(80・84・85・90・94・95・96)、18C半ば以降の様式の蛇ノ目凹型高台のもの(82・83・86・91・92・97)がある。80は二重格子文、81は環状松竹梅文で高台裏にハリ跡が残る。82は見込いっぱいに帆船文、83は草花文。86は見込にハマの溶着痕がある。84・85・87・89・90は五寸皿である。84は見込コンニャク印判五弁花文と菊唐草文。85は格子文、87は見込五弁花文と高台にやや崩れた「大明年製」の文字。89・90は二重斜格子文を内面に施す。91・92は形状では輪花皿または菊花型打皿、用途では手塩皿と呼ばれる。93・97は環状松竹梅文、鹿ノ子文と内面模様は同じだが、93は小皿で97は深皿。94は赤絵で梅を描いている。95・96は小鉢で見込にコンニャク五弁花文と外面に折松葉文を描く。88・98は蛇ノ目釉剥ぎ、蛇ノ目凹型高台を持たない。99は大皿で口径30cm前後のいわゆる尺皿で、人物と松が描かれハリ跡が残る。

瓶 100は尊形で腰下鉄釉、把手部は人面か。産地不明。101はラッキョウ形で口縁部が無装飾の小瓶。若松文、碁笥底。

仏飯器(102) 小型の高坏状で長い脚部をもつ。本遺跡の例では大部が丸みを帯びている。外面が赤絵による半菊花文。

蓋 103は口縁部に雷文、外面に丸文に「福」等の文字。段重の蓋か。104は内面に花文、外面に草文?を施す。

コバルト型紙転写・銅版転写 形状として蛇ノ目凹型高台(107・110~113)、蛇ノ目釉剥ぎ(105)は近世から続くものである。模様は見込に環状松竹梅文(106・110~113)、草文或いは草花文(105・106・

108・110・111・113・114)など共通した図柄が多い。114は銅版転写で明治後半のものである。

播鉢(第14図・第5表)

115・118は備前焼である。115は7条1単位の櫛目を見込にまで施し、高台がある。19C後半か。118は18C代で8条1単位の櫛目を見込にまで施す。

116・117・119~121は堺・明石系である。116・117は口縁部のみで外側の口縁部下部に削りがある。116が10条1単位の櫛目、117が9条1単位の櫛目を施す。119・121は見込が放射状を描く。119が7条1単位の櫛目、121が8条1単位の櫛目を施す。120は見込に9条1単位の櫛目を3つ重ねて、いわゆるウールマークの形をなす。18C末~19C初め頃。

土師質土器(第15図・第5表)

122~129は焙烙である。推定口径が30~36cm程度が多い。割れやすく、それぞれ一部分しか残っていないため、耳付きかなどの特徴はつかめない。

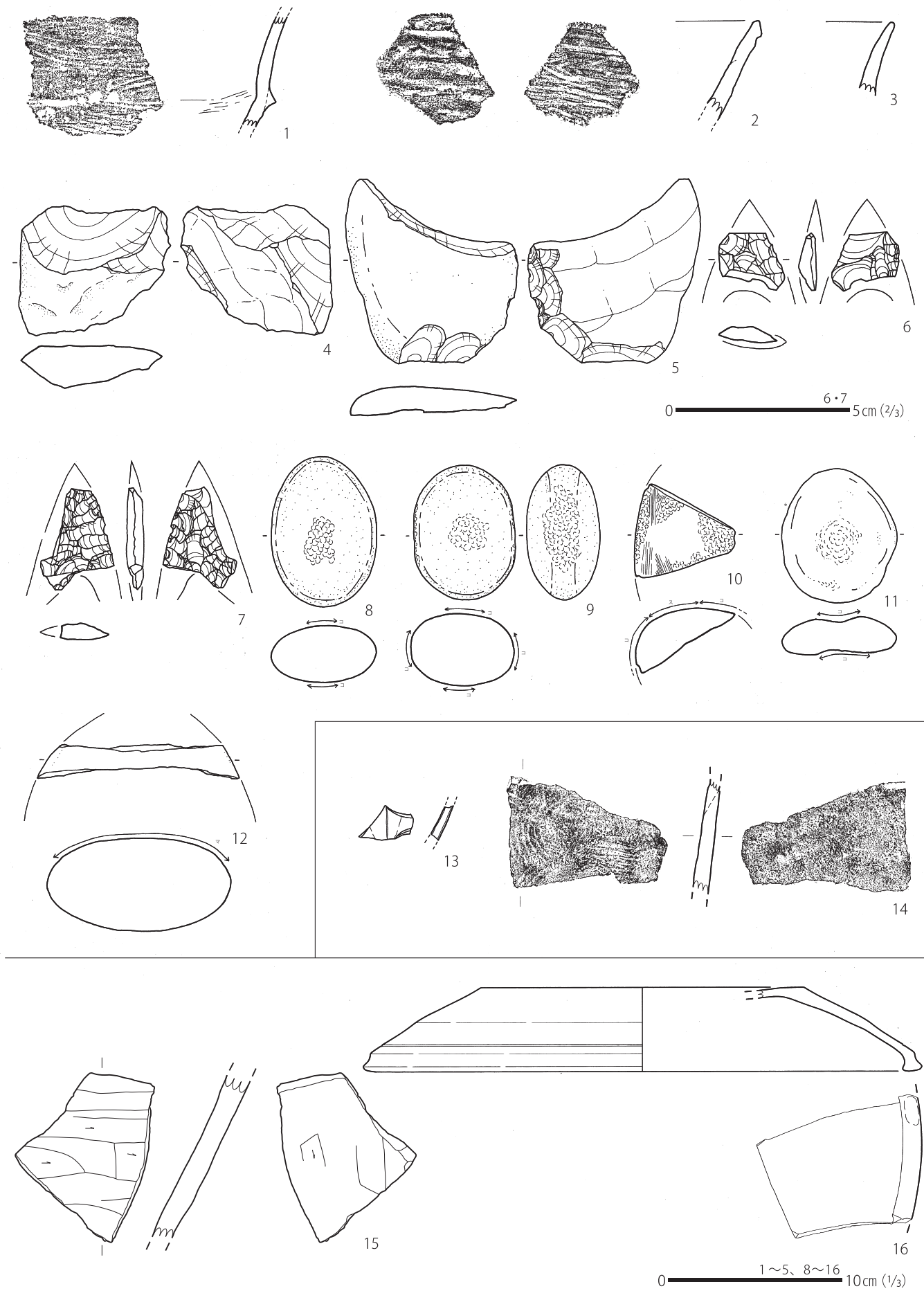
130は焙烙に似ているが、口縁部が内側に屈曲しているため、火鉢などではないかと思われる。131は灯明皿で透明釉を施している。

瓦(第15図・第6表)

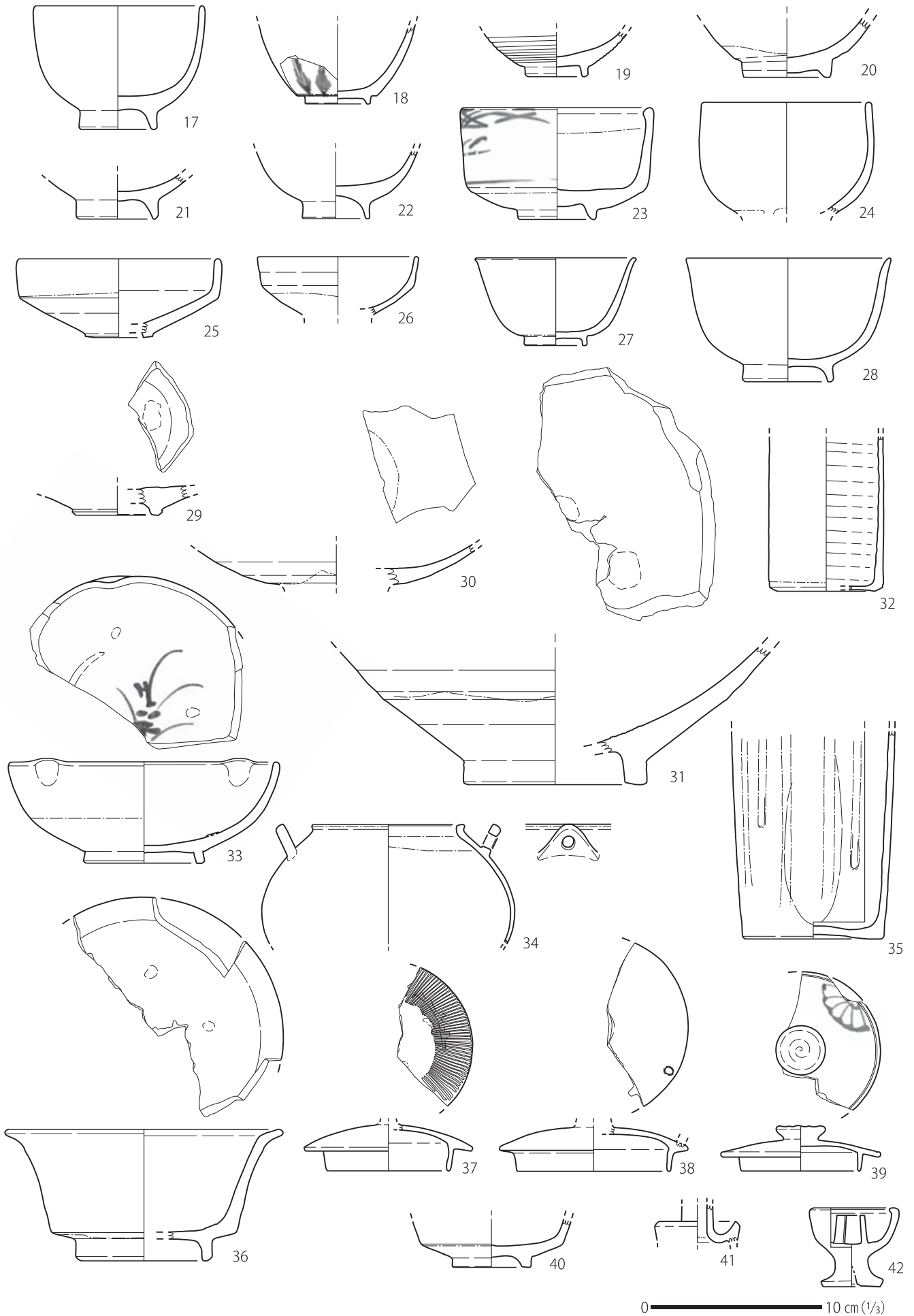
132・133・134は瓦で、瓦の出土はこの3点のみである。132は櫛歯状工具で縦・横に水切りの溝がつけられている。134は石英や千枚岩を含んでおり遺跡近辺で作られたものと思われる。(黒木誠)

石製品(第15図・第7表)

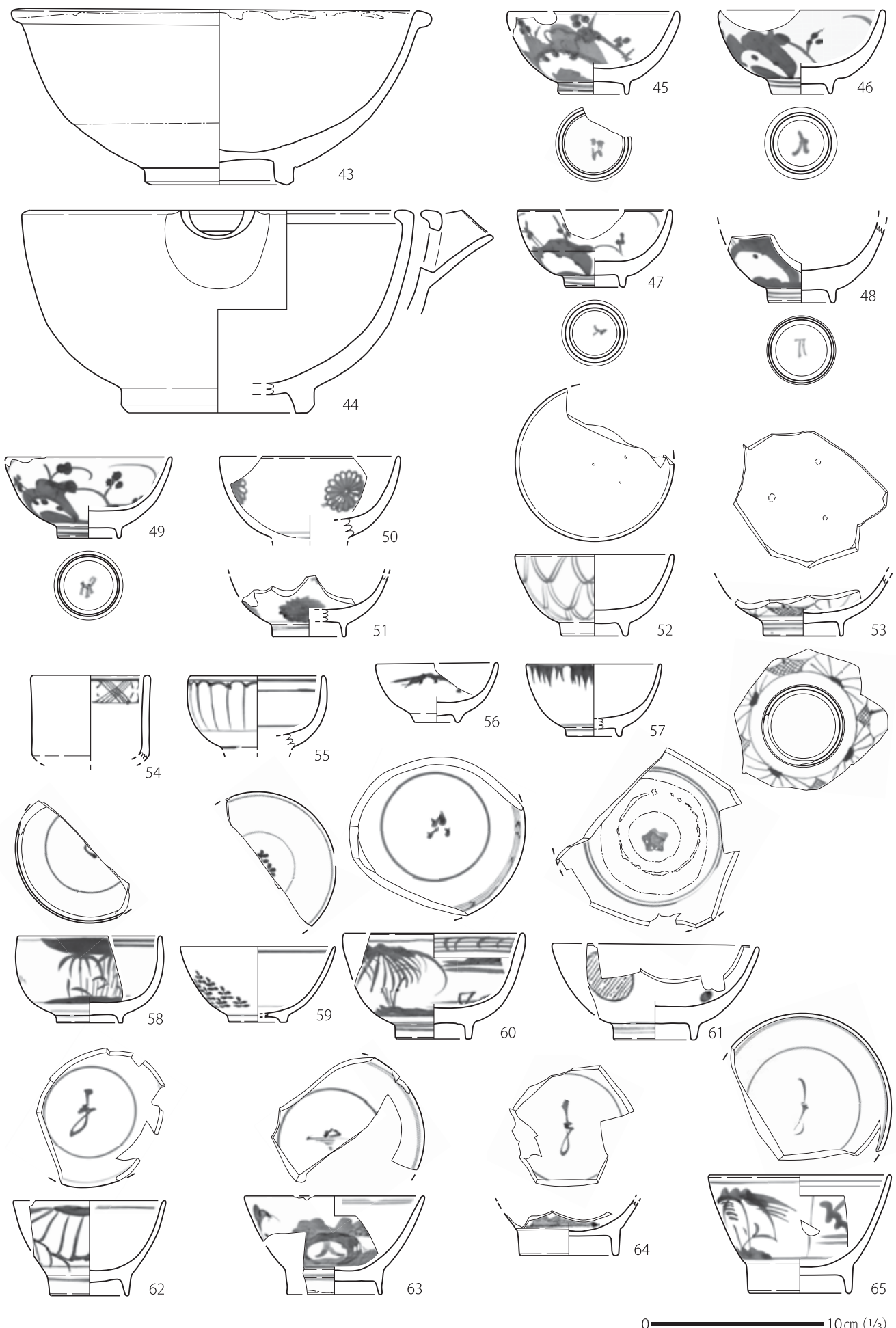
135は軽石製で、擦るような動作に用いられたようである。未図化の軽石塊1点もあり、いずれも海浜で採取されたのであろう。136の天草砥石は、陶磁器等とともに近世の広域流通品である。137は滋賀の高嶋硯。高島石は、琵琶湖西側の高島の阿弥陀山で採れる石が硯として最適だったことに由来し、虎斑石はその中での特選品を指す。江戸時代に大量生産された寺子屋での習字用の細長い形のものであろう。なお、高嶋硯は明治・大正にかけても大量に生産された。この他、時期等は不詳ながら、138は千枚岩製の紡錘車未製品あるいは石けりのような遊具等である。千枚岩製である点に北浦地域の独自性を見ることができる。火打石に関連する可能性を考えてチャート礫1点(139)・石英礫少量も回収したが、使用痕等の見られるものはな



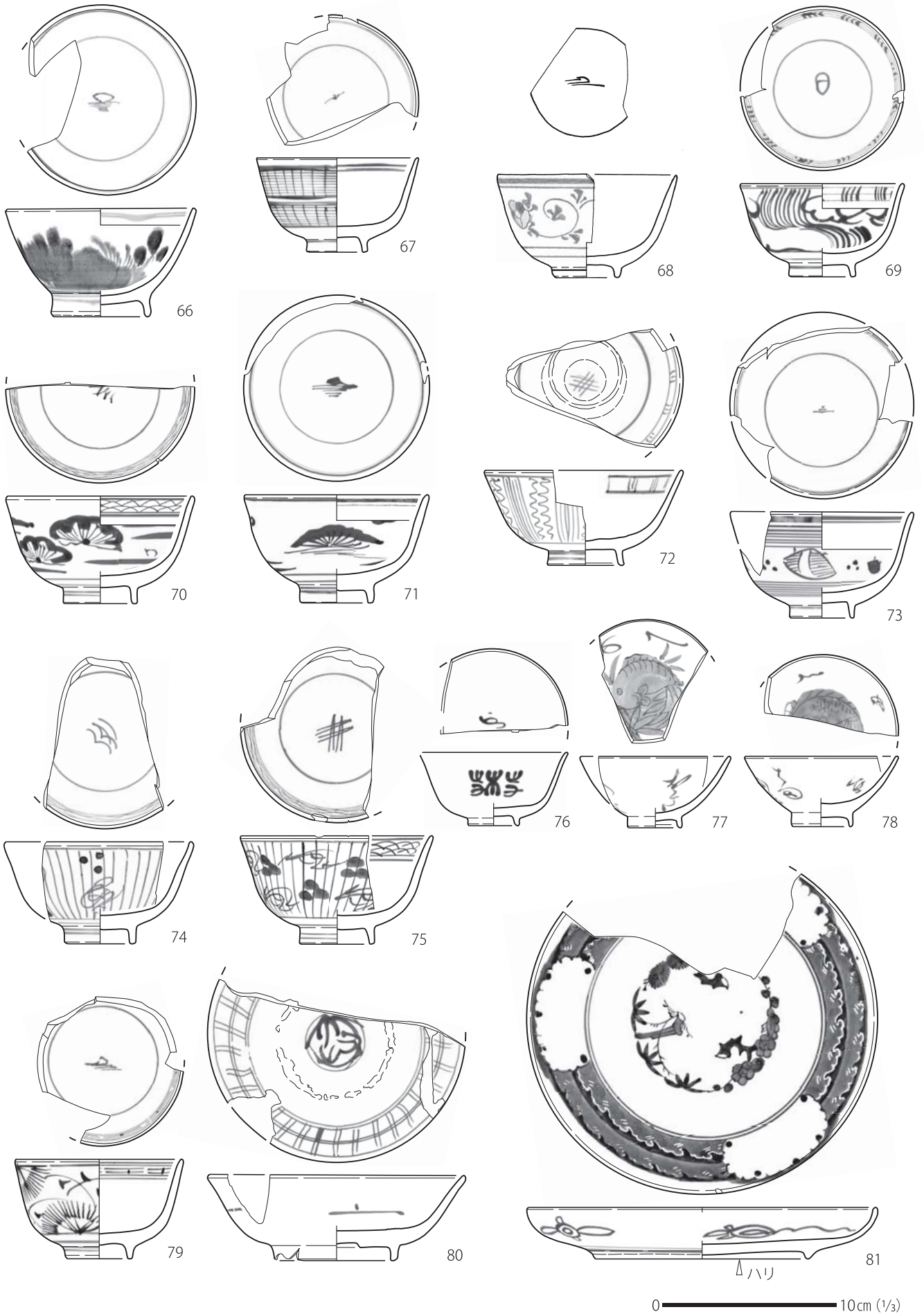
第8图 野地久保畠遺跡遺物実測図(1) 土器・石器・陶磁器



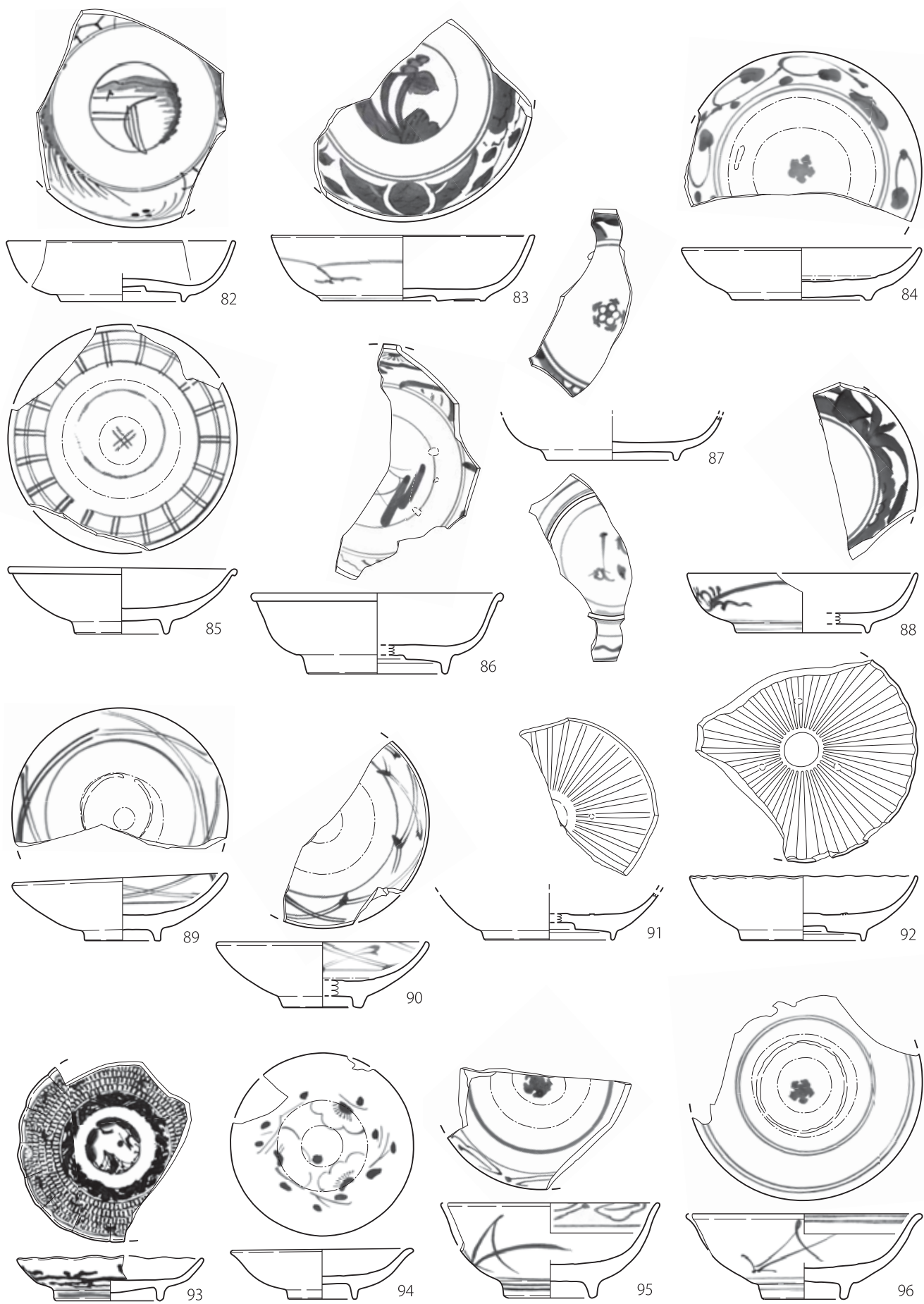
第9図 野地久保島遺跡遺物実測図(2) 陶磁器



第10図 野地久保島遺跡遺物実測図(3) 陶磁器

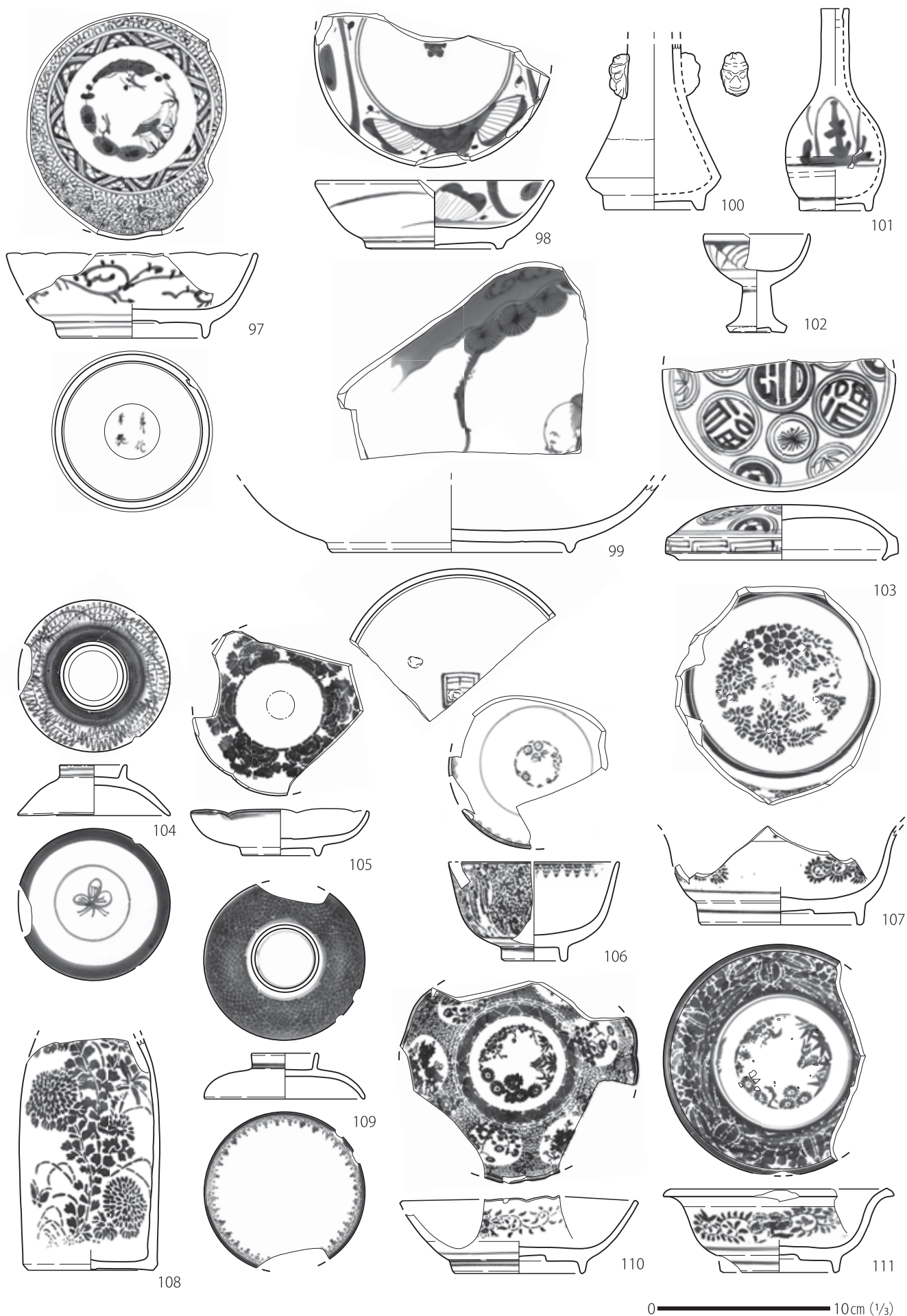


第11図 野地久保島遺跡遺物実測図(4) 陶磁器

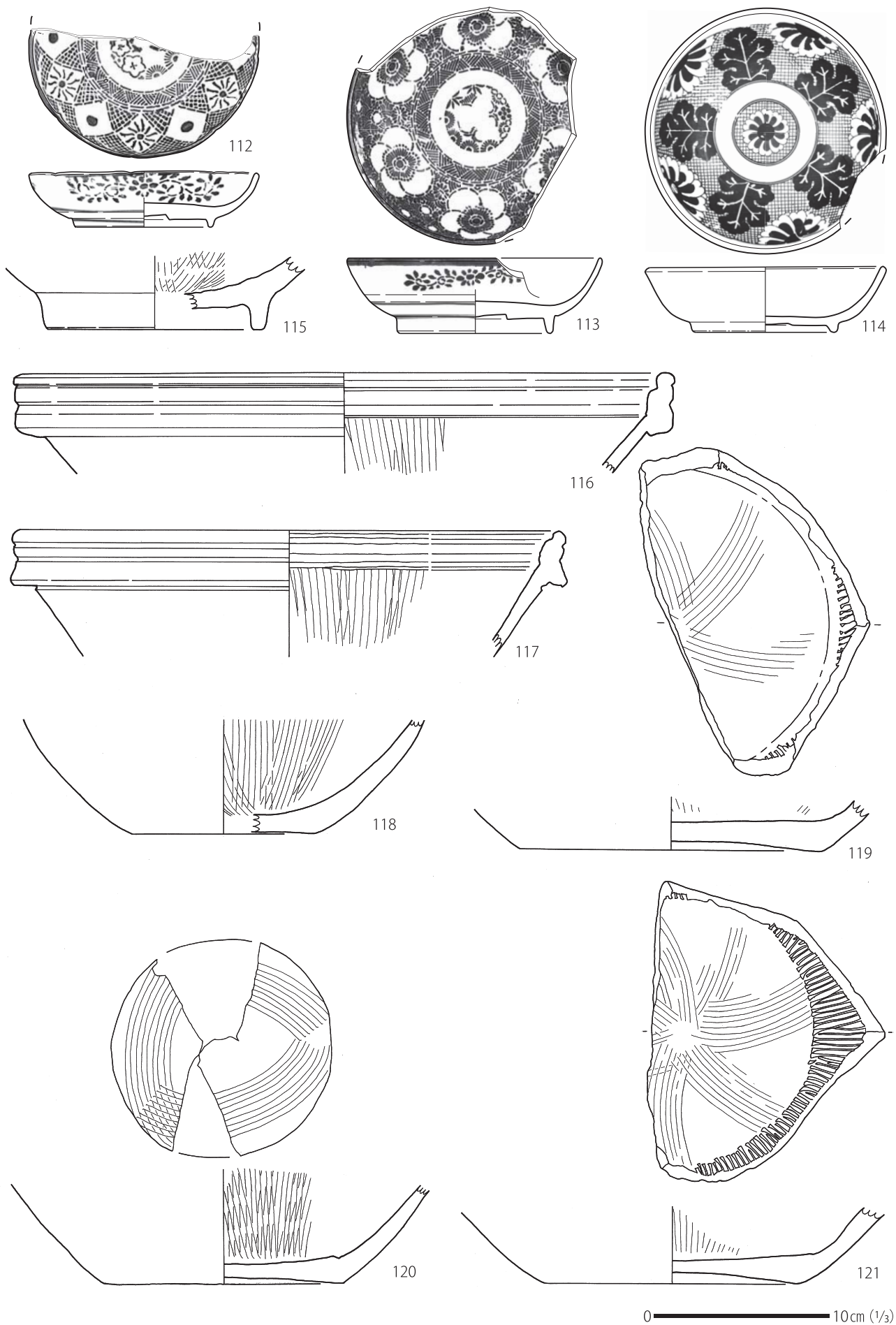


0 10cm (1/3)

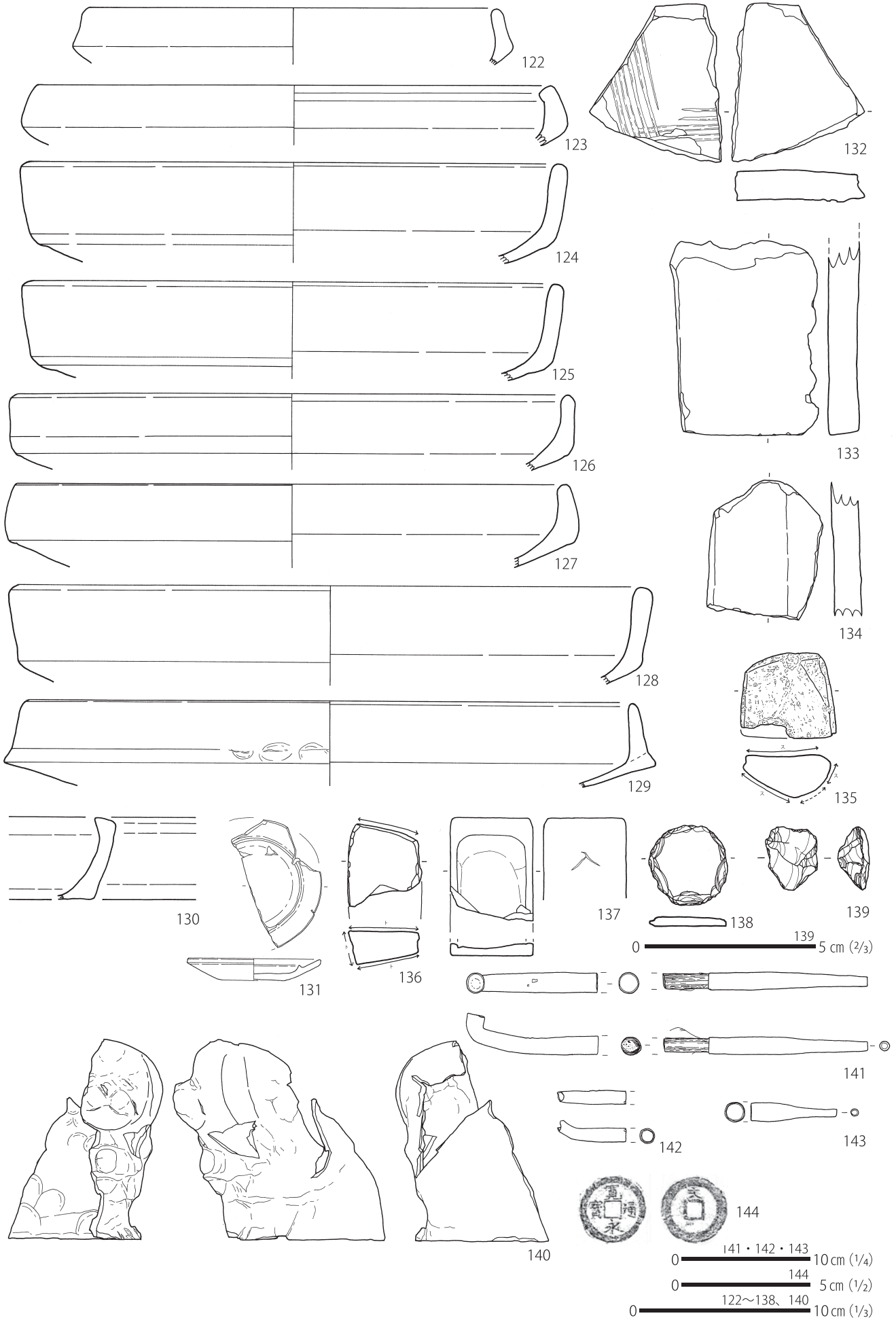
第12図 野地久保島遺跡遺物実測図(5) 陶磁器



第13図 野地久保島遺跡遺物実測図(6) 陶磁器



第14图 野地久保島遺跡遺物実測図(7) 陶磁器



第15図 野地久保島遺跡遺物実測図(8) 土師質土器・石製品・金属器・銭貨・その他

かった。(藤木)

銭貨・その他(第15図・第8表)

140は犬を模った土人形。型に手で押し固めて焼いたものと考えられる。外側表面に白い塗料がわずかに残っている。煙管は3点で、141は雁首・羅宇・吸口が揃っており、首部の湾曲が弱く火皿の口径も小さい。19C代かと推定される。142は雁首で火皿がない。143は吸口のみ。銭貨は2枚出土したが、腐食が少ない1点のみ図化した(144)。寛文期亀戸銭でいわゆる新寛永通宝である。(黒木誠)

4-3. 自然遺物(植物種子)

自然遺物に関しては第VI章第1節に掲載している。概要のみ述べると、平成21年度調査区(西側)で検出されたピットや土坑等414基中364基をフローテーション対象とした結果、29点の炭化種子が回収された。分類するとヤマモモ2、オヒシバ1、オオムギ2、ムギ類2、カヤツリグサ科2、マメ科1、不明植物遺体が19である。マメ科の炭化種子がみられたS107は、別の炭化材による放射性炭素年代測定で15C半ば~16C前半及び16C半ば~17C前半の年代が出ている。(黒木誠)

第5節. 小 結

今回の調査では、縄文時代晩期、古墳時代の土器・石器、中世の青磁がわずかに出土した。これに関連する遺構は検出されなかったが、この小さな谷に縄文時代晩期からの人々の生活が存在したことを断片的に伝えるものである。調査区は緩斜面で流水や土砂の堆積等の影響を繰り返し受け続けてきた。存在していた遺構が自然現象により壊されたことも十分考えられよう。

遺物の大半は18C後半~19C前半の陶磁器で占められているが、遺構から出土した遺物はわずかに2点だけである。遺物の年代をそのまま遺構の年代に当てはめることはできないため分けて考察する必要がある。

土坑から遺物が出土しなかったのは地形や自然現象によるかもしれない。いずれの土坑も他の遺構との関連性が薄く、目的用途も不明で時代の特特定もできない。

掘立柱建物跡の年代について。まずD4グリッドでⅢ層中に縄文時代晩期土器と新寛永通宝が混在していた。これらは土砂崩れ等の自然災害によって流れ込んだと考えられる。このため、Ⅲ層は少なくとも新寛永通宝

の鑄造年間(1668(寛文8)年~1686(天和3)年)それ以降に形成されたと考えられる。よって同じD4グリッドのⅡ層上で検出されたSB1・SB3・SB4は、さらにそれ以降と推定される。SB2・SB5もⅡ層上での検出であり、本調査区のSB1~SB5の建てられた年代の上限は17C末となる。

SB1~SB5年代の下限については、第2図と第16図の比較から考察してみたい。第16図は1887(明治20)年頃の地籍図である。「宅地」の面積が発掘調査直前の第2図ではやや広がっているものの、「畑地」との境界や段差等全体的な区画の変化はない。SB1~SB5は「畑地」にあり、19C末から現在までの主屋とは考えられない。18C末~19C初め頃になると民家でも礎石建物が登場し、規模の小さい納屋や厩屋でも掘立柱建物の構造は少なくなる。従ってSB1~SB5は明治から現在までのものである確率も低く、年代の下限は18C末~19C初め頃までと推定される。

ピット列の年代については、炭化材による放射性炭素年代測定を行った。詳しくは第VI章第1節に記述しているが、ピット列1を構成する4基のうち、備前焼出土以外の3基、すなわちS104でAD1460~1640年、S105でAD1440~1530年、AD1570~1630年、S107でAD1450~1530年、AD1550~1640年の結果を得た。同じくピット列2の2基の内、薩摩焼出土以外の1基であるS122がAD1460~1640年の年代値を得た。

ピット列2より出土した薩摩焼は形状から17C第2四半期~後半のものといえる。また、この陶器蓋の産地である堂平窯の稼働時期は17C代に止まる。よって、出土した陶磁器の特徴や年代測定の結果を総合して、ピット列1・2の年代は炭素年代測定で得られた年代の下限に近いと考えられよう。ただし、近世期の薩摩焼出土が宮崎県北部でほとんどみられないため、出土した薩摩焼には不明な点が多いのも事実である。

横穴については、2基とも防空壕として利用されたことは、周辺の市之串遺跡や海舞寺遺跡の例からみて間違いないようである。1号横穴はすぐ真下の2号横穴を防空壕として掘った当時の人々にも知られていないため、防空壕として新しく掘られたのか不明であり、何らかの穴を再利用した可能性も否定できない。

(黒木誠)



第五拾二番
字野地久保島

第16図 野地久保島遺跡地籍図 1887年頃

第2表 野地久保島遺跡遺物観察表(1) 土器

番号	注記	出土位置	時代	種別	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土	備考	残高
							内面	外面	内面	外面			
1	473	Ⅲ層上C4	縄文時代晩期	土器	深鉢	体	貝殻条痕後ナデ	貝殻条痕後ナデ 貼り付け突帯一条	10YR8/4浅黄橙	10YR8/6黄橙	やや密、白色粒子・角閃石(0.1)・ 灰色粒子	外→顔料付着か?	6.3
2	468	S7D5	縄文時代晩期	土器	深鉢	体	貝殻条痕	横ナデ	10YR7/6明黄褐	10YR8/6明黄褐	やや密、白色粒子・灰色粒子	接合部を斜目条痕で消す	5.7
3	481	Ⅱ層上E6	古墳時代中期	土師器	甕	口縁	横ナデ	横ミガキ	5YR6/6橙	7.5YR7/4にぶい橙	やや密、白色粒子・赤色粒子・ 灰色粒子		4.2

第3表 野地久保島遺跡遺物観察表(2) 石器

番号	注記	出土位置	時代	器種	石材	観察所見 ※法量単位:長・幅・厚=cm、重量=g	長	幅	厚	重量
4	498	Ⅱ層上	縄文	剥片	砂岩	粗い石質。正面には広く礫面が残る。石質の影響で、裏面の剥離面は凹凸が激しい。	7.6	8.7	2.6	153.6
5	499	Ⅱ層上	縄文	二次加工ある剥片	砂岩	粗い石質。正面には広く礫面が残る。剥片端部に粗い二次加工が入る。	10.7	10	1.7	190.2
6	502	Ⅱ層上	縄文	打製石鏃	姫島産 黒曜石	欠損著しいが、打製石鏃の一部と思われる。裏面の剥離面構成から、使用時の衝撃等で先端側・脚部側の両方より力が加わって砕けたものと見られる。	1.1	1.3	0.35	0.4
7	514	V層上C4	縄文	打製石鏃	姫島産 黒曜石	復元長最大で4.5cmの大型石鏃。欠損著しい。	2.9	2.1	0.5	2.3
8	492	Ⅱ層上C3	縄文～古墳	敲石	青砂岩	やや扁平な礫素材で、正面・裏面中央にきわめて弱い敲打痕あり。器面の一部は弱く赤化し、ススと見られる黒色物も付着する。器面全体に錆が備状に走っており、埋没中に農具等によって攪拌された結果のものであろう。	8.7	6.1	3.3	255.5
9	493	Ⅱ層上C2	縄文～古墳	敲石	青砂岩	円礫素材で、正面・裏面中央に弱い敲打痕、両側面に弱い面をなす広めの敲打痕がある。	7.8	6	4.2	282.9
10	496	Ⅱ層上	縄文～古墳	磨石	砂岩	円礫素材で、正面に磨痕か。また、正面には風化による器面の荒れか敲打痕か判断しにくい凹凸がある。欠損著しい。	5.5	5.9	3.8	93.5
11	494	Ⅱ層上	縄文～古墳	凹石	千枚岩	歪で平たい円礫の正面・裏面中央に浅い凹面をなす敲打痕あり。	7.8	6.6	2.2	170.2
12	497	Ⅱ層上	縄文～古墳	台石	砂岩	欠損著しいが、台石の一部と思われる。よく乾磨された円礫素材で、正面がよく磨滅する。器面・欠損面とも赤化しており、被熱によって破砕したものであろう。	2	11.8	5.5	144.5

第4表 野地久保島遺跡遺物観察表(3) 中世陶磁器

番号	注記	出土位置	産地	年代	種別	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土	法量		
								内面	外面	釉調	胎土		口径	底径	器高
13	455	Ⅱ層上E6		13c後半～ 14c	青磁	碗	胴	青磁釉	施釉 鎊蓮弁文	オリーブ灰(10Y6/2)	オリーブ灰(10Y6/2)	精良	-	-	-
14	149	I層			甕?	体		無釉、同心円・平行タタキ	ナデ	外面:灰黄褐(10YR5/2)	黄橙(10YR8/6)	3mm次の石英・4mm次の長石をわずかに含む	-	-	-

第5表 野地久保島遺跡遺物観察表(4) 陶磁器

番号	注記	出土位置	産地	年代	種別	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土	法量		
								内面	外面	釉調	胎土		口径	底径	器高
15	151	S103A2	備前	17c代	陶器	甕	体	横方向ナデ	縦方向ナデ	暗赤(7.5R3/4)	暗赤(7.5R3/4)	精良	-	-	-
16	150	S121B1	藤原堂平楽	17c後半	陶器	蓋	天井～口唇	口唇部以外全面施釉	貝目痕1つ	内面:灰白(2.5Y8/2)、外面:灰 オリーブ(7.5Y6/2)	赤褐(10R4/4)	1mm以下の白粒をわずかに含む	(185.0)	(30.5)	47.0
17	108	Ⅱ層上E6	唐津系	17c後半～18 c前半	陶器	碗	口～底	貫入	貫入、器具手碗	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/4)	精良	(96.5)	42.0	72.0
18	111	I層	関西系	18c後半～19 c前半	陶器	小碗	体～底	無文	小杉文、高台無釉	灰黄(2.5Y7/2)	灰白(5Y8/2)	精良	-	37.0	>46.5
19	116	I層	瀬戸・美濃系	19c前半	陶器	碗	底	銅緑釉	鉄釉、腰筋碗	内面:オリーブ黄(7.5Y6/3)、外 面:暗赤褐(10R3/2)	灰白(7.5Y8/1)	1mm以下の黒粒を含む	-	32.0	>25
20	117	I層	唐津系	17c	陶器	碗	底	灰釉	高台無釉	外面:灰白(2.5Y8/2)	明褐(7.5YR5/6)	1mm以下の白粒をわずかに含む	-	50.0	>34.5
21	123	I層	唐津系	17c後半～18 c前半	陶器	碗	底	貫入	高台量付砂付着	にぶい黄(2.5Y6/4)	浅黄(2.5Y7/3)	精良	-	44.0	>26
22	126	Ⅱ層上C3	唐津系	17c後半～18 c前半	陶器	碗	体～底	貫入	貫入	灰オリーブ(5Y5/3)	灰白(5Y7/2)	精良	-	38.0	>39
23	401	I層	小峰焼?	18c～19c前 半	陶器	碗	口～底	口縁部のみ施釉	腰下無釉、草文	内面:暗赤(10R3/4)、外面:明 緑灰(10GY7/1)	明赤(10R3/4)	精良	(108.0)	(50.0)	65.0
24	416	I層	瀬戸・美濃系	18c後半～19 c前半	陶器	碗	口～底	灰釉	灰釉、高台無釉	外面:灰オリーブ(5Y6/2)	灰白(5Y7/1)	1mm以下の白粒をわずかに含む	(95.0)	-	>65
25	102	I層			陶器	碗	口～底	施釉	回転へう削り、口縁部下のみ施 釉	暗オリーブ灰(5Y3/1)	にぶい黄橙(5YR6/4)	精良	(116.0)	(23.5)	>46
26	105	I層			陶器	碗	口～底	施釉	高台無釉	暗赤褐(2.5YR3/3)	灰黄褐(10YR5/2)	精良	(92.0)	-	>34
27	115	I層	関西系? 古城焼?	19c	陶器	端反碗	口～底	貫入	貫入、高台無釉	灰(5Y6/1)	灰白(5Y8/2)	精良	94.0	34.0	51.0
28	399	I層	唐津系	19c前半?	陶器	端反碗	口～底	無文、貫入	高台量付に砂、貫入、器具手 碗?	淡黄(2.5Y8/3)	灰白(2.5Y8/2)	精良	(119.5)	36.0	72.0
29	125	I層	唐津系	17c前半	陶器	皿?	底	見込砂目、青磁	高台無釉	内面:灰オリーブ(7.5Y6/2)、外 面:明赤褐(5YR5/6)	浅黄(2.5Y7/3)	精良	-	(48.0)	>17
30	107	Ⅱ層上C3	唐津系	17c後半～18 c前半	陶器	皿	底	見込蛇ノ目軸刺ぎ、銅緑釉	透明釉、高台無釉	内面:緑灰(10G5/1)、外面:浅 黄(7.5Y7/3)	浅黄橙(10YR8/4)	精良	-	-	>2.5
31	146	I層	唐津系	17c後半～18 c前半	陶器	鉢	底	白土の上に褐釉(二彩手?)、 砂目跡2つ	高台無釉	内面:淡黄(5Y8/3)、外面:暗 灰黄(2.5Y5/2)	赤褐(2.5YR4/6)	精良	-	(100.0)	>80
32	404	I層	関西系		陶器	瓶	体～底	施釉、把手		外面:緑・こげ茶・白	灰白(5Y7/2)	精良	-	56.0	>90
33	142	I層	丸山焼	19c半ば	陶器	鉢	口～底	見込草文、ハマ旗3つ、貫入	高台無釉	内面:灰白(5Y7/2)、外面:灰 オリーブ(5Y4/2)	褐(7.5YR4/6)	精良	(154.0)	(68.0)	51.0
34	95	I層		19c	陶器	土瓶(丸型)	口～体	口縁部下幅15mm程のみ施釉	把手	外面:灰黄褐(10YR5/2)	にぶい黄橙(10YR6/3)	精良	(88.0)	(148.0)	>70
35	135	I層	瀬戸・美濃系	19c前半	陶器	瓶	体～底	無釉	灰釉流し	外面:暗赤褐(5YR3/4)	灰オリーブ(5Y6/2)	1mm以下の白粒を含む	-	(79.0)	>121
36	121	I層			陶器	鉢	口～底	見込目跡2つ	高台無釉	黒褐(10YR3/2)	にぶい橙(5YR7/4)	1mm以下の白粒をわずかに含む	162.0	73.0	76.5

番号	注記	出土位置	産地	年代	種別	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土	法量		
								内面	外面	釉調	胎土		口径	底径	器高
37	101	I層	關西系	19c	陶器	蓋	天井～口唇	無釉	とびカンナ、釉切れ箇所あり	外面：黄褐(10YR5/8)	淡黄(2.5Y8/3)	精良	(70.0)	—	>27.5
38	104	I層			陶器	蓋	天井～口唇	無釉	重ね焼き目跡1つ、鉄釉	外面：暗赤褐(2.5YR3/3)	明黄褐(10YR6/6)	精良	(88.0)	—	>27
39	103	I層	關西系	19c	陶器	蓋	つまみ～口唇	無釉	円盤形つまみ、イチタン描(半菊文)、灰釉	外面：灰(7.5Y7/1)	オリーブ黒(10Y3/1)	精良	(64.0)	—	26.5
40	119	I層	唐津系？	18c後半？	陶器	香炉？火入？	底	無釉	灰釉、高台無釉	外面：淡黄(2.5Y8/4)	淡黄(2.5Y8/4)	精良	—	44.0	>28.5
41	410	I層	在在		陶器	乗燭	体	施釉	施釉	黒褐(10YR3/1)	にふい黄褐(10YR7/4)	精良	(44.0)	—	>22
42	409	I層	在在		陶器	乗燭	口～底	施釉	口縁部のみ施釉	外面：暗赤(7.5R3/4)	橙(5YR6/6)	精良	(49.0)	33.0	46.0
43	435	I層	中国地方？ 關西？	18c後半～ 19c前半	陶器	鉢？片口？	口～底	ハマ痕5つ	口縁部無釉、腰下無釉	外面：灰白(N6/)	橙(7.5YR6/6)	精良	228.0	78.0	102.5
44	136	I層	九州？		陶器	片口	口～底	ハマ痕4つ	釉輪、ウノフ釉流し、高台無釉	青と白	橙(5YR7/6)	精良	218.0	104.0	117.5
45	1	I層	肥前系	18c後半	磁器	碗	口～底	無文	雪輪草花文、高台内「大明年製」のくずし	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	98.0	38.0	48.0
46	2	I層	肥前系	18c後半	磁器	碗	略完形	無文	雪輪草花文、高台内「大明年製」のくずし	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	94.0	34.5	49.0
47	3	I層	肥前系	18c後半	磁器	碗	略完形	無文	雪輪草花文、高台内「大明年製」のくずし	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	88.0	34.0	45.0
48	6	I層	肥前系	18c後半	磁器	碗	胴～底	無文	雪輪草花文、高台内「大明年製」のくずし	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	—	38.0	47.0
49	7	I層	肥前系	18c後半	磁器	碗	略完形	無文	雪輪草花文、高台内「大明年製」のくずし	灰白(2.5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	95.0	35.0	47.0
50	15	I層	肥前系	18c前半	磁器	碗	口～体	無文	コンニャク印判菊花文、圏線	灰白(2.5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(101.5)	—	>48
51	21	I層	肥前系	19c前半	磁器	碗	体～底	無文	コンニャク印判菊花文、圏線	灰白(2.5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	—	(40.0)	>35
52	17	I層	肥前系	18c前半	磁器	碗	体～底	ハマ痕1つ	二重欄目文	灰白(2.5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	90.0	37.0	47.5
53	22	I層	肥前系	18c末～19c 前半	磁器	碗	底	ハマ痕3つ	圏線、格子地半菊花文	明緑灰(10GY8/1)	灰白(N8/)	精良	—	(44.0)	>35.5
54	112	I層	肥前系青磁	18c後半	磁器	筒型碗	口～体	口縁部に「四方博文」、透明釉	青磁釉	内面：明緑灰(7.5GY8/1)、外面：明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	(66.0)	—	>50
55	152	I層	肥前系	19c前半	磁器	湯呑碗	口～体	圏線、口縁部二重圏線	虫毫文	灰白(N8/)	灰白(N8/)	精良	(77.0)	—	>43.5
56	156	I層	肥前系	18c後半	磁器	坏	口～底	無文	笹文、高台畳付に砂付着	灰白(10Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	69.0	25.0	35.0
57	158	I層	肥前系	18c前半	磁器	碗	口～底	無文	雨降文、圏線	灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	(79.0)	(30.0)	42.0
58	161	I層	肥前系	19c前半	磁器	湯呑碗	口～体	見込圏線、口縁部二重圏線	竹文、圏線	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	(82.5)	(38.0)	50.5
59	154	I層	肥前系	17c末～18c 初め？	磁器	碗	口～底	圏線、見込若草文	五葉若草重ね文、圏線	灰白(10Y8/1)	灰白(5Y8/1)	精良	(89.0)	(33.0)	44.0
60	16	I層	肥前系	18c後半	磁器	碗	口～底	見込変形文字、圏線、格子文	柳？海浜風景文、高台畳付に砂付着	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/)	5mm以下の黒粒をわずかに含む	(100.5)	—	60.0
61	11	I層	肥前系	19c前半	磁器	碗	口～底	見込コンニャク印判五弁文、蛇の目軸剥ぎ	丸文、圏線	灰白(N7/)	灰白(N8/)	1mm以下の黒粒をわずかに含む	(112)	46.0	56.0
62	13	I層	肥前系	18c末～19c 前半	磁器	広東碗	口～底	見込変形文字、圏線	半菊花文、圏線	灰白(N8/)	灰白(N8/)	精良	(87.5)	44.5	55.0
63	14	I層	肥前系	18c末～19c 前半	磁器	広東碗	口～底	見込岩波、圏線、二重圏線	二重圏線、草花文？	灰白(2.5GY8/1)	灰白(N8/)	1mm以下の黒粒をわずかに含む	(104.5)	54.0	57.0
64	18	I層	肥前系	18c末～19c 前半	磁器	広東碗	底	見込「寿」文字、圏線	高台畳付に砂付着	明緑灰(10GY8/1)	灰白(N8/)	精良	—	55.0	>32.5
65	24	I層	肥前系	18c末～19c 前半	磁器	広東碗	口～底	見込「寿」文字、圏線	海浜風景文	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(104.0)	(58.0)	68.5
66	12	I層	肥前系	18c末～19c 前半	磁器	広東碗	口～底	見込岩波、圏線	草花文、圏線	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	106.5	53.5	62.0
67	239	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込？、圏線、口縁部二重圏線	格子文、圏線	明緑灰(7.5GY8/1)	灰白(10Y8/1)	精良	(91.0)	36.0	54.0
68	210	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込岩波、圏線、口縁部圏線	牡丹唐草文	灰白(2.5GY8/1)	灰白(2.5GY8/1)	精良	(10.2)	3.8	5.9
69	218	I層	肥前系？	19c前半	磁器	端反碗	口～底	圏線、口縁部二重圏線、見込？	雲？、圏線	明オリーブ灰(5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	92.0	34.0	53.5
70	221	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込草文、青海波文、圏線	松風・帆船文、圏線	灰白(5GY8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	(105.0)	(41.0)	61.5
71	224	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	略完形	見込鳥、圏線、二重圏線	鳥文、松、圏線	灰白(10Y8/1)	灰白(N8/)	精良	104.0	38.0	62.0
72	225	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	略完形	見込斜格子、口縁部に梯子状の幾何学文	よろけ縹文、腰部に圏線	灰白(2.5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(112.0)	42.0	54.5
73	227	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込岩波、圏線、口縁部二重圏線	多重圏線	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	103.0	35.0	61.0
74	228	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込波文、圏線、青海波文	格子文、草花文、圏線	灰白(2.5GY8/1)	灰白(10Y8/1)	精良	(106.5)	40.5	58.5
75	229	I層	肥前系	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込斜格子文、圏線、青海波文	格子文、草花文、圏線	明緑灰(7.5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(109.0)	(50.0)	62.0
76	167	I層	瀬戸美濃	19c前半～ 19c後半	磁器	小碗、口缸	口～底	見込岩波、口縁部鉄釉	喜喜文字崩し	灰白(10Y8/1)	灰白(10Y8/1)	精良	(84.0)	28.0	42.0
77	172	I層	肥前系	18c後半～ 19c前半	磁器	坏	口～底	文字銘を朱書き、顔は紫・水草は緑色	文字銘を朱書き	白	灰白(10Y8/1)	精良	84.0	29.5	41.0
78	174	I層	肥前系	18c後半～ 19c前半	磁器	坏	口～底	文字銘を朱書き、顔は紫・水草は緑色	文字銘を朱書き	白	灰白(10Y8/1)	精良	(87.5)	(33.0)	40.5
79	240	I層	肥前系？	19c前半	磁器	端反碗	口～底	見込岩波、多重圏線	松？、圏線	明オリーブ灰(5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	(94.0)	(50.0)	57.0
80	46	I層	肥前系	18c前半	磁器	皿	口～底	見込草文、蛇ノ目軸剥ぎ、二重格子文	凹形高台、高台畳付に砂付着	明オリーブ灰(2.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	146.0	76.0	49.5
81	51	I層	肥前系	18c後半	磁器	皿	口～底	瓊状松竹梅文、圏線	ハリ跡3つ、草花文	灰白(5GY8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	199.0	121.5	29.5
82	70	II層上A6	肥前系	19c前半	磁器	皿	口～底	見込船帆文、圏線、亀甲文	蛇ノ目凹形高台	灰白(N8/)	灰白(N8/)	精良	(126)	70.0	34
83	65	I層	肥前系	19c前半	磁器	皿	口～底	見込草花文、草花文	蛇ノ目凹形高台	灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	148.0	90.0	37.0

番号	注記	出土位置	産地	年代	種別	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土	法量		
								内面	外面	釉調	胎土		口径	底径	器高
84	67	I層	肥前系	18c後半~18c末	磁器	皿	口~底	見込コンニャク印判、蛇ノ目軸刺ぎ、菊唐草文	無文、割れあり、高台曇付に砂付着	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	133.0	73.0	29.0
85	193	I層	肥前系	18c前半~18c後半	磁器	皿	口~底	蛇ノ目軸刺ぎ、見込格子文、格子文	無文	灰白(10Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	126.0	50.0	38.0
86	54	I層	肥前系	19c前半	磁器	皿	口~底	ハマ痕2つ、圏線	蛇ノ目凹形高台	明緑灰(7.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	(139.0)	(76.0)	45.5
87	71	I層	肥前系	18c前半	磁器	皿	体~底	五弁花文、二重圏線、半菊文?	圏線、やや崩れた「大明年製」	灰白(5GY8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	—	(72.0)	>25
88	196	I層	肥前系	18c後半	磁器	皿	口~底	草花文、圏線	唐草文、圏線	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(128.0)	(73.0)	33.5
89	200	I層	肥前系	18c後半~19c初め	磁器	皿	口~底	蛇ノ目軸刺ぎ、圏線、二重斜格子文	無文	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	118.5	42.0	33~38
90	198	I層	肥前系	18c後半~19c初め	磁器	皿	口~底	蛇ノ目軸刺ぎ、圏線、二重斜格子文	無文	灰白(10Y8/1)	灰白(N8/)	精良	(116.0)	(43.0)	37.0
91	187	I層	肥前系白磁	19c前半	磁器	輪花皿	底	ハマ痕1つ、菊花型打ち	蛇ノ目凹形高台	灰白(7.5Y8/2)	灰白(10Y8/1)	1mm以下の黒粒を含む	—	(71.0)	>26.5
92	191	I層	肥前系白磁	19c前半	磁器	輪花皿	口~底	ハマ痕3つ、菊花型打ち	蛇ノ目凹形高台	灰白(N8/)	灰白(N8/)	1mm以下の黒粒を含む	(125.5)	69.0	36.5
93	195	I層	肥前系	18c末~19c前半	磁器	皿	口~底	環状松竹梅文、鹿ノ子文	唐草文	灰白(2.5GY8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	(104.0)	58.0	24.0
94	185	I層	肥前系	18c後半~19c前半	磁器	皿	略宍形	蛇ノ目軸刺ぎ、赤・黄による梅文	無文	灰白(10Y8/1)	灰白(N8/)	精良	100.0	38.0	28.5
95	197	I層	肥前系	18c後半	磁器	小鉢	口~底	見込コンニャク印判、蛇ノ目軸刺ぎ、圏線	圏線、折松葉文	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(123.0)	(47.0)	53.5
96	204	I層	肥前系	18c後半	磁器	小鉢	口~底	見込コンニャク印判、二重圏線、蛇ノ目軸刺ぎ	折松葉文	灰白(N8/)	灰白(N8/)	精良	(130.0)	50.0	48.0
97	66	I層	肥前系	18c末~19c前半	磁器	深皿	口~底	環状松竹梅文、鹿ノ子文	蛇ノ目凹形高台、唐草文、「成化年製」	明緑灰(7.5GY7/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	(141.5)	83.0	49.5
98	72	I層	肥前系	18c後半	磁器	深皿	口~底	見込コンニャク印判、草花文、ハマ痕1つ	唐草文、高台内変形文字、高台曇付に砂付着	灰白(5GY8/1)	灰白(N8/)	精良	(135.0)	(72.0)	39.5
99	38	I層	肥前系	19c前半	磁器	大皿	体~底	人物、松	高台内縁あり、高台内ハリ跡2つ	明緑灰(7.5GY7/1)	灰白(N8/)	精良	—	(138.0)	>39
100	147	I層	肥前系		磁器	花瓶(尊形)	体~底	無軸	腰下鉄軸、把手部人面?	外面上部:灰白(5Y7/1)、外面下部:オリーブ黒(5Y3/2)	灰白(N8/)	精良	—	57.0	>26
101	69	I層	肥前系	19c前半	磁器	瓶	略宍形	無軸	草花、若松、葛巻底	外面:灰白(10Y8/1) 内面:灰白(N8/)	灰白(N8/)	精良	16.0	40.0	117.0
102	58	I層	肥前系	18c後半~19c前半	磁器	仏飯器	口~底	無文	赤絵による半菊花文、圏線	灰白(10Y8/1)	灰白(N8/)	精良	(60.0)	30.0	57.0
103	160	I層		19c前半	磁器	蓋	天井~口番	口縁部無軸	丸文、「福」文字等、圏線、口縁部雷文	灰白(2.5Y8/2)	灰白(5Y8/1)	精良	(119.0)	—	32.0
104	165	I層		19c前半	磁器	蓋	略宍形	花?、圏線	唐草?	灰白(7.5Y8/1)	灰白(7.5Y8/1)	精良	87.0	(37.0)	29.0
105	33	I層	明治以降		磁器	皿	体~底	コバルト型紙転写、蛇ノ目軸刺ぎ、草文	無文	コバルト	灰白(7.5Y8/1)	1mm以下の黒粒をわずかに含む	(101.5)	44.0	27.0
106	220	I層	明治以降		磁器	端碗	口~底	環状松竹梅文、圏線、環状文	コバルト型紙転写花弁文・鹿の子文・藤、圏線	灰白(5GY8/1)	灰白(5Y8/2)	精良	(97.5)	34.5	58.0
107	30	I層	明治以降		磁器	深皿	体~底	ハマ痕5つ、コバルト型紙転写、環状草文?	蛇ノ目凹形高台、圏線	コバルト	灰白(N8/)	精良	—	92.0	—
108	148	I層	明治以降		磁器	瓶	体~底	施釉	コバルト型紙転写、草花文	灰白(10Y7/1)	灰白(N8/)	精良	(81.5)	72.0	>134
109	157	I層	明治以降		磁器	蓋	略宍形	環状文	コバルト型紙転写	コバルト	灰白(N8/)	精良	92.0	37.5	26.5
110	37	I層	明治以降		磁器	皿	口~底	コバルト型紙転写、花文、環状松竹梅文	蛇ノ目凹形高台	コバルト	灰白(N8/)	精良	(134)	73.0	45.0
111	31	I層	明治以降		磁器	小鉢	口~底	コバルト型紙転写、花文、環状松竹梅文	蛇ノ目凹形高台、圏線	コバルト	灰白(N8/)	1mm以下の黒粒をわずかに含む	125.5	65.0	48.0
112	36	I層	明治以降		磁器	皿	口~底	コバルト型紙転写、圏線、国旗、環状松竹梅文	蛇ノ目凹形高台、型紙摺花唐草	コバルト	灰白(7.5Y8/1)	精良	128.0	76.5	31.5
113	35	I層	明治以降		磁器	鉢	口~底	コバルト型紙転写、花文、環状松竹梅文	蛇ノ目凹形高台、型紙摺花唐草	コバルト	灰白(N8/)	精良	(143)	86.0	42.5
114	32	I層	明治以降		磁器	皿	略宍形	コバルト型紙転写、圏線、草花文	凹形高台	コバルト	灰白(N8/)	精良	132.5	78.5	37.5
115	457	I層	備前	19c	陶器	播鉢	底部	7条の備目を見込まで施す	高台あり、高台内部まで施釉(暗赤色Hue7.5 YR2/4)	橙(2.5 YR6/8)	橙(2.5 YR6/8)	1mm以下の黒色土粒を含む	—	(12.6)	—
116	463	I層	堺・明石系	19c	陶器	播鉢	口縁部	10条の備目・2本の凹線	2本の凹線・口縁部下部に削り	橙(2.5 YR6/8)	橙(2.5 YR6/8)	1mm以下の灰白色土粒を含む	(36.4)	—	—
117	459	II層上C3	堺・明石系	19c	陶器	播鉢	口縁部	9条の備目・2本の凹線	2本の凹線・口縁部下部に削り	橙(2.5 YR6/8)	橙(2.5 YR6/8)	1mm以下の灰白色土粒を多く含む	(30.9)	—	—
118	178	I層	備前	18c	陶器	播鉢	底部	9条の備目を見込まで施す	回転ナデ	橙(5 YR7/6)	橙(5 YR7/6)	1mm以下の灰白色土粒を含む	—	(10.6)	—
119	462	I層	堺・明石系	19c	陶器	播鉢	底部	見込7条の備目が放射状に	回転ナデ	橙(2.5 YR6/8)	橙(2.5 YR6/8)	5mm以下の灰白色土粒・1mm以下の黒色土粒を含む	—	(17.4)	—
120	464	I層	堺・明石系	19c	陶器	播鉢	底部	見込9条の備目が三角形に	回転ナデ	橙(2.5 YR6/8)	橙(2.5 YR6/8)	1mm以下の灰白色土粒を含む	—	(13.8)	—
121	460	I層	堺・明石系	19c	陶器	播鉢	底部	見込8条の備目が放射状に	回転ナデ	赤(10R5/8)	赤(10R5/8)	1mm以下の灰白色土粒・5mm程の石?をわずかに含む	—	(14.4)	—
122	131	II層上D3		19c	土師黄土	焙烙	口~底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:にふい縄(7.5YR5/4)	外:にふい縄(7.5YR5/4)	1mm程の灰白色土粒を含む	(23.9)	—	—
123	132	I層		19c	土師黄土	焙烙	口~底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:橙(7.5YR7/6)	外:橙(7.5YR7/6)	1mm程の灰白色土粒を多く含む	(30.2)	—	—
124	427	II層上A6		19c	土師黄土	焙烙	口~底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:明赤褐(5YR5/6)	外:黒褐(5YR2/1)	1mm程の灰白色土粒・1mm以下の赤褐色土粒を含む	(30.8)	—	—
125	428	II層上A6		19c	土師黄土	焙烙	口~底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:にふい赤褐(5YR5/4)	外:黒褐(7.5YR3/1)	1mm程の灰白色土粒・1mm以下の赤褐色土粒を含む	(30.6)	—	—
126	127	I層		19c	土師黄土	焙烙	口~底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:にふい橙(7.5YR7/4)	外:にふい縄(7.5YR6/3)	2mm以下の灰白色土粒を含む	(32.2)	—	—
127	128	I層		19c	土師黄土	焙烙	口~底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:橙(5YR6/6)	外:橙(5YR7/6)	0.5mm程の灰白色土粒をわずかに含む	(31.8)	—	—

番号	注記	出土位置	産地	年代	種別	器種	部位	文様・調整の特徴		色調		胎土	法量		
								内面	外面	釉調	胎土		口径	底径	器高
128	429	Ⅱ層上A6		19c	土師質土	焙烙	口～底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:にぶい赤褐(5YR5/4)	外:にぶい橙(5YR6/4)	1mm程の灰白色土粒・1mm以下の赤褐色土粒を含む	(36.2)	—	—
129	133	I層		19c	土師質土	焙烙	口～底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:橙(5YR6/6)	外:橙(5YR7/6)	1mm程の灰白色土粒を含む	(35.6)	—	—
130	130	I層		19c	土師質土器		口～底	内外面は回転ナデ	内外面は回転ナデ	内:浅黄橙(7.5YR8/6)	外:にぶい橙(7.5YR7/4)	1mm以下の赤褐色土粒を含む	—	—	—
131	454	I層		19c?	土師質土	灯明皿	口～底	横方向ナデ	横方向ナデ	明赤褐(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	精良	(7.7)	(3.6)	1.3

第6表 野地久保畠遺跡遺物観察表(5) 瓦

番号	注記	出土位置	種別	器種	文様・調整の特徴	色調		胎土	法量			
						釉調	胎土		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
132	177	Ⅱ層上	瓦	瓦	片面に楕歯状工具で縦・横の文様	内:にぶい橙(7.5Y6/4)	外:灰黄褐(10YR6/2)	7mm以下の灰白色粒、3mm以下の灰黄色粒をわずかに含む	(9.3)	(7.5)	1.8	120.0
133	515	Ⅳ層中C5	瓦	瓦		内:にぶい黄橙(10YR7/2)	外:にぶい黄橙(10YR7/4)	2mm以下の黒色土粒を少し含む	(11.4)	(8.5)	1.9	235.1
134	129	Ⅱ層上	瓦	瓦		内:灰黄(2.5Y6/2)	外:灰黄褐(10YR6/2)	5mm程の石英、1cm程の千枚岩をわずかに含む	(8.0)	(6.7)	1.7	117.2

第7表 野地久保畠遺跡遺物観察表(6) 石製品

番号	注記	出土位置	時代	器種	石材	観察所見	法量			
							口径	底径	器高	重量
135	508	Ⅱ層上	近世	研磨具	軽石	使用によって、正面は緩く凹む。側面から裏面にも使用痕と思われる緩い凸面ならびに平坦面がある。裏面には黒色の付着物があり、油分といった有機質の可能性はある。	5.0	5.2	2.7	13.9
136	488	Ⅱ層上	近世	砥石	天草産	四角柱状に研ぎ込まれる。左面等は砥石分割成形に伴うと見られる凹凸が研ぎ残されている。	4.9	4.3	2.0	53.6
137	485	Ⅱ層上	近世	硯	滋賀高嶋産	側面は直角に立つ。墨池は深く擦り込まれ、凹面をなす。裏面上方に「入」あるいは「八」の釘状の鋭い刻字がある。	6.1	4.9	0.7	34.2
138	489	Ⅱ層上	?	紡錘車未製品	千枚岩	やや扁平な礫素材で、正面・裏面中央にきわめて弱い敲打痕あり。器面の一部は弱く赤化し、ススと見られる黒色物も付着する。器面全体に錆が傷状に走っており、埋没中に農具等によって攪拌された結果のものであろう。	4.7	4.7	0.6	22.1
139	501	Ⅱ層上	近世	火打石	徳島太田産チャート	稜線はよく潰れる。部分的に鉄錆が付着する。	1.8	1.5	1.0	2.6

第8表 野地久保畠遺跡遺物観察表(7) 土人形・金属器・銭貨

番号	注記	出土位置	種類	部位	特徴	法量			
						最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
140	434	I層	土人形	左側(2/3)	犬	11.8	12.6	—	86.8
141	-	I層A6	煙管	完形	—	1.7	1.1	1.1	36.4
142	-	I層A6	煙管	雁首	—	4.1	5.5	5.5	4.3
143	-	I層A6	煙管	吸口	—	5	1.1	1.1	4.9
144	-	Ⅲ層中D4	銭貨	—	寛永通宝	2.5	2.5	0.1	1.8

第9表 野地久保畠遺跡遺構詳細一覧表 横穴

	床面標高(m)	通路幅(m)	通路長さ(m)	奥室入口幅(m)	奥室形	奥室横幅(m)	奥室奥行(m)	天井	天井高さ(m)	柱痕(基)
1号	25.3	0.8	3.3	0.8	方形	2.6	0.6	平形	1.2	10
2号	18.4	0.8~1.0	4.5	—	—	0.7	3.1	平形	1	13

第10表 野地久保島遺跡ピット計測表

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S1	C6	32	28	褐、ア	
S2	C6	60	30	褐、ア	
S3	C6	40	32	褐、ア	
S4	C5	60	20	-	
S5	C5	30	26	黒、ア	
S6	C5	42	24	黒、ア	
S7	C5	50	30	黒、ア	
S8	D5	32	32	褐、ア	
S9	C5	28	26	黒、ア	
S10	C5	52	46	褐、ア	
S11	C5	36	28	黒、ア、炭	
S12	C5	36	30	黒、ア	
S13	C5	20	20	黒、ア、礫	
S14	C5	30	20	褐、ア	
S15	C6	30	30	黒、ア	
S16	C5	32	30	黒、ア	
S17	C5	86	44	黒、ア	
S18	C4	32	28	黒、ア	
S19	C4	70	40	褐、ア	
S20	C4	30	30	褐、ア	
S21	C4	30	30	黒、ア、礫	
S22	C4	30	30	黒、ア、礫	
S23	C4	30	12	-	
S24	C4	34	24	黒、ア	
S25	C4	40	30	褐、ア、礫	
S26	D4	28	25	褐、ア	
S27	C4	29	24	褐、ア	
S28	C4	30	26	褐、ア	
S29	C4	42	34	褐、ア	
S30	C4	52	52	灰、粘、礫	
S31	C4	24	24	-	
S32	C4	28	20	黒	オオムギ
S33	C4	104	70	黒、ア	
S34	D4	23	18	黒、ア	
S35	D4	36	22	黒、ア	
S36	D4	48	34	黒、ア	
S37	C4	50	30	黒、ア	
S38	D4	26	20	黒、ア	
S39	C4	30	30	黒、ア、礫	
S40	C4	20	12	黒、ア、礫	
S41	C4	36	20	-	
S42	C4	84	30	黒、ア、礫	
S43	D4	52	30	黒、ア	
S44	D4	23	20	黒、ア	
S45	C4	20	20	-	
S46	C3	16	16	-	
S47	C4	30	20	-	
S48	C4	24	16	-	
S49	D4	26	22	黒、ア	
S50	D4	26	25	黒、ア	
S51	D4	28	28	黒、ア	
S52	D5	38	28	黒、ア	
S53	C4	68	60	-	
S54	C4	26	24	黒、ア	
S55	C4	32	30	黒、ア	ムギ類
S57	D4	54	42	黒、ア	
S58	C5	40	30	褐、ア	
S59	C5	40	26	黒、ア	
S60	C5	48	36	黒、ア	
S61	C5	34	32	褐、ア	

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S62	C5	86	36	黒、ア	
S63	C5	22	20	黒、ア	
S64	C5	40	30	黒、ア	
S65	C5	30	30	-	
S66	C5	86	30	黒、ア	
S67	C5	70	56	黒、ア	
S68	C5	24	20	黒、ア	
S69	C5	40	20	-	
S70	C5	70	22	黒、ア	
S71	C5	38	30	黒、ア	
S72	D5	46	20	黒、ア	
S73	C5	30	16	黒、ア	
S74	C5	24	22	褐、ア	
S75	C5	80	30	黒、ア	
S76	C5	44	20	黒、ア	
S77	C5	40	18	黒、ア	
S78	D5	72	40	黒、ア	
S79	D5	240	166	-	縄文晩期深鉢
S80	C5	74	46	黒、ア	
S81	C6	24	24	黒、ア	
S82	C5	30	22	黒、ア	
S83	C5	32	28	黒、ア	
S84	C4	40	37	黒、ア	
S85	C4	32	28	褐、ア	
S86	C4	22	22	褐、ア	
S88	C5	42	22	-	
S89	C5	34	22	黒、ア	
S90	C5	28	22	-	
S91	C4	20	16	黒、ア	
S92	C4	24	22	-	
S93	C4	22	20	黒、ア	
S94	C4	26	20	褐、ア	
S95	C4	34	26	褐、ア	
S96	C4	22	12	褐、ア	
S97	B4	34	32	褐、黒	
S98	B4	28	24	褐、ア	
S99	B4	33	28	褐、黒	
S100	C4	26	24	-	
S101	B1	42	37	黄、褐、礫	
S102	B2	50	46	-	
S103	A2	56	44	黄、ア、礫、粘土	ピット列1、備前焼蓋
S104	A2	54	54	黄、ア、礫、粘土	ピット列1
S105	B2	54	52	黄、ア、礫、粘土	ピット列1
S106	B2	51	42	黄、ア、礫	
S107	B2	64	48	黄、ア、礫	ピット列1、ママ料
S108	B2	50	42	黄、ア、礫	オヒシバ
S109	C2	44	42	黄、ア、礫	
S110	B3	20	16	褐、礫	
S111	B3	29	28	褐、礫	
S112	C2	68	62	黄、礫	
S113	C2	54	52	黄、ア	
S115	-	-	-	黒、礫	
S117	D2	72	36	黄、ア、礫	
S118	D2	30	28	黄、ア、礫	
S119	B2	58	48	-	ピット列3
S120	B2	62	46	黄、ア、礫	
S121	B1	66	53	黒、ア、礫	ピット列2、薩摩焼蓋
S122	C1	68	58	褐、ア、礫	ピット列2
S123	C2	49	46	褐、ア、礫	ピット列3
S124	A2	29	16	黒、ア、礫	

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S125	A2	66	24	暗	
S126	B2	50	44	黒、ア、礫	
S127	B2	40	38	-	
S128	B2	40	36	黒、ア、礫	
S129	B2	62	44	-	
S130	B2	64	42	-	
S131	B2	70	40	黒、ア、礫	
S132	B2	44	36	黒、ア、礫	
S133	B2	37	30	黒、ア、礫	
S134	B2	28	26	黒、ア、礫	
S138	B2	40	23	-	
S139	B2	32	30	黒、ア、礫	
S140	B2	80	60	黒、ア、礫	
S141	B2	53	50	-	
S142	B2	30	30	褐、ア、礫	
S143	B2	20	20	褐、ア、礫	
S144	B2	26	26	褐、ア、礫	
S145	C2	40	30	黒	
S146	C2	18	15	褐、ア	
S147	C3	24	20	-	
S148	C2	18	16	黒、礫	
S149	C2	51	20	黒、ア、礫	
S151	B2	56	36	-	
S152	-	-	-	褐、礫	
S153	B2	16	16	-	
S154	B2	24	22	褐、礫	
S155	C2	20	16	黒、ア、礫	
S156	C2	28	24	黒、ア、礫	
S157	C2	36	28	黒、礫	
S158	C2	30	18	黒、ア、礫	
S159	C2	34	29	黒	
S160	C1	54	39	黒、ア	
S161	C1	30	20	褐、黒、ア	
S162	C1	46	40	黒、ア	カヤツリグサ科
S163	C1	24	21	褐、ア	
S164	C1	30	29	黒、礫	
S165	C1	34	30	黒、礫	
S167	B2	66	30	-	
S168	C2	10	10	黒、礫	ヤマモモ
S169	B3	26	22	黒、ア、礫	
S170	A3	32	28	黒、ア	
S171	A3	35	30	-	
S172	A3	30	28	褐、ア	
S173	A3	43	32	黒、ア	
S174	A3	28	14	黒、ア	
S175	A3	40	40	黒、ア、礫	
S176	A3	30	30	黒、ア	
S177	A3	44	37	褐、ア	
S178	A3	56	26	黒、ア	
S179	A3	30	22	褐、ア、礫	
S180	A3	20	18	褐、ア、礫	
S181	A3	38	35	褐、ア、礫	
S183	A3	26	24	褐、ア、礫	
S184	A3	34	24	-	
S185	A3	30	22	黒、ア、礫	
S187	A3	22	20	黒、ア、礫	
S188	B3	24	23	褐、ア	
S189	B3	30	22	黒、褐	
S190	B3	18	18	褐、ア、礫	
S191	B3	30	16	黒、ア	

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S192	B3	22	15	黒、ア、礫	
S193	B3	25	21	黒、ア、礫	
S194	B3	26	22	黒、ア、礫	
S195	B3	30	14	褐、礫	
S196	B3	26	21	黒、ア、礫	
S197	B3	23	18	黒、ア、礫	
S198	B3	22	18	黒、ア、礫	
S199	B3	18	15	黒、ア、礫	
S200	B3	38	20	褐、ア、礫	
S201	C5	28	16	黒、ア、礫	
S202	C5	105	81	黒、ア、礫	
S203	D4	64	60	黒、ア、礫	
S204	D4	42	40	黒、ア、礫	
S205	D5	28	18	黒、ア、礫	
S206	D5	22	22	黒、ア、礫	
S207	A4	60	32	褐	
S208	A4	24	22	褐	
S209	C4	20	16	-	
S210	A3	35	30	-	
S211	C4	32	26	-	
S212	C4	30	27	黒	
S213	C4	32	30	-	
S214	B4	30	27	黒	
S215	C3	20	20	-	
S217	B4	30	23	黒	
S218	B4	58	43	黒、褐	
S219	C3	36	28	-	
S221	C3	40	22	黒	
S222	C3	22	15	-	
S223	C3	30	24	黒	
S224	C4	44	35	黒、ア	
S225	C5	30	16	黒、ア	
S226	C5	36	26	黒、ア	
S227	D4	69	54	黒、ア、礫	
S228	D4	28	22	黒、ア	
S229	C4	45	27	黒、ア	
S230	C4	30	20	黒、ア	
S231	C4	21	20	-	
S232	A4	16	16	黒、ア	
S233	A4	22	20	-	
S234	A4	30	20	-	
S235	A4	22	17	黒、ア、礫	
S236	A4	23	20	黒、ア	
S237	A4	52	50	黒、ア	
S238	A4	48	22	黒、ア	
S239	B4	34	22	黒、ア	
S240	B4	28	25	黒、ア	
S241	B4	22	20	黒、ア	
S242	B4	24	21	褐、ア	
S243	B4	24	22	黒、ア	
S244	B4	27	25	黒、ア	
S245	B4	26	24	黒、ア	
S247	B4	26	26	黒、ア	
S248	A4	24	20	黒、ア	
S249	A4	33	27	褐、ア、礫	
S251	-	-	-	黒、ア	
S253	B4	26	16	黒、ア、礫	
S254	B4	34	22	黒、ア	
S255	B4	26	18	褐、ア	
S256	B4	26	19	褐、ア、礫	

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S257	B4	18	18	-	
S258	B4	36	32	黒	
S259	B4	-	-	-	
S260	B4	18	16	黒	
S261	A4	62	32	褐、ア	
S262	-	-	-	黒、ア	
S264	B4	19	16	褐、ア	
S265	B4	40	27	黒、ア	
S266	B4	30	20	黒、ア	
S267		36	36	褐、ア	
S269	A4	50	49	褐	
S270	A5	16	14	黒	
S271	A4	14	11	暗、ア	
S272	A4	32	32	黄、ア	
S273	A5	20	12	褐、ア	
S274	A4	20	18	褐、礫	
S275	A4	28	25	褐	
S276	A4	29	26	褐	
S277	A4	30	30	褐、礫	
S278	A4	36	23	褐、黒	
S279	A4	30	22	褐、ア	
S280	A5	36	24	黒	
S281	B4	23	22	黒	
S282	B4	24	24	黒	
S283	B4	14	14	黒	
S284	B4	24	19	黒	
S285	B4	40	32	黒	
S287	B4	30	27	黒	
S288	B4	20	16	黒	
S289	B4	36	34	-	
S290	B4	21	18	-	
S291	A4	38	32	褐	
S296	B4	34	32	褐、黒	
S297	B4	36	34	褐、黒	
S298	B4	14	12	黒、ア	
S299	B4	24	20	黒	
S300	B4	18	18	-	
S301	-	-	-	黒、ア、礫	
S303	B3	18	18	-	
S304	A3	35	24	黒、ア	
S305	B3	31	26	黒、ア	
S306	B3	68	62	褐、ア	
S307	B3	30	28	-	
S308	B3	66	28	-	
S309	C2	28	20	黒、ア、礫	カヤツリグサ科
S310	D2	22	18	黒、ア	
S311	C2	26	24	-	
S312	C3	54	28	黒	
S313	C2	10	10	黒、ア、礫	
S314	C2	33	24	黒、礫	
S315	D2	36	16	-	
S316	D2	26	22	黒、ア	
S317	C2	34	26	黒、礫	
S318	C1	34	31	黒、ア、礫	
S319	C2	34	30	黒、礫	
S320	C1	36	36	黒、礫	
S321	D2	40	36	-	
S322	C2	67	40	黒、ア、礫	
S323	C2	12	12	-	
S324	D2	48	32	-	

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S325	C2	24	20	黒	
S326	D2	36	20	-	
S327	C2	43	33	黒	
S328	C2	22	22	黒、ア	
S329	C2	30	30	-	
S330	D2	62	34	黄、ア、礫	
S331	C2	26	24	黒、礫	
S332	B2	32	22	黒、ア	
S333	B2	60	38	黒、ア	
S334	C3	30	22	黒、ア	
S335	C3	44	22	黒	
S337	A5	24	22	褐、ア	
S338	A5	33	28	褐、ア	
S339	A5	14	13	褐、ア	
S340	A5	26	18	-	
S341	A5	34	20	褐、ア	
S342	A5	21	19	褐、ア	
S343	A5	39	16	褐、黒	
S344	B4	30	20	黒	
S345	B4	25	14	黒	
S346	B4	22	17	-	
S347	B4	32	24	黒	
S348	B4	48	39	褐、黒	
S349	B4	24	17	黒、褐	
S350	B4	21	20	黒	
S351	A5	42	22	-	
S352	A5	40	36	黒	
S353	A5	35	28	黒	
S354	A5	59	24	黒	
S355	A5	30	24	黒、ア	
S356	A5	28	21	黒	
S357	A5	17	15	黒	
S358	B5	25	20	黒	
S359	B5	40	30	黒	
S360	B5	28	16	黒	
S361	B5	36	32	黒	
S362	B5	32	30	黒、礫	
S363	B5	60	24	黒	オオムギ
S364	B5	20	12	黒	
S365	B5	10	8	黒、ア	
S366	B5	38	30	黒、礫	
S367	B5	20	12	黒	
S368	B5	37	17	黒、褐	
S369	B5	34	34	黒	
S370	B5	56	32	黒	
S371	B5	30	26	黒	
S372	B6	44	42	黒	
S373	B6	38	30	褐	
S374	B6	28	24	黒、礫	
S375	B5	34	24	黒	
S376	B5	30	20	黒、礫	
S377	B4	24	18	黒、ア	
S378	B4	43	38	褐、黒	
S379	A4	24	24	暗	
S380	A4	24	21	暗	
S381	A4	22	22	暗	
S382	A4	20	16	暗	
S383	C4	50	30	黒、ア	
S384	A4	31	24	暗	
S385	A4	35	30	褐、ア	

番号	グリッド	長径	短径	土壌注記	備考
S386	A4	32	28	暗	
S387	A4	56	38	暗	
S388	A4	16	14	-	
S389	B4	38	20	黒	
S390	B4	26	23	黒	
S391	A4	30	21	暗	
S392	A4	26	24	暗、礫	ムギ類
S393	C4	22	26	-	
S401	C5	46	38	黒、褐	
S403	A3	24	20	黒、褐	
S404	B4	41	21	黒	
S405	B4	22	20	黒	
S406	B4	23	22	黒	
S407	B4	26	22	黒	
S408	B4	24	20	黒	
S409	A4	20	20	黒	
S410	B2	49	40	褐、ア	ピット列3
S411	C6	42	36	黒	
S412	C6	63	44	-	

凡例

遺構 S1～

グリッド A1～

長径・短径 単位はcm

備考欄 遺構の種別と出土遺物を記載
種別 SB1～(1号掘立柱建物跡～)
出土遺物 種実同定の詳細は第VI章参照

土壌注記 褐=褐色土
黒=黒色土
暗=暗褐色土
黄=黄褐色土
灰=灰褐色土
ア=アカホヤ火山灰
粘=灰色粘土
礫=礫

「黒、▲、■」=黒を基調に▲・■が若干混じる

番号	グリッド	長径	短径	備考
S1001	E6	34	28	
S1002	E6	28	28	
S1003	E6	32	28	
S1004	E6	24	24	
S1005	E6	33	23	SB2
S1006	D6	28	26	
S1007	D6	28	28	
S1008	D6	34	27	SB2
S1009	D6	24	20	
S1010	D6	24	20	
S1011	D6	29	20	
S1012	D6	28	23	
S1013	D6	30	28	SB5
S1014	E6	28	24	SB2
S1015	D6	36	24	
S1016	D6	31	29	
S1017	D6	32	24	
S1018	D6	28	28	SB2
S1019	D6	39	30	
S1020	D6	30	24	SB5
S1021	D6	30	28	SB2
S1022	D6	28	26	SB5
S1023	D6	28	26	SB5
S1024	D6	30	16	
S1025	D6	25	22	
S1026	D6	22	22	
S1027	D4	34	31	SB1
S1028	D4	32	32	SB1
S1029	D4	24	22	
S1030	D4	33	23	
S1031	D4	36	30	SB1
S1032	D4	30	30	SB3,SB4
S1033	D4	26	26	SB3
S1034	D4	30	28	
S1035	D4	29	28	SB3
S1036	D4	24	22	
S1037	D4	32	28	SB4
S1038	D4	24	22	
S1039	D4	31	27	
S1040	D4	28	24	SB3
S1041	D4	32	32	
S1042	D4	34	28	SB4
S1043	D4	30	30	SB1
S1044	D4	30	29	
S1045	D4	32	29	SB1
S1046	D4	30	22	
S1047	D4	36	36	SB4
S1048	D4	24	24	
S1049	D4	20	20	
S1050	E4	29	25	
S1051	E4	38	36	SB1
S1052	E4	29	24	
S1053	E4	44	20	
S1054	E4	75	41	
S1055	E4	22	20	

番号	グリッド	長径	短径	備考
S1056	E4	44	42	SB1
S1057	E4	33	28	
S1058	E4	46	30	
S1059	E4	34	32	
S1060	E4	26	22	
S1061	E4	33	26	
S1062	E4	26	23	
S1063	E4	32	30	
S1064	E4	34	32	SB1
S1065	E4	30	26	
S1066	E4	28	26	
S1067	E4	41	35	SB1
S1068	D3	28	20	
S1069	D3	32	22	
S1070	D3	30	24	
S1071	D3	30	22	
S1072	D4	31	30	
S1073	D4	32	26	
S1074	D4	30	25	
S1075	D4	24	22	
S1076	D3	28	26	
S1077	D3	27	22	
S1078	D4	26	26	
S1079	D4	25	24	
S1080	D4	24	24	
S1081	E4	32	28	
S1082	E4	33	26	
S1083	E4	30	26	
S1084	E4	34	29	
S1085	D5	28	26	
S1086	D5	34	24	
S1087	D4	32	27	
S1088	D5	30	28	
S1089	D5	28	28	
S1090	D5	63	34	
S1091	D5	64	55	
S1092	D5	36	34	
S1093	D4	30	30	
S1094	D4	38	35	
S1095	D4	18	10	
S1096	D4	38	34	
S1097	D4	28	26	
S1098	D5	53	48	
S1099	E3	42	40	
S1100	E3	44	38	
S1101	E3	30	26	
S1102	E3	23	20	
S1103	E3	50	44	
S1104	E3	32	30	
S1105	E4	29	28	
S1106	E4	28	24	
S1107	E4	34	31	
S1108	E4	30	30	
S1109	E4	24	24	
S1110	E4	31	31	SB1

第V章 森ノ上遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の方法・経過

1-1. 遺跡の位置

森ノ上遺跡は、三方を山々に囲まれた扇状地であり、東方向のみ低地に向かって開放する谷間の緩斜面に位置する。北浦町と熊野江町との境にある森山（標高467.6m）東麓に位置する本遺跡は、調査前は段々畑として改変されている。遺跡高所より緩斜面を東方へ下り、低地先の国道388号線を横断すると日向灘（古江港）に面する。時折、海側から扇状地に向けて上がってくる突風があり、安全対策に注意を払った。扇状地と山斜面の境には、冬季には涸れ沢となる中港川（約2.2km）やその支流が流れる。調査区外の高所北西側に、湧き水等による小湿地帯があり、豪雨時には、調査区へ雨水が流れ込んでくる。また、路線内を横断する道路が山側からの雨水の排水路となり、中港川に勢いよく流れ落ちていく。そのため、土砂流出対策にも万全を期した。周囲の山々からは、晩秋になるとシカの鳴き声がこだましたり、山々の紅葉が深まり、アケビが赤紫色に熟したりするなど、自然豊かな環境の中に遺跡はある。

1-2. 調査の方法と経過

森ノ上遺跡（2,950m²）（以下A区）は平成20年8月25日から平成21年2月2日（調査実日数91日）まで実施した。本調査前、排土置き場予定地であった隣接地（調査対象地外）から遺物が表採され、緊急に隣接地も本調査を実施した。隣接地を森ノ上遺跡B区（2,400m²）（以下B区）とした。B区調査は、平成21年11月11日に終了した。結果は昨年度刊行した『森ノ上遺跡（弥生・古墳時代編）』を参照してほしい。

表土除去では、B区調査と並行しての実施のため、新たな排土置き場の確保や排土の運搬に工夫を要した。表土除去は重機で行い、確認トレンチ箇所土層堆積を確認しながら、二次K-Ah直下で、低地部分に一部堆積しているⅢ層と調査区全面に残存するⅣ層（遺物包含層）を削平しないよう慎重を期した。尾根付近の土層はⅠ層直下が基盤をなしている礫層であったため調査除外区とした。また、調査区内に土石流による土

砂や礫の堆積が一部あったため、人力で除去した。結果、遺物包含層が良好に残存している1,400m²の範囲を実質調査面積とした。

調査方法は、5m×5mグリッドの25%調査で包含層掘削を行った。主な遺物包含層のⅣ層は、上面より石器石材とまらない粗質な砂岩が多量に残存しており、その中に赤化礫も含まれているため、散礫として認定した。また、散礫に重複して遺物も含まれていた。調査始めに、散礫を除去中、差し込まれた千枚岩を配石とし、その内側に粗質な砂岩を内部礫とする集石遺構が検出された。以後、散礫の中から切り立つ千枚岩の一部を検出した際には、集石遺構として慎重に精査を行った。当初の予想を遙かに上回る数の集石遺構が検出され、また、遺物も多量に出土し、限られた期間で調査を終了させるために工夫を要した。作業員については、最大65名までの増員を図り、掘削班、遺物取り上げ班、集石遺構精査班の3班に分け、作業効率を高めた。また、調査記録についても、出土位置を層位と平面上の位置（1m×1mグリッド単位の4桁数字）のみの記録とした。他にも、調査終了直前に検出した集石遺構11基と炉穴4基は、写真撮影のみとした。

Ⅳ層からは堅穴建物跡を確認できなかったが、調査区のシンボルでもある千枚岩の巨礫を取り囲むように168基の集石遺構が高密度に検出された。さらに、攪乱内の土を除去する際、炉穴4基を検出した。集石遺構の埋土については、現地でフローテーションを実施したが、炭化物等は確認できなかった。

10m×10mグリッドを国土座標に準じ、西から東にA～H、北から南に1～6と設定した。遺構分布図を縮尺1/300、集石遺構を1/20で図化した。写真記録は、中判カメラ（6×7）、35mmカメラを中心にカラースライド撮影を行い、随時、デジタルカメラも併用した。遺跡の立地状況や周辺地形を記録するため、ラジコンヘリによる空中写真撮影も行った。

残暑厳しい中で調査を開始し、突如のゲリラ雨や時間的制約に悩まされたが、無事に調査を終了することができた。また、調査中は、現地説明会や見学会を実

施したり、調査終了後は、北浦公民館での遺跡速報会や北浦小学校への出前講座を開催したりしたことで、本遺跡への理解が図れたとともに、教育普及にも貢献できた。

本調査区は調査終了後、千枚岩の岩盤を大きく掘削し、古江トンネル入口付近に位置することになる。

調査日誌抄

平成20(2008)年

- 0729 調査区確認。
 0825 本調査開始。業者打合せ(重機、現場事務所等)。
 0827 調査区整地作業開始(重機)。
 0828 排土流出防止措置完了。
 0901 確認トレンチ跡を重機で掘削し、土層を再確認。
 0902 業者打合せ(駐車場等)。調査区整地作業終了。
 0908 表土剥ぎ開始。排土置き場整地。西側端・南西側端は調査除外区とする。
 0910 事務所設置完了。
 0911 作業員(15人)B区へ投入開始。
 0917 台風接近のため午後中止。
 0918/19 台風接近のため中止。被害なし。
 0922 表土剥ぎ残り1/4。IV層直上より遺物出土。
 0930 台風接近のため中止。
 1001 台風接近のため中止。測量基準点設置。
 1002 表土剥ぎ終了。
 1007 作業員増員(9名)、A区へ投入開始。
 1008 確認トレンチ跡のあるグリッドから掘削開始。
 1015 遺物搬出(B区)。集石遺構3基目検出。土器、石器多数出土。
 1016 調査区概略図完成。
 1023 土石流跡の土砂等除去。
 1024 土石流直下より土器多数出土。
 1028 作業員増員(10名)。
 1029 延岡市役所の方3名来跡。
 1030 排土搬出。重機による攪乱箇所除去。
 1104 空撮準備。作業員増員(4名)。
 1105 空撮。遺物取り上げ方法決定。
 1106 アニマルネットに鹿の侵入未遂痕跡あり。
 1110 集石遺構5基目検出。
 1112 調査員、作業員3班編制(掘削班、遺物取り上げ班、集石遺構班)。
 1114 集石遺構9基目検出。
 1117 作業員増員(11名)。
 1119 遺構番号・写真撮影・実測等の方法決定。
 1125 集石遺構実測開始。集石遺構の特徴把握。
 1126 北浦公民館にて雇用説明会開催(2回目)。
 1201 作業員増員(28名)。駐車場整備開始。
 1202 作業員増員に伴う大駐車場完了。集石遺構30基目検出。

- 1212 排土搬出。集石遺構60基目検出。
 1218 現地説明会開催。122名来跡(延岡市文化財保護委員、地域住民47名、北浦小学校児童29名、北浦中学校生徒46名、報道関係3社)
 1219 延岡市役所の方3名来跡。
 1225 本遺跡にて雇用説明会開催(3回目)。地域の方4名来跡。作業員(15名)終了。現場仕事納め。

平成21(2009)年

- 0106 現場仕事始め。延岡市教育委員会の方々来跡。作業員増員(10名)。実測2人体制開始。集石遺構の分類方法決定。
 0108 排土搬出。
 0123 実測4人体制開始。
 0127 埋め戻し開始。
 0130 埋め戻し等、全作業終了。遺物・器材搬出。集石遺構検出数168基。
 0202 本調査終了。現場事務所撤収。(山田)

第2節. 基本層序と土層堆積

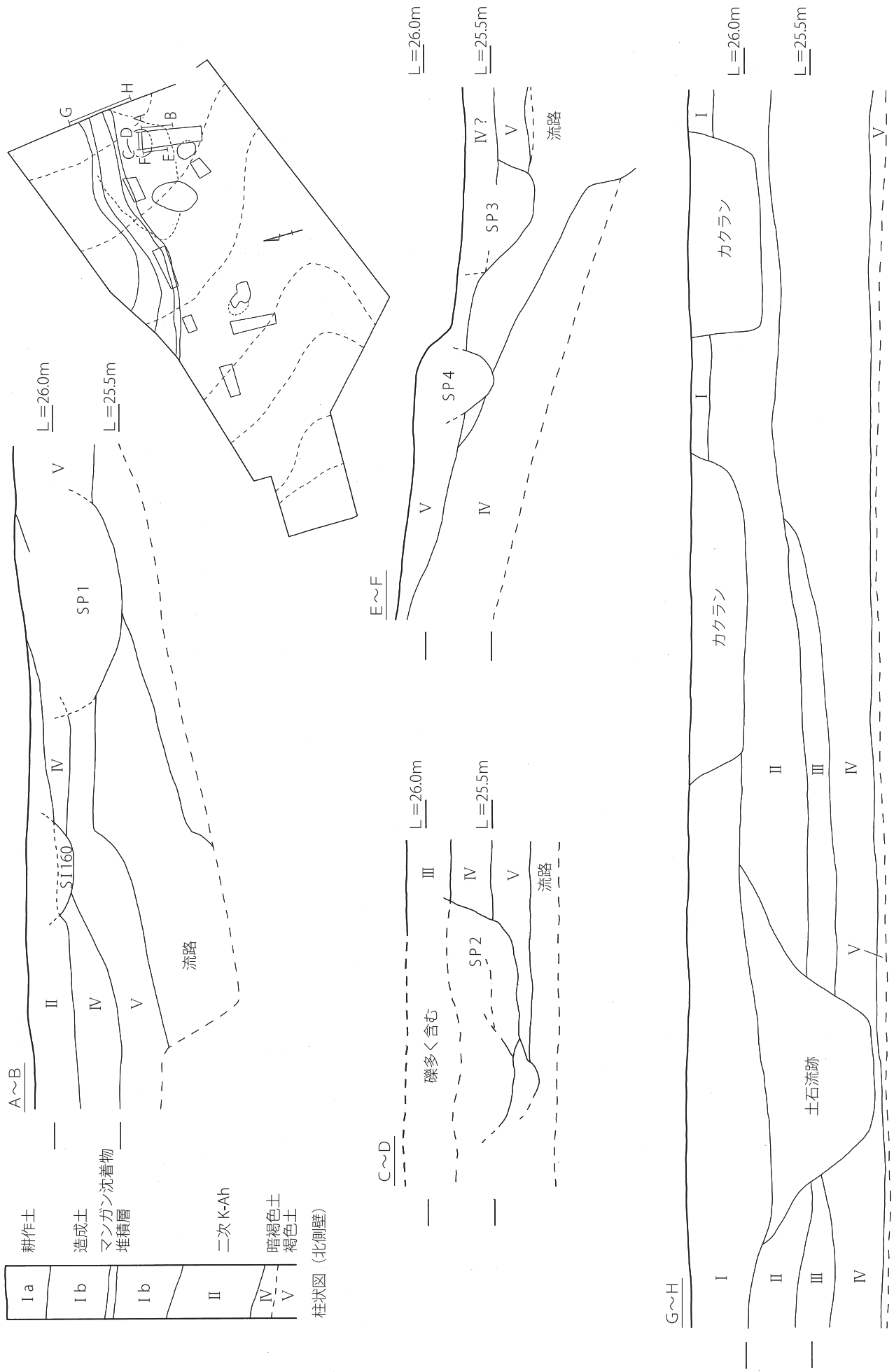
本遺跡は、森山東麓の緩斜面地であり、調査区は26m~32mの標高に位置する。調査区南側には、西方から東方へ下る尾根がのびており、尾根を境界とし北東方向に緩やかに傾斜している。尾根付近の土層は、I層直下が基盤層であり、調査除外区とする。I b層の造成土中にマンガン沈着物堆積層があり、水田利用が伺える。II層は二次K-Ahであり、北側壁中央部には、IIからIV層上部まで入り込む土石流による多量の礫が確認された。調査区低地部分の一部にIII層が残存している。IV層は全調査区に残存しており、遺物物包含層である。土質は粘性が大変強く小砂利混じりである。V~VI層は、遺物がほとんど確認できなかったため、IV層完掘を調査終了とした。北側壁は調査区の全土層が確認でき、土層柱状図として表記した。

- I a層：耕作土 (Hue10YR3/4)
 I b層：造成土 (Hue10YR3/2)
 II層：二次K-Ah (Hue10YR6/6)
 III層：黒褐色土 (Hue10YR3/4)
 IV層：暗褐色土 (Hue10YR3/2)(遺物包含層)
 V層：褐色土 (Hue7.5YR4/4)
 VI層：明褐色土 (Hue7.5YR5/6)
 VII層：基盤層 (山田)



0 100m (1/2000)

第17図 森ノ上遺跡周辺地形・調査区位置図



第18図 森ノ上遺跡土層断面図

第3節 旧石器時代の遺物

本調査区IV層は、粗質な砂岩礫が調査区内一面に多量に残存しており、その中に重複して遺物が出土している。遺物のほとんどが、縄文時代早期の遺物であったが、調査後の整理作業中、IV層より出土した遺物の中に、流紋岩製の旧石器が混在していた。掘削範囲より出土した流紋岩は、総点数69点、総重量6668.7gで、そのうちの25点を図化している。流紋岩の点数分布は、掘削範囲内に散在している(第19図)。

3-1. 遺物(第20図 1~26)

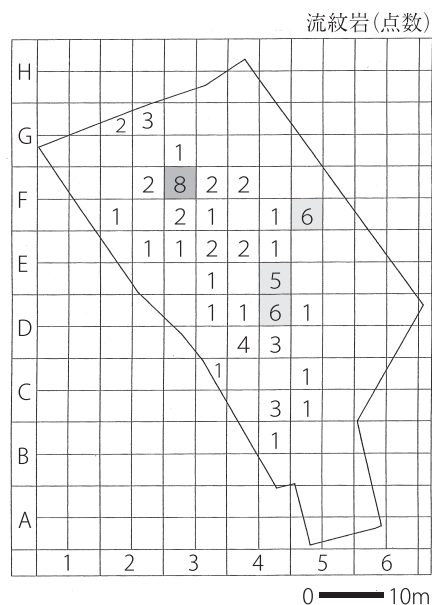
ナイフ形石器は2点出土しており、2点とも出土位置はF3bグリッドである。1は縦長剥片を素材とし、素材打面を基部に設定している。基部周辺に加工が施され、素材剥片の形状をそのまま刃部としている。先端に細かな剥離が見られる。2は横長剥片を素材とし、切外型である。左側縁に二次加工が施され、右側縁は素材剥片の形状をそのまま刃部としている。

スクレイパーは5点出土しており、D4グリッド付近に多い。3は不定形剥片を素材とし、肉厚の剥片の右側縁に刃潰し加工を施している。基部は欠損している。4は横長剥片を素材とし、右側縁に細かな剥離が見られる。5は縦長剥片を素材とし、石器の長軸と並行するように両面左右側縁に調整が加えられている。基部は欠損している。6は横長剥片を素材とし、裏面調整後、正面右側縁から下側縁かけて粗い調整の剥離が見られる。7は不定形剥片を素材とし、左側縁に細かな剥離が見られる。裏面は礫面である。

二次加工剥片は13点出土しており、掘削範囲に散在している。8は横長剥片を素材とし、左側縁下部に細かな剥離が見られる。15と同一母岩の可能性はある。9は不定形剥片を素材とし、礫面を残している。10は不定形剥片を素材とし、右側縁に表裏両面からの二次加工で刃部を形成している。11は縦長剥片を素材としている。12は不定形剥片素材とし、左側縁は素材剥片の形状をそのまま刃部としている。13は不定形剥片を素材とする接合資料である。14は横長剥片を素材としている。15は横長剥片を素材とし、表面のみ全周に粗い加工が見られる。16は、横長剥片を素材としている。欠損部から二次加工されている。17、19は不定形剥片、20は横長剥片を素材としている。18は棒状礫の

先端部を断面が三角形になるように整形している。21は円礫の一部を素材とし、正面は礫面である。裏面の右側縁と先端部に細かな加工が見られる。本遺跡における縄文時代早期の石斧未製品とも考えられる。

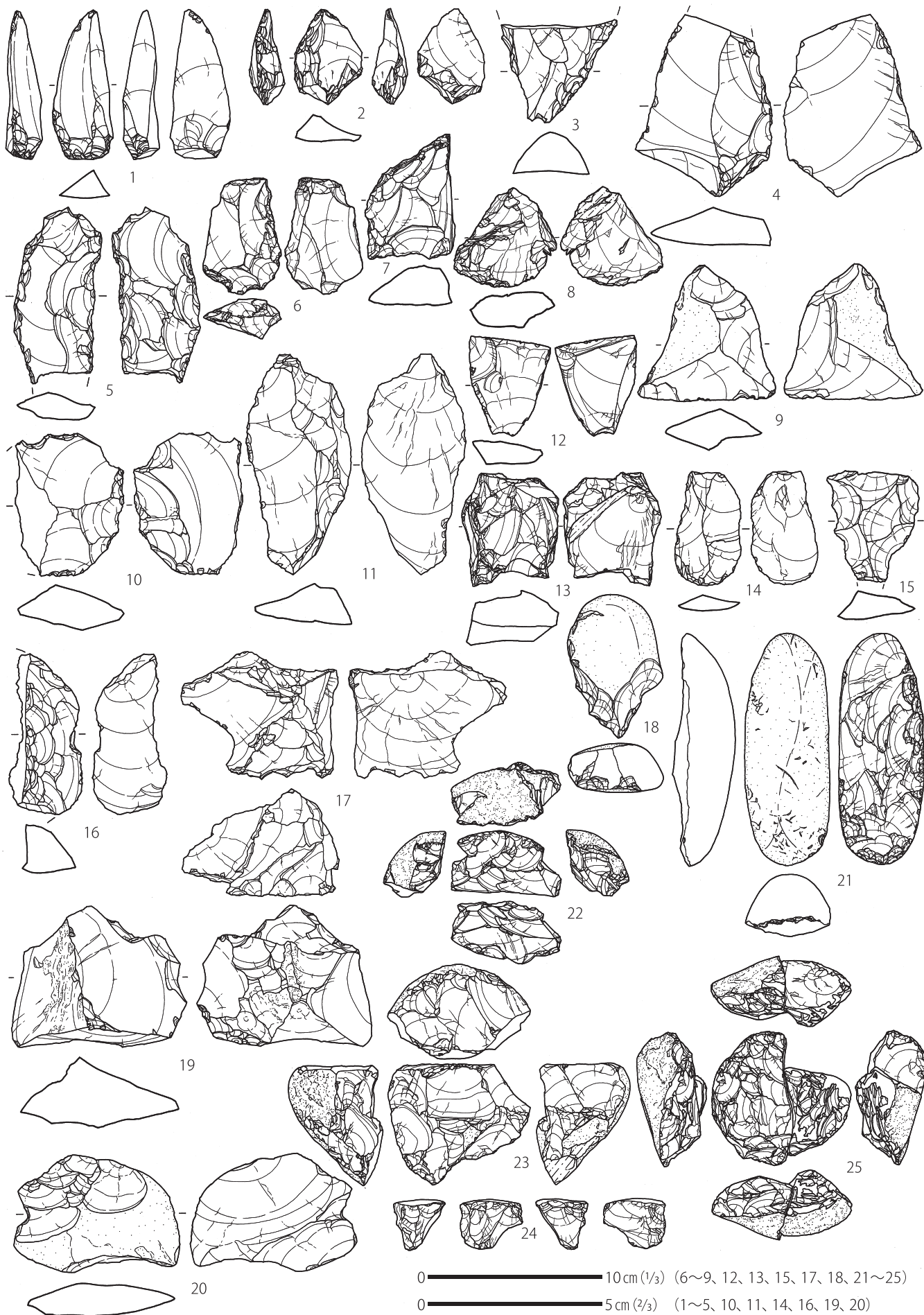
石核は4点出土しており、掘削範囲内に散在している。22、25(接合資料)は分割礫素材で礫面を残し、石核周辺から内側に向かい、平坦面打面から小形の剥片剥離が見られる。また、打面調整が確認される。23は、礫面から不定形剥片剥離が見られる。24は礫面を残す厚手の剥片素材である。(山田)



第19図 森ノ上遺跡旧石器時代遺物分布図

No.	注記No. 出土位置 (5mGr/1mGr)	層位	器種名	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
1	F3b/3058	III・IV	ナイフ形石器	流紋岩	4.3	1.7	1.0	3.0
2	F3b/3356	IV	ナイフ形石器	流紋岩	2.7	1.9	1.0	3.6
3	C5a/5324	IV	スクレイパー	流紋岩	2.9	3.3	1.4	9.3
4	D4a/4433	IV	スクレイパー	流紋岩	5.2	3.9	1.5	23.6
5	E4c/4740	IV	スクレイパー	流紋岩	5.1	2.5	0.8	10.6
6	D4a/4433	IV	スクレイパー	流紋岩	6.5	4.4	2.3	57.9
7	G2d/2869	IV	スクレイパー	流紋岩	7.0	5.1	2.3	83.9
8	E4b/4345	IV	二次加工剥片	流紋岩	5.6	5.7	2.4	51.0
9	F4b/4055	IV	二次加工剥片	流紋岩	7.7	7.8	2.4	88.1
10	D4d/4938	IV	二次加工剥片	流紋岩	4.1	3.1	1.2	13.9
11	F2b/2959	IV	二次加工剥片	流紋岩	6.3	3.0	1.1	17.7
12	G3a/3460	IV	二次加工剥片	流紋岩	5.7	4.6	1.5	40.6
13	D4a/4132 D4a/4431	IV	二次加工剥片	流紋岩	6.4	5.4	3.2	122.9
14	D4d/4735	IV	二次加工剥片	流紋岩	3.3	1.9	0.5	2.8
15	C5b/5328	IV	二次加工剥片	流紋岩	6.3	5.2	1.7	42.8
16	B4d/4916	IV	二次加工剥片	流紋岩	4.6	2.1	1.5	12.6
17	F3c/3752	IV	二次加工剥片	流紋岩	3.4	4.8	3.1	31.6
18	F3b/3358	IV	二次加工剥片	流紋岩	8.2	5.4	2.8	136.0
19	F5a/5054	IV	二次加工剥片	流紋岩	4.0	5.0	2.2	31.9
20	F5a/5154	IV	二次加工剥片	流紋岩	3.4	4.7	1.0	13.8
21	F5a/5254	IV	石斧か	流紋岩	13.1	4.9	3.6	247.0
22	F3b/3155	IV	石核	流紋岩	3.7	6.2	3.5	72.7
23	E3b/3446	IV	石核	流紋岩	7.1	8.0	5.3	264.0
24	C4a/4023 E4c/4744	IV	石核	流紋岩	2.9	3.6	2.9	25.5
25	E4c/4942	IV	石核	流紋岩	7.6	7.9	3.9	182.1

第11表 森ノ上遺跡旧石器時代石器観察表



第20図 森ノ上遺跡旧石器時代石器実測図

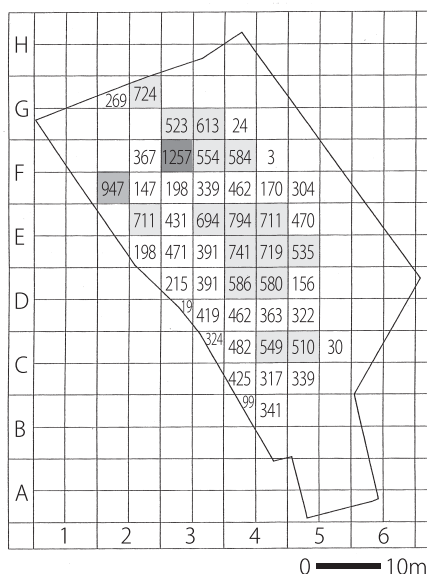
第4節 縄文時代早期の遺構と遺物

本遺跡において、遺構及び遺物のほとんどは、縄文時代早期にあたる包含層（K-Ah層直下）のIV層である。IV層は前述したように暗褐色で大変粘性が強く、小砂利混じりである。IV層上面より掘削範囲（1,400m²）全面に散礫が多量に覆っており、その中から、高密度に分布している集石遺構を検出した。竪穴建物跡は確認されていない。また、散礫と重複し、多量の遺物も出土している。なお、出土位置については前述の通り、1m×1mグリッドで記録している。

4-1. 散礫

表土剥ぎ後、IV層の粘性の強い土や小砂利を掘削すると、上面より赤化礫を含む拳小～拳大の粗質な砂岩が一面に多量に検出された。調査を進める中で、粗質な砂岩と重複して集石遺構が多数検出された。その内部礫のほとんどが粗質な砂岩で占めていることから以後、散礫と認定した。なお、IV層中より全集石遺構を検出し、V層上面に近づくと、散礫の量が極端に減少していった。散礫を構成する石材は、ほとんどが石器とならない粗質なものである。しかし、良質な砂岩も混在しており、その中から砂岩製石器が多数出土している。

散礫構成礫の総重量は21,305kg、総点数は34,809点、1点あたりの重量は0.61kgであった。各グリッド別では重量に差があるものの、全グリッドから検出されている。散礫の重量分布は別表、別図を参照してほしい（第23表、第21図）。（山田）



第21図 森ノ上遺跡散礫分布図 (Kg)

4-2. 集石遺構

本遺跡の集石遺構は、遺物包含層が良好に残存していた1,400m²の範囲で高密度に分布しており、168基が検出された。時間的な制約のため、結果的には157基のみ計測し、図化した。未図化のものは写真のみの記録とした。

調査当初、包含層掘削中に、多量の散礫中から千枚岩を配石とし、掘り込みを伴う集石遺構を検出した。その後、散礫を慎重に除去しながら、地表から切り立った千枚岩の上端部を円形状、もしくは半円状に検出した際、集石遺構の可能性があると判断した。さらに精査を進め、最終的に集石遺構、その内部に残存しているものを内部礫と認定することとした。具体的な掘り込み線については、集石遺構内の埋土とその周囲の土が同質の可能性が高く、判別不能であった。そのため、配石の設置状況を重視することとした。

遺物については、集石遺構の周辺より多数の土器や石器が出土している。集石遺構内からも小片、かつ少量出土しているものの、緩斜面の地形から埋土に含まれていた可能性が高い。

埋土については、現地でフローテーションを行ったが、炭化物等は検出されなかった。

本遺跡における集石遺構の特徴をまとめると、全ての集石遺構はIV層から高密度で多数検出された。また、複数の切り合いをもつ遺構も数基検出している。

配石を構成する石材については、ほとんどの集石遺構が、角のとれた30cm前後の扁平な千枚岩を円形状（花卉状）に並べている。しかし、円形状に整っているものもあれば、半円状、もしくは一部しか残存していないものも多数ある。その他、配石を構成する石材として、人頭大前後の粗質な砂岩を配石としているものも僅かにある。内部礫を構成する石材は、ほとんどが粗質な砂岩であり、その中に千枚岩や石器石材となる良質な砂岩も含まれている。また、断面から確認すると、配石の形状がお椀状になっていたり、比較的緩やかな傾斜の皿状になっていたりする。

今回、集石遺構の直径は、配石の両端間とし、掘り込みの深さは、残存する配石の最上部から底部までとしている。その結果、集石遺構の直径は30～130cmで平均73cmである。深さは10～50cmで平均25cmである。

内部礫は総重量2,325kg、総点数14,286点、平均0.2kgであった。配石は総重量5,686kg、総点数1,979点で、配石1点の平均は2.9kgである。中には1点20kgを越す大きな配石もあった。また、1基の配石の総重量が130kgのものもあった。

確認された集石遺構については、配石に特徴があると判断し、配石に焦点をあて、現地にて以下の分類を行った。まずは、配石の石材を大分類とした。Ⅰ類は砂岩も含まれるが、主に千枚岩を配石としているもの、Ⅱ類は全て粗質な砂岩のみを配石としているもの、Ⅲ類は上記に当てはまらないもの（その他）、もしくは崩壊のため、分類不可能なものである。

Ⅰ類「主に千枚岩」

Ⅱ類「全て砂岩」

Ⅲ類「その他、分類不可能」

次に、配石の傾きを中分類とした。傾きについては、傾斜角の基準を設けず、地形や配石全体の様子から判断した。

A類「お椀状」

B類「皿状」

最後に、分析上、集石遺構の完形と未完形に分けるため、配石設置における残存状態を小分類とした。A類は配石が円形状となっているもの、I類は遺構中央部のみ配石がないもの、U類は分類可能であるが、配石の一部がなく完全な円形状でないものである。

A類「配石が全部あり」

I類「配石が遺構中央部のみなし」

U類「配石が一部なし」

その結果、各級の基数は、以下である。

ⅠA類…46基（A類31基、U類15基）

ⅠB類…64基（A類36基、I類7基、U類21基）

Ⅱ類…3基

Ⅲ類…44基 計157基

また、上記の分類の他に、配石の大きさ（直径）についても分類した。配石全体の半分以上が、直径30cm以上の大きさの配石で占められているものを1類、同じように30cm未満の配石で占められているものを2類とした。

個々の集石遺構計測結果から、完形であるA類のみを取り上げ、以下に述べる。

ⅠA類は31基で、遺構の直径平均73cmで、掘り込みの深さ平均31cmであった。配石は、点数平均15点、重量平均47kgであった。配石の大きさは、1類が84%、2類が16%であった。ⅠA類は15基である。ⅠB類は36基で、遺構の直径平均82cmで、掘り込みの深さは平均23cmあった。配石は、点数平均15点、重量平均51kgであった。配石の大きさ（直径）の分類は、全て1類となっている。ⅠB類は7基で、中央部のみ配石がないものと、中央部と外側一部の配石がないものがある。ⅠB類は21基である。

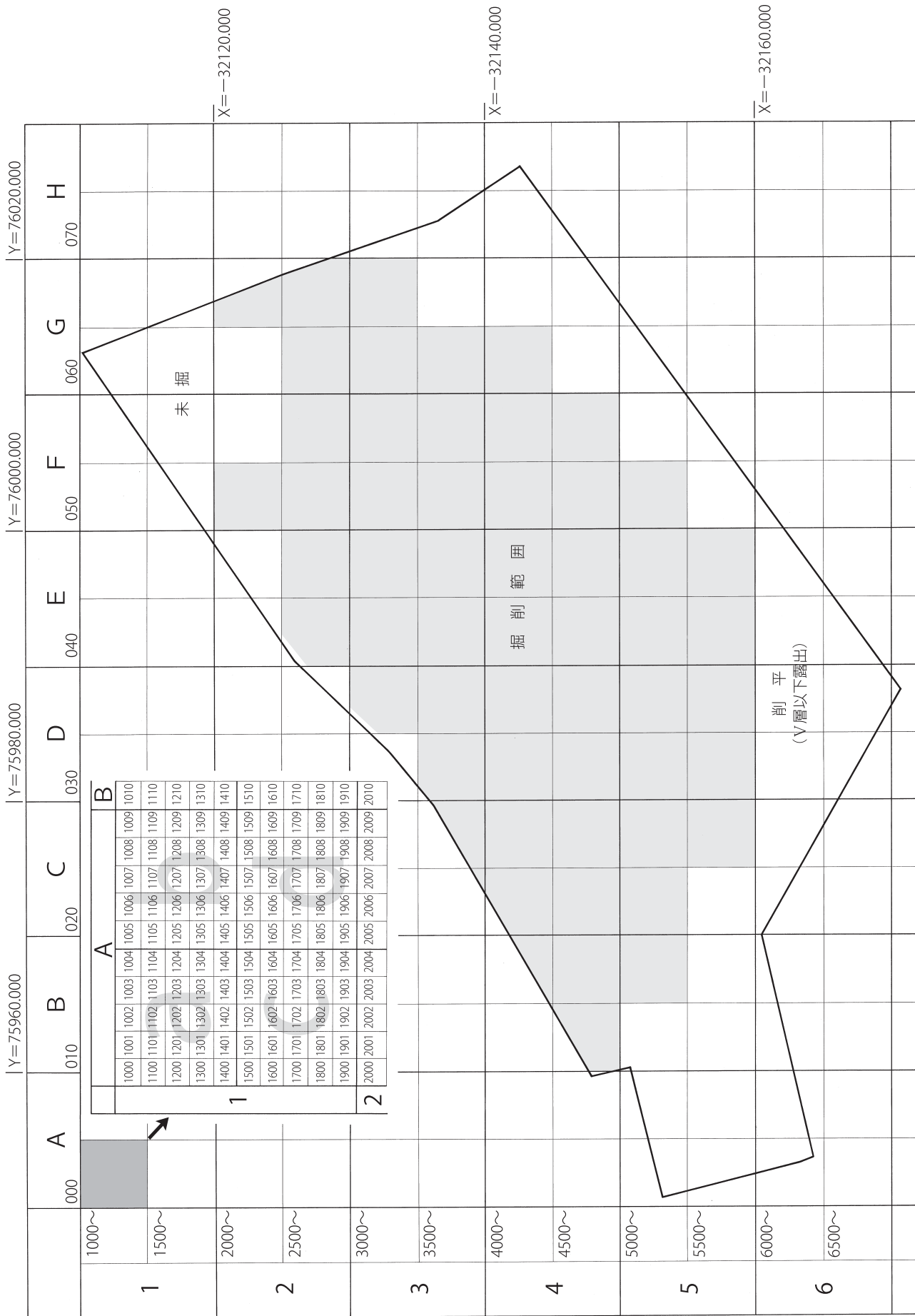
Ⅱ類は3基あり、B類が付加される。配石、内部礫とも同質の粗質な砂岩であり、区別が困難であったため、比較的大きなものを配石として認定した。SI119は、この類が確定できた1基であった。検出時は千枚岩の配石が確認できず、散礫と同じように除去したため、内部礫は未図化である。

Ⅲ類は44基である。SI145（ⅠB類）と切り合っているSI120のみ、その他の分類とした。掘り込み範囲が鮮明ではないものの僅かに確認でき、また、配石と思われる板石の急な落ち込みが見られる。

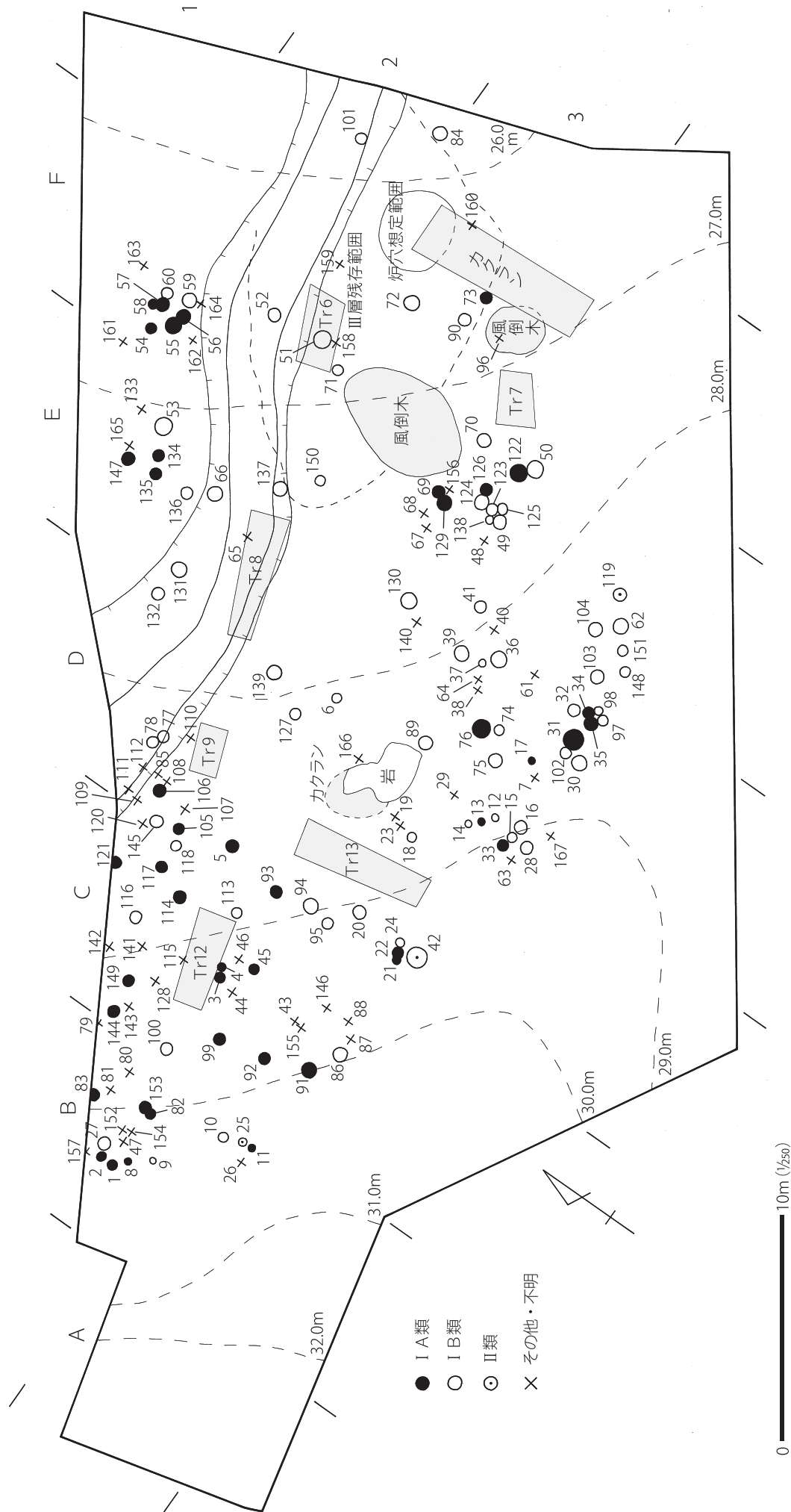
集石遺構の全体的な分布については、掘削した範囲（第22図）と集石遺構分布図（第23図）から、確認トレンチや土石流跡、風倒木跡と思われる土層横転箇所、調査区中央付近に位置する千枚岩の巨礫東側の一部を除き、どの類型も、ほぼ全域に渡って検出されている。比較的、ⅠA類は調査区北西部に、ⅠB型は調査区南部に、Ⅱ類は調査区南部の尾根沿いの基盤層直上より検出されている。

図化については、検出時の配石と内部礫を含む全体図と配石図を分けてある。配石は人為的に配置されたものであり、原位置を保っている可能性が高いため、配石のみは平面図、断面見通し図（一方向）を作成した。内部礫が微少であったり、残存してなかったりしたものは、配石のみを図化した。掘り込み線は、前述の理由により想定である。配石は、ほぼ千枚岩だが、粗質な砂岩のみ▲印で記した。その他、時間的制約があったため、集石遺構11基は写真撮影のみ、炉穴は全て土層断面図中に図化した（第18図）。

なお、個々の詳細については、集石遺構観察表を参照されたい（第12表）。（山田）



第22図 森ノ上遺跡グリッド配置図



第23図 森ノ上遺跡集石遺構分布図

4-3. 炉穴

炉穴は4基あり（SP1～4）、G3グリッド周辺の攪乱を除去した際の壁面観察中に、局所的に見られた混礫土層（旧流路）に掘り込まれた状態で検出された（第18図）。

炉穴の掘り込み面の特定は集石遺構との関係を知る上で重要なのであるが、埋土土色等による炉穴壁面の認識が困難であったことから不明確であった。しかし、1基のみIV層中まで立ち上がりを追跡可能な例もあったことや、一般的に宮崎県内で知られる炉穴の規模等から推して、炉穴は集石遺構と近いⅢ・IV層境から掘り込まれたと考えられる。これと関連し、炉穴の検出についてIV層中では視認困難であり、明らかに色調の変化するV層等まで掘り下げることによって明確に検出可能とわかる。また、炉穴の検出は断面の方が平面よりも相対的に易しかった。

炉穴の分布について、そもそもG3グリッド周辺の攪乱壁面における炉穴の存在に気付いたのは調査終盤であったため、既調査範囲について炉穴が分布するのかどうかの確認が必要となった。まず、V層下位まで掘り下げられていた9・12・13確認トレンチの断面観察では、炉穴は見出されなかった。また、散礫あるいは集石遺構を調査したグリッドでは、集石遺構に関連する礫等が出土しなくなるV層中まで掘り下げて調査終了としていた。そこで、該当範囲について炉穴の有無について検討した結果、やや不明瞭な部分を残しつつも炉穴は分布しない可能性が高いと判断できた。これらの状況からは、斜面全体に炉穴群が展開するのではなく、全体地形の中では最も低所に相当する旧流路沿いの緩斜面に限定して炉穴が分布する可能性が高いと考えられる。

SP1は断面A～B（第18図）にあり、IV層に似た埋土で少量の焼土塊と床面やや上に千枚岩が含まれていた。埋土とIV・V層の識別は、埋土の方がV層よりも若干暗く焼土塊を含む程度と非常に困難であり、V層下の流路まで掘り込まれた床面からの流れで、壁の立ち上がりを追いかけることとなった。断面A～BにはSI160がIV層中に構築されており、その層位関係から見てSI160は炉穴と近い新しい時期のものと考えられる。

SP2は断面C～D（第18図）にあり、3基以上の切り

合い、あるいは埋土土色の分かれる単独の炉穴のいずれかである。炉穴の東壁の立ち上がりはⅢ・IV層境まで追え、おそらくはIV層面付近より掘り込まれた炉穴なのであろう。西壁側の立ち上がりは不明瞭である。埋土は他炉穴よりも暗く、断面観察ではIV・V層との識別は比較的容易である。しかし、炉穴の平面的検出を試みたところ、IV層最下部付近になってようやく識別できるような難しさがあった。

SP3・4は断面E～F（第18図）にある。土層との関係から見ると、旧流路に向かって下がった斜面に上下して構築され、SP3の方がより低位置にある。両者とも流路に掘り込まれた床面によってのみ識別でき、埋土とIV・V層の識別は非常に困難である。（藤木）

4-4. 遺物

本遺跡では、掘削した約1,400㎡のほぼ全範囲から縄文時代早期に位置付けられる遺物がIV層より多量に出土した。調査区東側には土石流による礫の堆積が確認され、礫の除去後、残存しているIV層からも少量であるが遺物が出土している。また、調査区の東側一部の低地部分に堆積するⅢ層やⅣ層とIV層の混在した層からも僅かに出土している。V層においてはIV層と混在した部分から土器片1点のみ出土している。

・土器（第44図～第54図 26～220）

土器片の総点数は8,790点、総重量157,960gであった。その中で195点を図化した。掘削範囲より出土した土器は、大多数が土器片であり、風化が著しかったり、小片であったりするなど不明な土器片が多く、全体の器形を知る資料は出土していない。ナデ、ミガキ等の器面調整については判別不能なものが多い。また、図化したものの、拓本が採れないものもあった。出土した土器片から、分類基準を外面の施文をもとに大別し、口縁部については比較的直口するものから順に掲載した。

以下の4つに分類した。なお、無文土器の中には、文様のある土器の無文部分も含まれている。

I類「貝殻文系土器」

II類「押型文系土器」

III類「その他の施文土器」

IV類「無文土器」

各類型の全体重量に占める割合は、I類が20.1%、

Ⅱ類が4.4%、Ⅲ類が0.3%、Ⅳ類が61.2%、表面剥落・小片不明が14%である(第22表、第72図)。無文土器を除くと、貝殻文系土器の割合が高い。

I類「貝殻文系土器」(第44図～第48図 26～95)

貝殻文系土器は総点数914点、総重量31,782g出土している。重量分布図から比較的どのグリッドからも出土しているが、掘削範囲内のF3Bグリッドに特に集中して出土している。貝殻文系として、以下に細別している。

- A類 全体に縦・横・斜方向の貝殻条痕文を施す。
- B類 貝殻条痕文を基調とし、口縁端部に刺突文を施す。
- C類 口縁部に刺突文や条痕文があり、口縁部下位は無文帯である。
- D類 楔形貼付突帯があり、刺突文(縦位)を施す。

I A類(第44図～第46図 26～60)

26～31は外面に縦方向の貝殻条痕文を基調としている。内面は縦・横方向の貝殻条痕文で調整を行っているものが多い。26・27は口縁部が直口し、他は緩やかに外傾している。30は深さが浅く、幅の狭い貝殻条痕文が施されている。

32～39は横方向の貝殻条痕文を基調としている。器壁が厚く、口縁部は緩やかに外傾、外反している。33はコブ状の突起、37は穿孔を有する。

40～60は斜方向の貝殻条痕文を基調としている。上記の縦・横方向のものと比較して、幅の狭い貝殻条痕文が全体的に施されている。口縁部はやや外傾ぎみで、丸みのある口唇部が多い。器壁は厚く、内面はナデ調整のものが多い。43は口唇部に棒状工具による沈線が施されている。47は口縁部下位に瘤状の突起を有する。52～54は口縁部が外反し、55は内湾している。56は深さの浅い、極端に幅の狭い貝殻条痕文が施されている。

I B類(第46図・第47図 61～69)

貝殻条痕文を基調とし、口縁端部に貝殻腹縁による連続刺突文が施され、内面はナデ調整のものが多い。全体的に風化が激しく、器壁は肉厚であり、口縁部がゆるやかに外傾する。61・62は口縁端部に横・斜方向の貝殻条痕文上に縦位の貝殻腹縁による連続刺突文、64～66は口唇部が平坦で口縁端部に斜位の貝殻腹縁

による連続刺突文が施されている。66は口縁端部に棒状工具等による連続刺突文が施されている。67・68は口縁端部に貝殻押引状の施文がある。69は口縁部近くの胴部であり68と同類の施文である。

I C類(第47・48図 70～90)

70～81は口縁端部から胴部上位にかけ、縦位の貝殻腹縁による連続刺突文を2段から3段ほど横方向に廻らす。その下位の胴部はナデ調整の無文帯である。全体的に風化が激しいが、内面はナデ調整のものが多い。器形はI B類と類似している。76～81の口縁端部には、押引状の貝殻腹縁による連続刺突文を廻らしている。

82～90は口縁部から胴部上部にかけ、横方向の貝殻条痕文が2段から3段ほど巡り、その下位の胴部は無文帯である。調整や器形も70～81と類似している。83のみ口縁部が直口し、貝殻腹縁による連続刺突文が口縁部中位に施され、上位と下位で挟むように横方向の押し引き文が廻っている。84・85・90は貝殻条痕文の切れ目部分が見られる。89は83と類似した貝殻押引文が巡っているものの、口縁部は大きく外反する。

I D類(第48図 91～95)

全て胴部片であり、器壁は薄く楔形貼付突帯があり、縦位の貝殻刺突文を施している。91は風化が著しく内面調整は不明である。92は風化のため、縦位の貝殻刺突文は確認できないが、楔形貼付突帯から91と同類と推測できる。93～95は同一の可能性も高い。外面は浅く、幅の狭い斜方向の貝殻条痕文を基調とし、その上から縦位の刺突文線を施している。内面は縦・斜方向のケズリを施している。

Ⅱ類「押型文系土器」(第48図～第50図 96～126)

押型文系土器は総点数133点、総重量6,977g出土している。重量分布図から比較的どのグリッドからも出土している。押型文系としてA類を山形押型文、B類を楕円押型文、C類を捺糸文と小別している。

Ⅱ A類(第48図 96～104)

山形押型文土器は総点数52点、総重量481g出土している。胴部片が多く、口縁部の点数は少ない。器壁は薄く、比較的の外反するものが多い。外面は、全て横方向の山形押型文を施している。内面は、96は原体条痕、97・98は押型文が施されている。99～101の内面は無文である。102～104は口縁部以下の胴部で、上部

は押型文が施され、下部は無文である。

II B類 (第48図・第49図 105～111)

楕円押型文土器は総点数34点、総重量761g出土した。胴部片が多く、口縁部の点数は少ないが、器壁は薄く、II A類と比較すると直口している。外面は、全て横方向の楕円押型文を施し、楕円の大きさもほぼ同等である。内面では、105・106は押型文、107・108は無文、109～111は上部が押型文、下部は無文である。

II C類 (第49図・第50図 112～126)

撚糸文土器は総点数47点、総重量5,735 g出土した。口縁部は直口するものが多く、器壁は厚い。口唇部は丸みを帯びるものが多くが平坦面を有するものもある。風化が著しいため、施文原体がはっきりせず僅かに撚糸文と確認できるものもある。112の外面は撚糸文を基調とし工具による連続刺突文を施している。内面はナデ調整である。114の内面下部は工具によるナデ調整がある。115の外面下部は風化が著しく施文原体がはっきりしない。器壁は厚いが、口縁部端は先細り状で薄くなっている。穿孔が見られ、両側からの円穿孔である。内面は風化が著しく調整不明である。117は口唇部が平坦であり、内面は工具によるナデ調整である。118の内面は上部のみ横方向の貝殻条痕文を確認できる。119の内外面に指頭圧痕がある。120の外面は風化が著しく、撚糸文が施されている可能性がある。内面は押型文(楕円)が施されている。器壁はこの類の中では非常に薄い。121の外面は横方向の施文上に一部、斜方向の施文が施されているが、風化が著しく貝殻条痕文の可能性もある。内面は貝殻条痕文で外面と同じく横方向の施文上に一部斜方向の施文がある。124も外面は、僅かに撚糸文の痕跡が見られるが、風化が著しく貝殻条痕文の可能性もある。内面は縦・斜方向の貝殻条痕文を施している。125は上部端に一部、撚糸文が確認でき、他は無文であり、工具でナデ調整されている。126は斜方向の撚糸文上に一部、縦方向の撚糸文の施文が確認できる。

III類「その他の施文土器」(第50図 127～130)

その他の施文土器として、棒状工具等による沈線文や刺突文を施された土器が総点数4点のみで、総重量は461 gである。掘削範囲内のE4グリッドより3点出土している。全体的に器壁は厚く、127は風化気味で、

貝殻条痕文の可能性もあるが、外面一部に斜方向の細沈線文が僅かに確認できる。内面はナデ調整である。128は多方向に沈線文があり、内面は剥落著しいがナデ調整である。129・130は棒状工具による連続刺突文が施されている。内面はナデ調整である。

IV類「無文土器」(第50図～第54図 131～220)

無文土器は総点数4465点、総重量96,570 g出土した。前述したとおり、無文土器の中には、文様のある土器の無文部分も含まれている。

口縁部は比較的、直口するものが多いが、緩やかに外反するもの、内湾するものも含まれる。口縁部器壁は上記の分類と比較すると薄手である。口縁部付近に瘤状突起や突帯等を付するものもある。また、穿孔が見られ、貫通や未貫通の円穿孔である。口縁部以下から底部にかけては、外面、内面ともナデ調整であるが、一部、内面調整に貝殻条痕文を施しているものもある。器壁は厚手のものが多いが、薄手のものも混じる。底部の器形は尖底、丸底、平底があり、全底部点数は31点確認された。

131の口縁部は直口し、132～159は直線上に外開き、あるいは緩やかに外反している。137・141・153は、内面調整として横方向の貝殻条痕文が施され、146の内面の口縁部端には縦方向、その下部には横方向の貝殻条痕文が施されている。143・147の口縁部は先細りで外反気味である。145・152・154の口唇部は平坦面である。150・151・157の器壁は極端に薄い。155も器壁は極端に薄く、口唇部端がわずかに外反している。159の口縁部は緩やかに内湾し、内外面ともナデ調整で指頭圧痕と思われる凹みが多い。

160～170は瘤状もしくは帯状の突起、突帯を付する無文土器片で、確認された全11点を図化した。風化の著しいものも多く、個体数は明確に確認できないが、器壁の厚さや口縁部の傾斜、文様や調整、色調や胎土の状況から別個体の可能性が高い。内外面ともナデ調整で口唇部は丸みを帯びているものが多い。

160の口縁部は直口もしくは内湾気味であり、他と比べ小さい円形状の瘤が付している。161・162の口縁部は直線上に外開きである。163・164は緩やかに外反し、小さい円形状の瘤が付している。165の口縁部は内湾し、大きめの楕円状の瘤が付している。166は

瘤周辺に整形のためか、工具等による条痕や指頭圧痕が確認できる。167は左端部が剥落しているが1段の突帯、168も剥落しているものの2段の突帯を有する可能性が高い。169は帯状突起である。170は胴部か口縁部上部の可能性も考えられるが、小さい瘤状突起を付する。

171～177は胴部である。173・175の内面は斜方向の工具による調整痕が見られ、175は内面より未貫通の穿孔を有する。土器片加工円盤の可能性も高い。176の内面は不規則な貝殻条痕文を施した後、ナデ調整である。

178～186は底部付近、197～220は底部である。器壁は薄いものから厚いものまであり、全体的に風化気味のものが多い。そのため、調整についてはミガキ、丁寧なナデ、ナデの判別が不明瞭である。196～201は尖底、202・203は乳房状尖底、204～207は丸底、208～220を平底である。219・220は外面がミガキ、内面は丁寧なナデである。底部に圧痕はない。(山田)

・石器 (第55図～第67図 221～539)

土器と同じく、縄文時代早期のIV層を中心に、粗質な砂岩である多量の散礫の中には、良質な砂岩をはじめとする他の石材も混在しており、それらの中には多数の石器が含まれていた。石器の総点数は2,638点、総重量409,797 g (第23表・第24表)であり、その中の319点を図化した。

石器については、打製石鏃、石斧、粗製剥片石器、礫器、スクレイパー、敲石、磨石、台石等が出土している。特に砂岩製の敲石・磨石・礫器・剥片等が多数出土し、現地にて水洗作業を行い、調整や使用痕等を選別した上で本センターにて整理作業を行った。また、集石遺構内においても、配石の中には台石として、内部礫の中には礫器として使用しているものもあった。

チャート製石器群 (第55図・第56図 221～313)

チャート製石器は、まず、主に濃薄灰色・白色系、緑色系、赤色系、その他の色の4種類で大別した。石鏃は平面の形状、挟りの深さで小別している。

221～298は、黒色系、灰色系、白色系のチャート製の石鏃、二次加工剥片等である。特に、濃薄灰色・白色系のチャートはチップ状の小片を含め、本遺跡の

大部分を占める。

221～233の平面形は、ほぼ正三角形で、基部に浅い挟りを有する石鏃である。221～223は透明に近い白色系のチャートである。221は小型で断面形が薄く、222は脚部先端に丸みを帯びており、223は粗い調整である。224は裏面中央部に瘤が残り、225は比較的厚みがある。226は側縁が膨らみ先端部は欠損しており、裏面に素材剥離面が残る。227は周縁に細かい調整がしてあり、228は粗い調整である。229は先端部が欠損している。230は裏面に素材剥離面を残し、平坦に調整されている。231は先端部と左脚部は欠損している。232・233は調整が粗く、233は素材剥離面を大きく残している。

234～243は、平面形がほぼ正三角形で、基部に深い挟りを有する石鏃である。234は小型で断面形が薄く、挟りが大きく外側縁辺が膨らみ、丸みを帯びている。235は234と比べると、挟りや外側縁辺の膨らみは少ない。234～240は先端部と脚部が欠損している。241～243は大型で、U字状の挟りが大きく、全体的に粗い調整である。

244～252は、平面形がほぼ二等辺三角形で、基部に浅い挟りを有する石鏃である。244・245は小型で、断面形が薄く、極端に浅いアーチ状の挟りを有する。246は先端部を尖らせ、正面裏面とも細かに調整してある。247は正面より両側縁に大きな剥離があり、裏面は平坦に調整している。248・250は右脚部、249は左脚部が欠損している。251は、やや大型で断面形も厚く、左側縁は細かい調整が施され、右側縁は剥離による屈曲点をもつ。252の先端部は欠損し、裏面に素材剥離面を残している。

253～260は、平面形がほぼ二等辺三角形で、基部に深い挟りを有する石鏃である。253の断面形は薄く扁平であり、左脚先端部が丸みを帯びている。254・255は深いU字状の挟りを有する。256～260は、先端部や脚部が欠損している。

261～295は、その他の形状や石鏃未製品、二次加工剥片である。261は左右脚部が欠損しているが、残存状況から鈍角な挟り角で、底辺の長い、幅広い三角形の形状である。262の先端部は欠損し、素材剥離面を大きく残している。263・266の挟りは、ほとんどなく

正面形が非対称な形状である。264・265は素材剥離面を残し、周縁部のみ細かな調整を施している。267～269、271～273、275は石鏃未製品と推察され、270・274は二次加工剥片である。276はトロトロ石器の可能性が高い。薄灰色系のチャートに濃灰色の縞模様が見られる。素材剥離面を大きく残し、表面体部中央から左側縁部・脚部にかけて調整し、平面形は概ね左右対称である。断面形は体部左側が右側より厚い。裏面中央は粗い調整で平坦面が段状になっている。擦痕はない。277～295は二次加工剥片である。

296～298は石核であり、礫面を多く残す。296は本遺跡で多く出土したチャート(灰・白)の石材である。

299～304は緑色系チャート類の石器である。299は小型の石鏃であり、裏面は周縁部から中央に向かって調整され、素材礫面をほぼ中央に残す。300～303は石鏃未製品であり、304は二次加工剥片である。

305～308は赤色系チャート類の石器である。305は縦長で細かな調整をされている。右脚部は欠損である。306・307は未製品である。308は楔形石器であり、平面形は四辺形を呈し、両端部に階段状剥離が見られる。下部は欠損している。

309～313はその他(茶系や黒系)の色の石器である。309・310は石鏃未製品で、311・312は二次加工剥片である。313の平面形は、ほぼ正三角形であり、小型で薄く、抉りも深い。黒色の縞模様が入るチャート製石鏃である。

黒曜石製石器群(第56図・第57図 314～321)

314～320は姫島産黒曜石製の石器である。314～316、318は石鏃未製品である。317は大型で断面形も分厚い。右側縁の先端部に近い位置に屈曲点をもつ。319は異形石器で、三叉状に調整されており、上端部が両脚部より幅広で長く、先端部は欠損している。表裏両面から加工され、裏面は平坦に調整されている。320は石核である。321は淀姫・針尾島産黒曜石製の可能性の高い石器で、二次加工剥片である。未図化であるが、腰岳産黒曜石の小剥片やチップも計9点、総重量7.3g出土している。なお、黒曜石の産地名については外観によるものである。

ホルンフェルス製石器群(第57図 322・323)

322の平面形は、ほぼ正三角形で両縁辺が少し膨ら

む石鏃である。抉りは浅く、アーチ状である。裏面は素材剥離面を残し、周縁部を細かに調整している。先端部は欠損している。323は二次加工剥片である。大型の石器等も出土しているが後述する。

安山岩製石器群(第57図 324～330)

324・325・327は石鏃で、324の平面形は、ほぼ正三角形で小型である。先端部の調整により、僅かに突出している。325の平面形は、ほぼ二等辺三角形で、断面形は薄い。両縁辺から脚部にかけて丸みを帯びており、抉りも深い。327の抉りは浅く、アーチ状である。326は異形石器であり、319より小型で薄いものの、調整の仕方は類似している。上端部と右脚部は欠損している。328は縦長剥片を素材にした柳葉形の尖頭器で、本遺跡で唯一の出土品である。表裏面とも縁辺に細かな調整が施され、先端部は欠損している。329・330は二次加工剥片で裏面は礫面である。

砂岩製石器群(第57図～第64図 331～467)

331は石針である。全面にわたり上下方向の研磨が見られ、正面左側縁部下端のみ僅かな剥離がある。332～335は自然礫面や剥片を素材とする打製石斧である。332・333はきめの細かい良質な砂岩を使用し、正面に自然礫面、裏面に素材剥離面を大きく残している。両面もしくは片面の縁辺を粗い調整により方形かつ扁平に整形している。自然礫面や刃部付近には擦痕が確認される。また、刃部付近の稜が潰れるなど使用による摩滅と推察する。332の刃部は欠損している。333は体部上下を接合している。334・335は、上記の打製石斧の整形と類似しているが、調整が粗雑で擦痕や摩滅もなく、未製品と推察する。

336～394は、粗製剥片石器や礫器である。素材となる剥片周縁を粗く調整し、刃部を整形しているものを粗製剥片石器、大型で片面一定方向より打撃を加え、刃部を整形しているものを礫器とした。粗製剥片石器は正面形から半円形状、円形状、方形状と小別した。刃部に使用による摩滅が確認されるものも多い。粗製剥片石器や礫器は大小問わず、本遺跡から約300点を超えるなど大量に出土している。

336～370は良質な砂岩を素材とした粗製剥片石器や礫器である。裏面は礫面である。

336～340、343～348は、半円形状粗製剥片石器で

ある。礫の上端を横・斜方向に打ち折った可能性が高い平面形が半楕円形のもの半円形に含めた。337は熱を受けて赤化したものと推察される。343の上端は節理面である。339～340、346の刃部は、使用による摩滅と推察する。345は、斜方向に打ち折られた先端部を鋭利に調整している。341・342は方形状粗製剥片石器であり、比較的大型で、礫面の周縁部を粗く調整している。342は341の下端部を打ち折ったような形状である。

349～365は円形状粗製剥片石器であり、周縁部の摩滅が目立つ。351・354・355・357・359・360は裏面の礫面中央に浅い敲打痕が確認される。361・362は、熱を受けて赤化したものと推察される。

366～370は、肉厚な砂岩を素材としている二次加工剥片である。369は裏面中央に敲打痕、370は下端部に摩滅痕が確認できる。371は石核である。

372・373は礫器である。大型で良質な砂岩礫を片面一定方向より打撃を加え、刃部を整形している。

374～394は、比較的、粗質な砂岩を石材としている方形状粗製剥片石器である。390・391のみ、円形状粗製剥片石器である。扁平な礫や肉厚の剥片周縁に粗い調整を行い、刃部を整形している。380・384・387・392・394は、節理により分割された平坦面を有し、縁辺を刃部の一部としている。381・382・384・385は、剥離によって直線的な縁辺を有する。

395～447は、良質な砂岩円礫を素材とした敲石・磨石類である。礫の周縁や平坦面に敲打痕や磨痕が同一石器に確認されるため、多くは敲石と磨石の併用が推察される。磨痕の範囲については、手触りが非常に滑らかな石材であるため、不明確なものもある。未図化のものを含めると、礫器と同様、本遺跡から約200点を超えるなど大量に出土している。

395～402は楕円礫で、礫の長軸両端部に狭い範囲で比較的強い敲打痕が確認できる。403は棒状の敲石で、断面形は角のない三角形状である。正面の平坦面に複数の敲打痕が確認される。404～407は楕円礫の中央周縁から粗い調整を加え、礫を分割し、横・斜方向の平坦面を整形している。405・406の分割された周縁部は摩滅している。特に405は細かい調整によって平坦面を整形している。

408～422は楕円礫で、礫の短軸両端部に広い範囲で敲打痕が確認できる。断面形の両端部は、敲打によって、やや平坦面となっている。417～422は楕円礫が分割され、分割面の周縁部は摩滅している。417・418は粗い調整によって、中央やや上部より礫を節理によって分割している。418の裏面中央部には、敲打痕の範囲が円形状に確認される。420は楕円礫で断面形がやや角のない長形状のものである。楕円礫の長軸上下部以外の一部を使用した礫である。表裏面ともに敲打痕や磨痕が確認される。420～423は節理によって直線的に分割されたものであると推察する。断面形から、420・421は敲打痕によるもの、422は礫の形状と敲打痕によるもので、極端な平坦面となっていると推察される。

423～434は手の平に収まる程の大きさで、平面形は円形もしくは楕円形で、断面形はやや扁平である。礫の両面中央付近に、個々によって深さに違いはあるものの、平坦面に敲打痕による凹みや磨痕が確認される。また、礫周縁にも敲打痕が確認される。423は比較的大型で赤化している。正面右側に亀裂が生じている。435の平面形は長軸のある楕円形で、扁平な断面形である。436の平面形は、ナス状で下端部に向けて幅広くなっている。437の平面形は大型で断面形は扁平である。敲打痕は、平坦部や周縁部とも全面にわたり確認される。438～444は小型の敲石で、平面形は楕円や円形で、断面形は扁平なものから球状のものまでである。439は広範囲で、440～443の周縁部は全周にわたり、敲打痕が確認される。444は、平面形は楕円形であり、長軸の両端部に敲打痕が確認される。445～447は前述した404～407の小型版であるが、表裏面の平坦部中央に敲打痕による凹みが確認される。

448～462は台石である。石材としては、礫器と類似した目の粗い砂岩である。主に、扁平な砂岩をそのまま素材としたり、節理面から扁平な礫に調整したりして、台石として供給している。平坦面に敲打痕や磨痕が確認される。448～453・462は小型の台石である。448の平面形は、おにぎり形でその周縁に調整はなく、正面の平坦面が中心に向かって僅かに窪み形状をしている。平坦面に弱い敲打痕が点在している。453の右側面は節理によって分割され、平坦面に擦痕が確

認められる。454～461は、大型の台石であり、明確な稜線のみ図化した。454・459のみ、目の細かい砂岩であり、断面形は比較的分厚い。454は、平坦面中央部に強い敲打痕が確認される。461は特に大型で、長さ56cm、重量12.5kgである。

463～467は砥石で、目の細かい砂岩で、扁平礫を素材としている。463の残存部から比較的、大型礫の一部と推察する。左側面は節理によって分割されている。表裏面とも研磨されており、正面中央部付近には研磨による緩やかな凹みや弱い敲打痕が確認される。464の表裏面には研磨による深い凹みがあり、断面形はお椀状である。なお、裏面には深い凹みと並行して、1条の溝状削り痕が確認される。463・464とも全面赤化している。465は、正面の砥面中央部に数条の浅い溝状削り痕と浅い敲打痕が確認される。裏面は節理面である。466の正面は、緩やかな凹みを有し、砥面上端に多数の敲打痕が確認される。467は表裏面ともに砥面である。

花崗斑岩製石器群 (第64図・第65図 468～480)

468～470は礫器である。片面一定方向より打撃を加え刃部を粗く整形している。471～480は敲石・磨石である。敲打痕や磨痕については、上述した砂岩製敲石・磨石と類似しており、多くは敲石と磨石の併用が推察される。472は接合しており、474はガジリ痕がある。

流紋岩製石器群 (第65図 481～485)

481は二次加工剥片を接合している。482は礫の周縁や表裏面の平坦面に敲打痕や磨痕が確認される。483・484の正面中央部付近に浅い敲打痕があり、485は表裏面とも磨面であり、下側縁に敲打痕が確認される。

頁岩製石器群 (第65図 486～494)

486は石斧であり、左側面は礫面である。表裏面とも素材剥離面を大きく残し周縁部を粗く調整している。正面左側面には礫面を残す。刃部は欠損している。487～494はスクレイパーである。表裏面に礫面や素材剥離面を残し周縁部に剥離を加えて刃部を整形している。

ホルンフェルス製石器群 (第65図・第66図 495～520)

495～502は手の平に収まる小型礫器である。分割された扁平な円もしくは楕円礫を粗い調整により刃部を整形している。表裏面には、擦痕が確認される。496・497・499・502は、片面一定方向より打撃を加え、刃

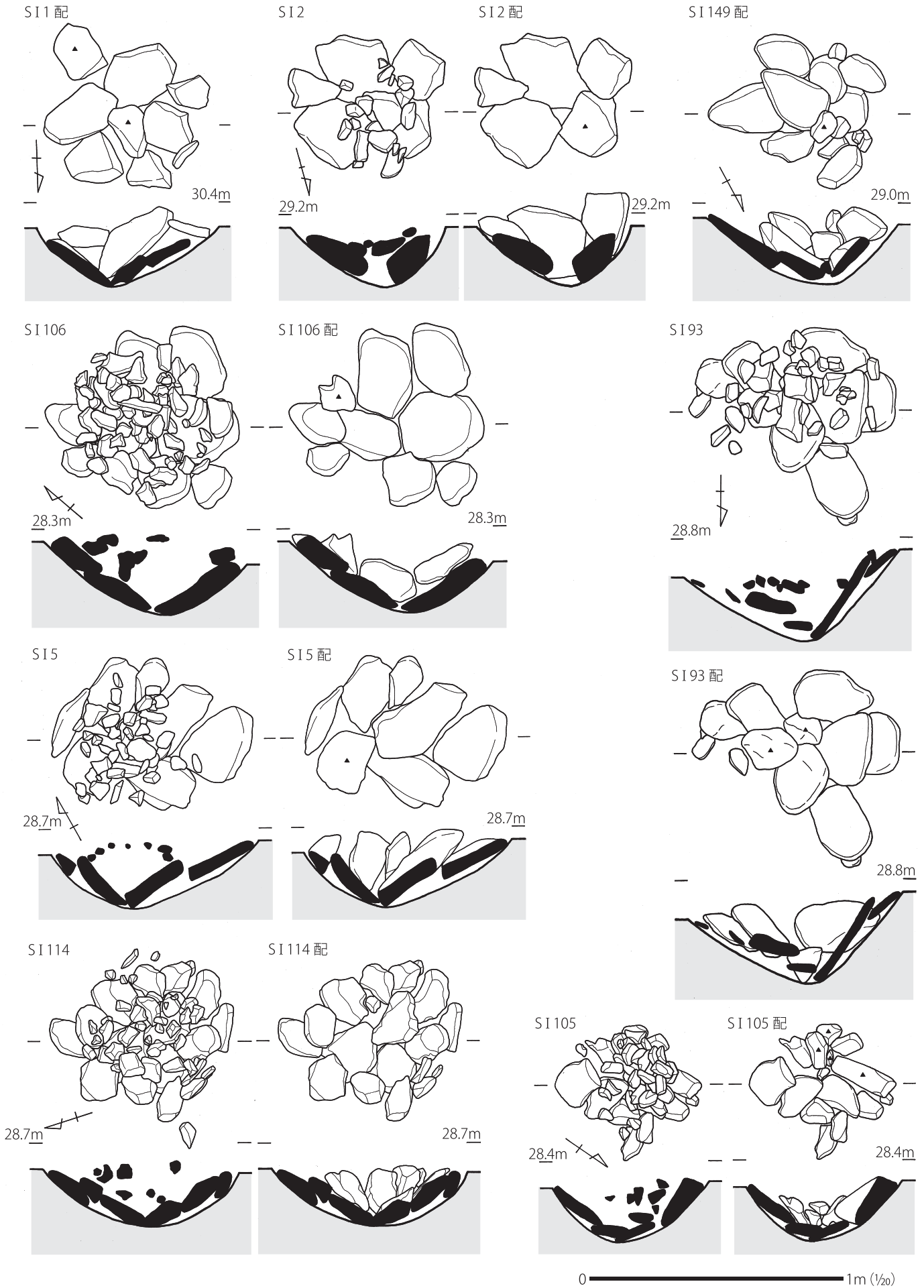
部を整形している。498は比較的厚みのある礫の片面に粗い調整を施している。左側縁部には細かな調整が確認される。495・500・501の裏面には一部の剥離が確認される。503～505は二次加工剥片である。506～509はスクレイパーである。裏面は礫面であり、素材剥片の一部もしくは周縁部に剥離を加えて刃部を整形している。508は接合している。510は礫器であり、擦痕が確認される。511・512は扁平礫を素材とした敲石・磨石である。表裏面に使用による明瞭な敲打痕や磨痕が確認される。513・514は扁平礫を素材とした小型の石斧である。513は、片面両側縁から調整しており、断面形は三角形となっている。514は表裏面ともに礫面を大きく残し、素材形状を利用している。下端部の周縁部を細かに調整し、刃部として整形されている。

515は棒状礫を素材とし、目立った剥離はなく、表裏面に擦痕のみ確認される。形状から石斧の可能性はある。516は513と大きさや調整が類似しているが、やや粗い調整である。石斧未製品と推察される。517～519は二次加工剥片で、520は石核である。

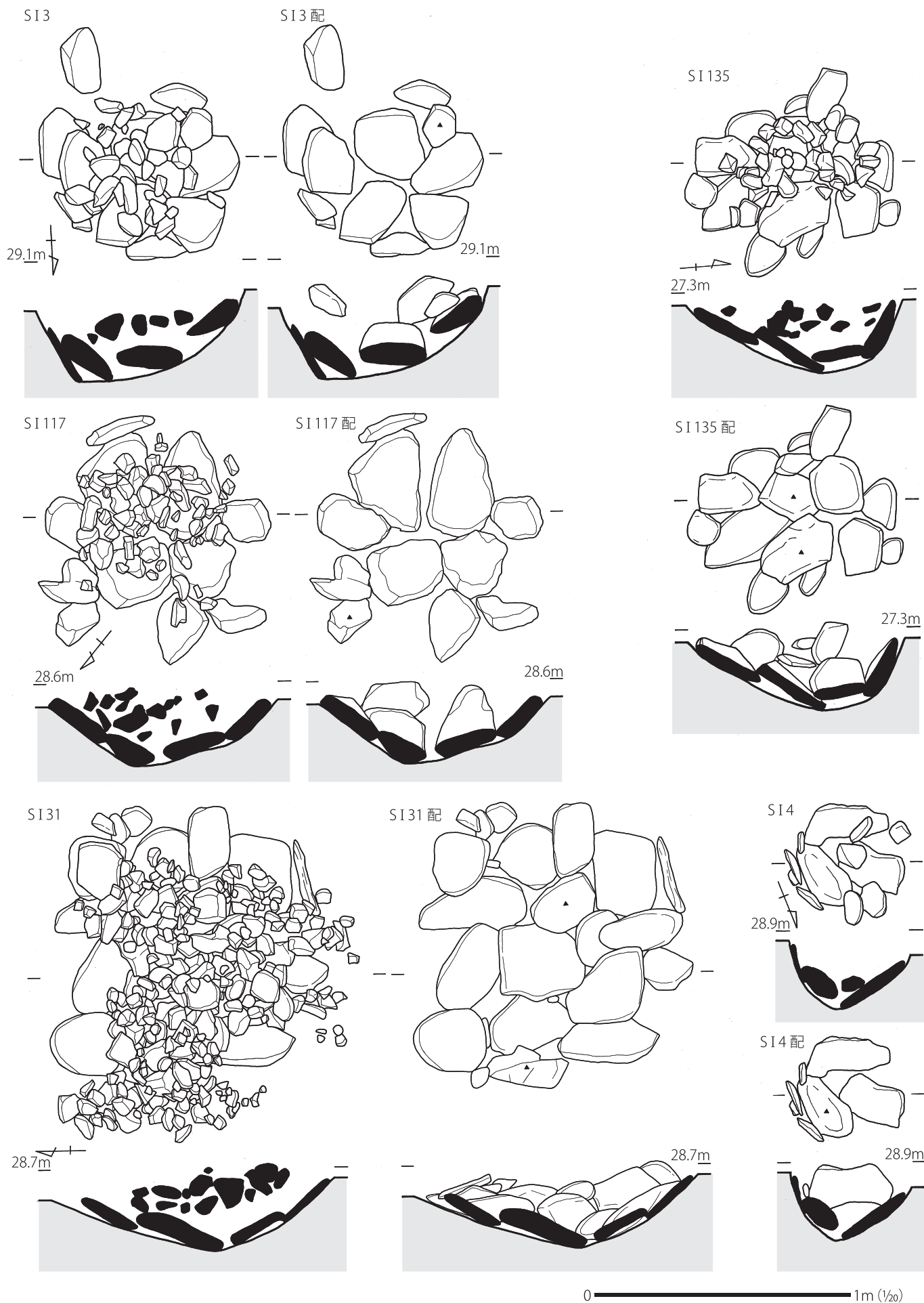
千枚岩製石器群 (第66図 521～531)

521～529の表面もしくは表裏面に敲打痕による凹みや周縁に摩滅が確認され、円形状粗製剥片石器とした。524・526のみ全体が厚く、手の平に収まる程の大きさであり、敲石とも推察される。523・527は方形状粗製剥片石器で、複数の敲打痕を有している。523は集石遺構内部礫から出土し、全体が赤化している。裏面は礫面である。529は貫通孔がある。厚さが非常に薄く、裏面に平坦面を有することから、円形状粗製剥片石器や敲石の表面が薄く剥がれたものと推察する。530～533はスクレイパーである。表裏面に礫面や素材剥離面を残し、周縁部に剥離を加えて刃部を整形している。530・531の両側縁には摩滅が確認されるが、使用によるものか風化によるものか判別しにくい。534～536は線刻のある剥片である。534の左側縁部は節理により分割され、右側縁部は摩滅が確認される。536は表裏面ともに線刻がある。537～539は台石で、明確な稜線のみ図化した。537は集石遺構内の配石に転用されており、赤化している。また、複数の敲打痕を有する。538は20kg、539は30kg程の大型の台石である。539の正面中央部には弱い敲打痕が確認される。(山田)

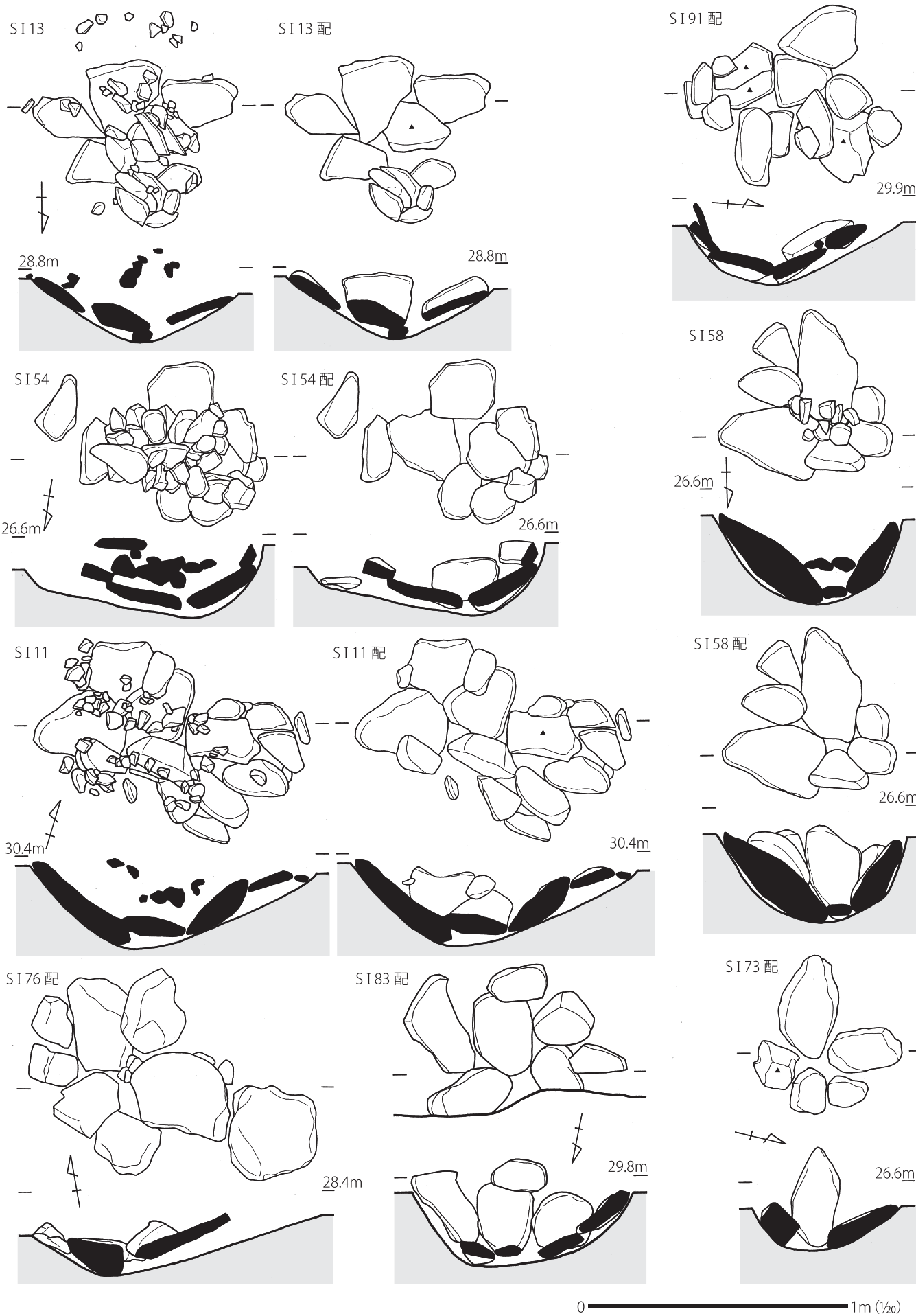
I Aア類



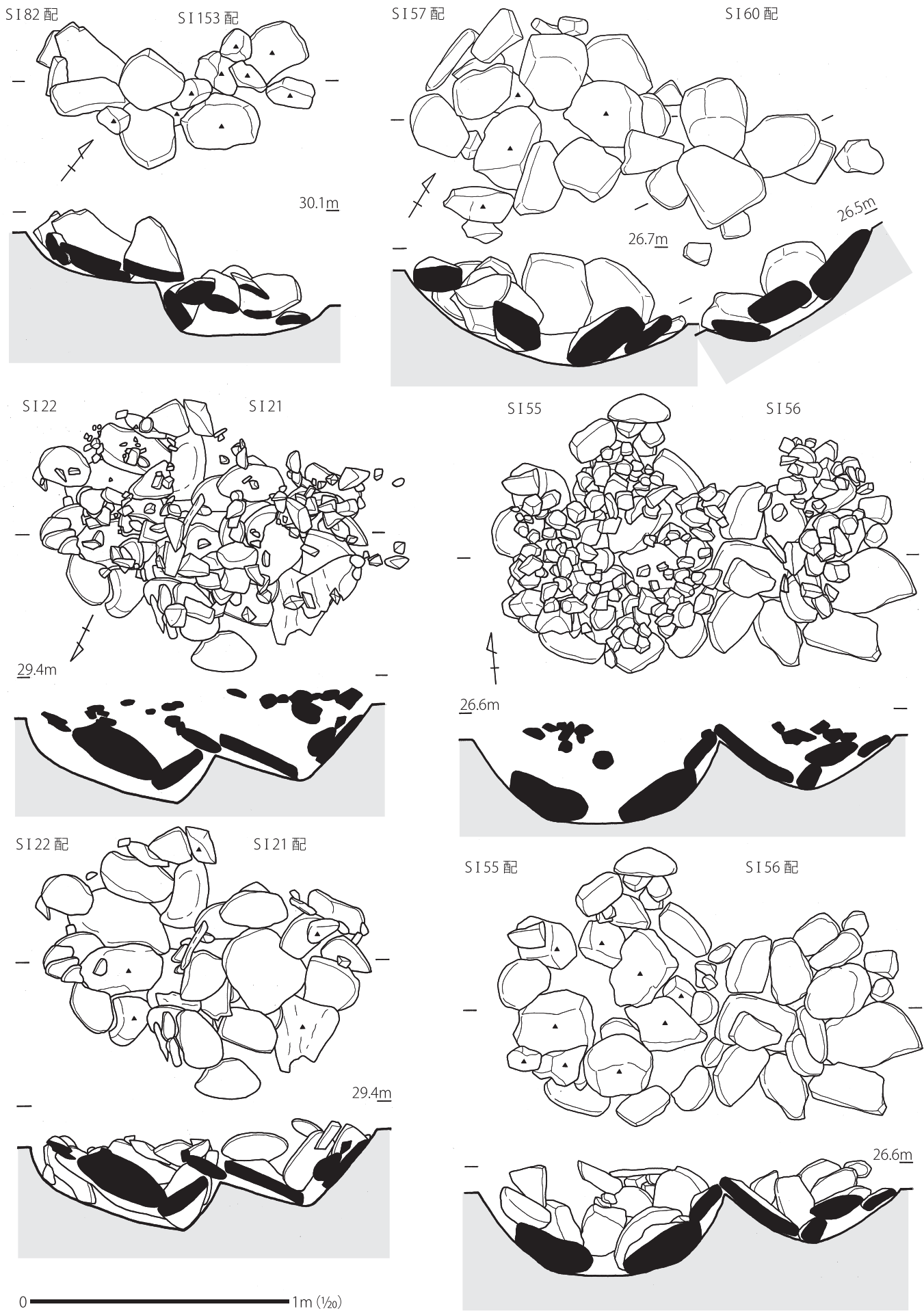
第24図 森ノ上遺跡集石遺構実測図(1)



第25図 森ノ上遺跡集石遺構実測図(2)



第26図 森ノ上遺跡集石遺構実測図(3)



第27図 森ノ上遺跡集石遺構実測図(4)